

真・魔王ノツブ 織田家最後の日！

天魔雅犯土

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦国の空の彼方から迫るゲッターエンペラーの脅威！

人類の未曾有の危機の前に、一人の戦国武将が立ち上がった！

その名は第六魔王、ノツブ・織田！

彼女は、自らの弟であるカツツ・織田と共に、ゲッターエンペラーの使者たるフォーリナーの魔の手に立ち向かっていくのである!!



この作品はFate／シリーズとゲッターロボのクロスオーバー作品です。

- ・ガバガバ設定
- ・ガバガバ日本史
- ・ガバガバゲッター線

上記の三ガバを気にしないで寛大なお心で見てくださいる方以外は、ブラウザバックする事をお勧めいたします。

目次

プロローグ

団欒

起動

目撃

渴望

絵画

熱中

兄弟

業焰

姉弟

鼓動

成長

虚実

悪夢

予見

憑依

脈動

夢宙

孤独

使者

選択

葬式

本質

母親

1

6

13

18

23

28

34

41

47

54

60

67

73

81

87

93

100

106

112

118

降臨	大望	招待	来敵	反発	化生	機兵	会談	訪問	失踪	始動	覚醒	慟哭	屈服	狂情	先人	世界	謀略	再来	研心	激動
255	245	236	226	219	208	203	196	189	183		172	166	160	153	147	142	135	130	124	

プロローグ

団欒

「おのれノツブ私の羊羹をよくもと言う事で叩き込むご挨拶三段突きいー！」

「背後からの一撃なのじゃあああっ!？」

「あっ、姉上ー!？」

いきなり飛んで来た沖田さんの一撃で、取り敢えずノツブが流れる様に死んでいく。そして卒倒した姉上に駆け寄る信勝君。そんな光景を横目に見つつ、今日の食堂メニューのカレーうどんを啜る。マシユもいい加減にこの光景に慣れたのか、少し困ったような笑顔をしているばかりだった。

「お二人共、あんまり暴れるとエミヤさんに怒られてしまいますよ」

「止めないでくださいマシユさん！ 悪逆非道の魔王は此処で討たねば！」

「ふ、ふふ……このワシが倒れようと、何時か第二、第三の織田家姉弟が現れ、比叡山の生臭坊主でバーベキューをするであろう……」

「この人斬り風情が、姉上に何をやる！ 姉上、新しい髑髏です！ これで再臨して相性ゲーの得意ぶりを見せ付けてやりましょう！」

「良くやった信勝……っってもう最終再臨まで行っておるわー！」

仲良いなあ。

素直にそう思う。とてもではないが、生前弟が裏切って敵対した姉弟——叛逆した側の事情は兎も角として——とは思えないくらいには仲がいい。その辺りは下手に言うとう首が飛ぶので言わないけれど。

しかし、相も変わらずノツブの発言は吹っ飛んでいるというか。生前からこうだったのだからまあついていけないという人がいても不思議じゃない。

「と言うかノツブ、第二はカツツが居るけど、第三は居ないよカルデアに……」

「お主それは言わないお約束じゃろ。まあ別のワシ呼んで来ても良い

けど、それじゃ結局ワシだから芸がないんじやよなあ。まあ」

「森君に代役やつてもらおう？」

「森家じゃろ可成の奴は……いやー、第三の織田家やつてくれる奴、誰か居たかのう？」

そう言つてノウム・カルデアの天井の蛍光灯を見上げるノツブに、ちやうど一つ気になった事があるのでちよつと質問してみる事にする。第二、第三とか言える位に、ノツブに兄弟が多かった印象が無かったのだ。子供は結構いた、と言うのは聞いた事があるのだが。

「そういえば、ノツブつて信勝君以外に兄弟っているの？」

「んー？ おるっちゃおるが？ 腹違いの兄弟ならまあ馬鹿程おつたわ本当に」

「そうなんだ。じゃあ、ノツブの直接の兄弟は信勝君だけなんだ」

そう言つた時、ノツブが一瞬、何も言わずに黙り込んだ。

そして、こつちをちらと見たのだ。その眼は……なんと言うか、少し揺れているような気がして。泣きそうにも見えて、でもそれともほんの少し違う様な。

——強いて言うなら、そうだ。寂しそうな、そんな表情を、見せた気がした。

昔を懐かしむ様な。もう戻らないものを、慈しむ様な。

普段からノツブが余り浮かべない。そんな表情をした。

「——おるよ。もう一人。同じ母の胎から出て来た姉弟は」

「え……？」

それは本当に一瞬だけで。あつと言う間に何時もの調子を取り戻したのだが。

けれど。明確に表情が変わったのは、ノツブだけではなかった。ノツブの傍らに居た信勝君は、表情を変えないまま、少し気まずい様な顔をしている。

何か聞いてはいけない事を聞いてしまったのか……とも思ったが、しかしながらそもそもそう言う事を聞いたら冷えるどころか、ワンチャン首が飛びそうになつて終わりまであるのがノツブだ。

「秀隆……幼名を喜六郎と言うてな。ワシの一つ下。三男坊だった」

「ヒデタカ、さん？」

「うむ。可愛い弟であつたよ」

それが、こうして話しているのだから、恐らくはそういう類の物じゃない。このまま話を続けて良いのだと判断する。

それにしても、織田ヒデタカ……聞かない名前だ。

信勝君は一応、歴史の授業で、ノツブの弟さんとして偶に話が出てくる事もあつたが、本当にそのヒデタカ、と言う人は名前を聞いた事が無かつた。

「——ええ。そうです。僕にとつても、可愛い弟でした」

と、そこに。珍しく姉の会話に割り込む様にして信勝君も会話に加わつて来た。だが、それにノツブは驚いた様子もなく、寧ろニヤリと笑つて見せる。

「なんじゃ、珍しいの信勝。何時もは話に入るでもなく大人しくしておると言うに」

「……喜六郎は、僕の弟でもあります。姉だけが話されて、除け者にされるのは、ちよつと寂しいですから」

「それを普段から出してくれば、と思わんでもないが」

「——えつと、見つけました。織田ヒデタカさん」

こうして話題に出していたからか、どうやらマシユも気になって調べていたらしく。手元のタブレットに件の人物の情報が表示されていて、それを皆の下に差し出した。

覗き込んでみると……そこには、土田御前の子、三男坊、と言う情報と共にその人……『織田秀孝』の名前が表示されていた。

写真等はなく、ノツブのデータベースを見た事があると……失礼な物言いではあるが、内容が、やはり薄い、というか。後世にあまり伝わっていない事も多いのだろう事は、それだけで想像出来た。

「……アレ？」

そのページを見て、真つ先に首を捻つたのは、信勝君だった。

「どうしたの信勝君」

「秀隆の名前だよ。『秀孝』って書いてあるけど、文字が違うんだ」

「えっ？ そうなの」

「そうだよ。なんだこの資料、喜六郎の名前も正しく書けないのか？」
「——信勝、そうではない。それが正しい」

弟の名前が違う、と憤慨する信勝君に対し、待ったをかけたのはノツブだった。思わずと言った様子で、信勝君が振り返ると、ノツブは一つ溜息をついて、そのまま、そつとタブレットの表面を……正確には『秀孝』と言う名前をなぞった。

「これはワシがこう書き換えさせた。万が一も無いように、弟の痕跡は一切を残さぬように」「……そんな、姉上、本当にやったんですか!？」
「やると言うておいたであろう信勝。ギヤーギヤー喚くでない」
「ですけど……!」

……今日は、とんでもない日だと思う。信じられなかった。信勝君がノツブに逆らう。というか、言葉を返しているだけでも驚きだ。基本的にノツブの言う事に『流石姉上!』と全部よいしよする勢いだつたのに。

しかも、姉の目を正面から見てしつかりと自分から話しをするって事が、信勝君とある程度触れ合っていると、天地がひっくり返っても無いと思っていたから、驚きは倍々位の気持ちになってくる。

「仕方あるまいよ。可愛い弟じゃが、決して世に何かを遺してはならぬ忌み子でもあった」
「……!」

忌み子……と言うその言葉で浮かべた、信勝君の表情と、口にしたノツブの表情はあまりにも正反対で。片や少し泣きそう、片やまるで無表情。

自分の弟に対して、忌み子……という、半ば差別にも等しい強い言葉を使うのが、一体どれだけの事なのか。ぼんやりとではあるが、俺にも理解できる。故に……俺は、あえて踏み込もうと思った。

それがノツブについて、どんな思い出なのかを。知るために。
「——ノツブ、いったいどういう事なの?」

「ふん……まあ、もう世界も滅んでおるし、カルデア内々であれば……あやつの弔い代わりにでも、話しても構わんか」

「——あやつは、絵が好きでな。始めに描いた絵は、ワシも見た事はは

無いが……まあワシが初めて見たあやつの絵は、ワシにとって好みのものじゃったよ」

起動 目撃

尾張国は、応仁の乱を経て、二つの勢力に分かれた。その二つの内、大和守の傍系たる弾正忠家を躍進させた織田信秀。その三男として……織田秀孝、幼名喜六郎は生を受けた。

武家の三男という立場は、そこ迄注目されるモノでも無く、傍に付けられた乳母と、しっかりと立てる様になるまで、実に、実に穏やかに日々を過ごす。

母と会った事も無かったが、大名の子として恵まれた生き方をし、何一つ苦勞する事も無く。まるで平凡な日々を過ごして来た。

——転機が訪れたのは、雲一つない、何処までも晴れ渡った晴天の日の事だった。

「喜六郎さまー、何方にいらつしやいますかー」

自分を探す声を聞き流し、彼は縁側に座り込んで、空を見上げていたのだ。昼時、誰も居ない誰も見ていない、そんな場所で、一人きり。それは何時もの事で、彼にとってはなんて事の無い、普通の一日になる筈で。

ふと、空を見上げた。何時もと違うのは、ただそれだけの事だった。

「ああ、此方にいらつしやいましたか。お食事の時間ですよ」

「——ばあや」

「はい。どうなされました」

「おそらに、おおきなきずがあるよ。あれは、なんなの」
気になった事があったのだ。

青空に見えた緑の線。畝って、枝分かれして、揺らぎながら伸びる。長い、一本の輝きの様な何か。それを見た時、彼にはそれが大きな大きな、空に出来てしまった、不思議な傷に見えたのだ。

指差して、自分を世話してくれる乳母に、あの辺りにあるのだと示した。

「傷………？」

「そうだよ。すうって、のびてる」

「……喜六郎様」

「あんなおおきな、みどりのきず。みたことないよ。すごいきれいだねえ」

それは酷く、彼の目を惹きつけた。

一人きりで、どうにも寂しかったり、詰まらなかつたりする、そんな日々で。初めて見つけた、とてもとても綺麗な、何か。それを誰かと共有したくて。

「そんなもの、見えませぬよ?」

「……え?」

「何かを見間違えたのでございましょう。さ、ご飯にいたしましょう。行きますよ」

けれど。

そんな物は見えないと。

でも、彼の目には写っているのだ。翡翠に輝きながら、ほら今も。木漏れ日の様に緑の輝きを漏らす、大きな大きな空の傷が。幾らそう言っても、何も信じては貰えず。最後には嘘を吐くと閻魔様に叱られますよ、等とたしなめられて。

しづしづ、言うのをやめたけれど。

「——あるんだ、あそこに。ほら、あんなにも、おおきくて、どこまでも、どこまでもつづいていて。どうして?」

だからと言って、その傷が消えたわけではない。光を放って、何処までも続いて。寧ろ、さつきよりも、ギラギラと、輝きを増したようにも見えて。それが少しまぶしくて。思わず彼はその傷から目を逸らしてしまった。

それくらいに、あの傷は『そこにある』事を示しているというのに。当たり前のようにそこにあるというのに。どうして、彼女には見えないんだろう。それが、不思議で不思議で、しようがなかった。

その日は、それで事は終わったけれど。

彼にとって『傷』の事は、その日だけの事で終わる事も無いくらいには、実に不思議でならなかったから。それくらいに、その『傷』の

存在感は、大きかったから。その不思議な傷について、知りたくなつたから。

——彼は、次の日から空の彼方を眺める事を、日課にする事にした。何時も、自分の部屋の近くの縁側から。遠くの空を眺め、その傷が何かを教えてくれるのを待った。雲の形が入道の如くにも変わっても。空の青さが変わっても。そもそも雨雲が空を隠したとしても。それは、変わらずに空に有った。

揺らぎ、降り注ぎ、そして消えていく傷から降り注ぐ緑の光は、太陽の光とは明らかに違いうねり、曲がり、流れていく。風にも、雨にも、雲にも遮られる事も無く。

しかし、何処までも永遠に、という訳ではなく。最後には消えていく。薄らいでいくのではなく、ぱったりと。

「(おそらにきらわれているみたいだ)」

何時見ても傷の入った空が、翠と蒼で彩られて綺麗なのは間違いない。ずっと飽きもせず見て居られたのはそのお陰だったろう。

でも……そうやって来る日も来る日も見つめていても。穴が開く程に見つめていたとしても。流れていく雲の行き先、空の色。それは幾らでも分かっても、空の傷が一体どんな物なのか。結局は、何時まで見つめていても、分からなかったのだけれども。

——ふと、何時ものように、空を見つめていた時の事だった。

その日は、やはりどこまでも蒼くて、珍しく雲一つすらなくて。見ていると、自分が吸い込まれてしまう様な。そんな透き通った、空。子供ながらに、こんな日は何か起きるのかもしれない。なんて思っ
て、いつも以上に目を皿の様にして。

ぎ

そんな、音がした気がした。

それは、廊下を誰かが歩いて来る時の音にも似ていた。誰か来たのだろうか。と思つて周りを見渡しても誰も居ない。立ち上がって、廊下の向こうまで見渡してみても。誰も居ないのである。

気のせいか。

そう思い、もう一度空に視線を向ける。緑の光はやはりどこまでも伸びて、しかし何時もの辺りを超える事も無く……と、思っ居た時の事だった。

「……あれ？」

消えない。何時もより、長く、伸びている。劇的に長くなっている、という程ではないけれど。子供ながらに、ずっと変わらぬ空を眺めて来た彼には分かった。長い。伸びている。何時もと、少しだけ違う。何か、他に違いは無いか。思わず、軒下から抜けだして庭に駆けだして。もつと見やすい場所で見ようと必死に目を凝らした。

ぎ

そんな時、再びその音が聞こえた。今度は、間違いない。気のせいではない。

一応、見回してみても。やはり誰も居ない。今日は、何か不思議な事が起きている。と思っ居ても、でも、空とこの音。何方を気にするか、と言えば、やはり空で。

空の傷に目を向けて。ふと気付く。

ぎ

この音は、空の方から響いているのだ。あの傷の方から、この音は聞こえてきている。間違いない、と心が躍った。今日は、あの傷が何かを自分に教えてくれる日なのだろう。

思わず手を振った。嬉しくて。傷に向けて。

振り返って欲しかったわけじゃなくて。何となくそうしたくて。

それに合わせるように、ドンドンと、翠の光はその伸びる長さを増している様に見えた。

ぎ

それにしても、何だろう、と思う。この軋む様な音は。少し耳に残るような、僅かに嫌な音は。どうしてこんな音がしているのだろうか……その答えに気が付いたのは、しばし傷の方を見つめた、その後の事。

ふと、蒼と翠の風景に、もう一つ色が混ざっているのが分かった。

翠の傷の間に、ほんの僅か。混ぜた黒。一筋だけ混ぜた黒。そんなものが、傷の間に現れるのは、本当に初めての事で。

「あっ」

声を出して驚いたのは、それだけが理由では無かった。

ぎ　ぎぎぎ　ぎ

その音がした直後だった。黒い、線が少し、太くなって。そして、翠の傷が少し広がったようにも見えた。黒が増えた分、翠が押しつけられた様だ。

そこまで考えて、ふと気が付いた。

——傷が、開いているのではないか。

そう思ったらわあ、と自然に声が漏れた。

今まで、何なのか、どうしてそんなものがあるのかも分からなかったその傷。それが開いて。その向こうには透き通る様な蒼ではなく、何者も侵せぬ様な黒がある……何かが在るのだ！　その先に、空とは違う何かがある!!

殊更に、ひと時も見逃したくなくて。出来るだけ瞬きもしない様に、口元をキュツと引き結んで、頑張つて目を開いて、空の彼方を見つめて。

ぎぎ　ぎぎ　ぎぎぎ

音はだんだんと大きく。それに合わせて、傷が開いていく。

ふと、その最中、光が見えた。傷の先にある黒の中に、瞬く輝きが見えた。それは夜に見る、星のそれとよく似ている気がする。あの先にあるのは、夜空なのだろうか。昼なのに夜なんておかしい。どうして傷の先は夜なんだ。

「——あ」

夜の奥を見つめていて、星の瞬きの中に、一際大きな輝きが一つ。いや、二つ。まるで隣り合うように、光っている。強く。綺麗だ。あの傷は、この二つの光を隠していたのだろうか。だったら、納得も出来る。

「(あんなにきれいなもの、ひとりで、みていたいよね)」

でも、見せてくれた。あの傷は、自分だけに。あの輝きを見せてく

れたのだ。それが、殊更特別なことな気がして。なんだかとても嬉しかった。二つの星は、まるで此方を見つめている様で。その星を、喜六郎もしつかりと見つめていた。

傷から見える黒い夜空は、今も広がるのをやめて居ない。

ぎぎぎ　ぎ　ぎぎぎぎ

より大きく。より広く。既に見えている蒼い空の半分以上は真っ黒な空に入れ替わってしまったているのだ。二つの星の周りに瞬く輝きはより数を増やし、本当に夜空を見ている位に美しくて……

ふと、ある事に気が付いた。
違う。

二つの星は、大きさが余りにも違い過ぎる。瞬く光にしか見えない他の星と違い、確実に輪郭を持った、円に見えて……いや、そうじゃない。あの二つの光は先ほどは、少し輝きが大きな、光に過ぎなかったのに。円になっているのだ、気が付いた時には。

「……ちい、きてる」

アレは……円ではない。光が円になっている様に見えただけで、もう今は、細くなつて行っている。アレは……眼のように、見えないだろうか。

空の彼方で、あんなにハッキリと見える眼。大きい、どころの騒ぎではない。しかも今も近づいてきていて、更に大きさは増して言っている。それに……近づいてきて、漸く分かった事がある。

アレは……間違いなく、此方を見ているのだ。此方に向けて、近寄ってきているのだ。

「――あ」

そして、見えてくる。目があるのであれば、当然。顔がある。

黒の中から滲み出てくるそれは……赤い色をしていた。血の赤とも違う。夕焼けの赤とも違う。深い、しかし、余りにもハッキリとした、赤。黒を押しつけるような、目に痛いほどの赤。赤!!

輝く瞳だけではなく緑の輝きを顔全体に湛え、最早星の輝きなど気にもならない程、その側頭から角を五つ、雄々しく生やしたその顔面の形相たるや。人とは思えぬ……否、この世の物とは思えぬ、見た事

も無い。

もはや、黒はほぼ赤にとって代わり。

黒の奥から、翠の輝きは濁流の如く溢れ、既に蒼を喰い尽くす!!

——違う。

大きい等という話ではないという事を、理屈ではない。感覚で理解した。アレは、アレは、アレは！ 三千世界の何者をも見越し、手中に収める事も容易いのだ!! 天より地へと当然の様に手を伸ばし大地を掴み持ち上げるのも容易からう!!

もしあれが出てきたら空の果ての何処までも、あの紅が全てを埋め尽くす。天地の全てはアレの照覧の元、人々は恐怖するだろう。

敵いようのない、絶対的な『力』に。

それが、見ているのだ。此方を。

否……見ているのではない!! 今、自らを、目指して——!!

「……」

「——ああああああああああああああああああああああああああああああああ」

乳母がその場に駆けつけた時。彼は天を見上げ、叫んでいる……というより、ただただ口を裂けるほどに開いて、大声をもらしていた。屋敷中に響く程に。目は虚空を泳いだまま、ピクリとも動かない。

傍から見れば、乱心か、はたまた悪霊に取り憑かれたのか。

すぐさま家臣に抱えられ部屋に運ばれ……医師や祈禱師が呼ばれる騒ぎになった。

彼が本当は何を見ていたのか。それを、知っている者は誰も居ない。

——それから暫く、彼は全く外に出なくなり。自らの部屋に引き籠もり、ただ震えるばかりの生活を送る様になった。

渴望

——心が休まる時は、喜六郎には無かった。

もし外に出た時、もう一度あれを目撃した時。自分がどうなってしまうのか。それを考えてしまうと部屋の隅から一步も動けない。そもそも、部屋の中で目をつむっていても、瞼の裏にアレが浮かんで来て、目を瞑って堪える事も出来ない。

部屋の畳の目を一つ一つ数え、必死になつて気を逸らそうしても。あの日の空と、耳に聞こえる音、そして浮かぶ傷の事が頭から離れない。記憶の中でも、じいと自分を見つめているのだ。

アレは、何なのか。

寝物語に聞いた鬼の仲間か？

ちがう。そんな物じゃない。

喜六郎は、様々、アレを自分の中で知っている物に例えようとして。しかしどれも決して当て嵌める事が出来なかった。当て嵌めて、せめて理解の範疇に抑えようと、本能的に努力をしていたのだが。それも上手く行かない。

自分の理解の範疇を超えた存在に対し、どうしようもなければ、後ほもう取り乱す事しか人間は出来ない。そこまで年を経て居ないならば、猶更の事だ。

誰か部屋に入って来るのが耐えきれず、部屋の隅まで這って逃げた。

そもそも、誰にも触れられぬように、近寄ろうともしなかった。

食事もとらず、無理に食わせようとするならば、器をひっくり返し、抑えようとした手から必死に逃れようともがき、それがダメなら指に歯を向いて噛みついた。誰も近寄らせまいと、暴れた。

世話をしようとしていた者達も、その様子を恐れてか、全く誰も近寄ってはこない。とっくに空腹で倒れても不思議ではない頃合いだというのに、全く疲れる気もしなかった。

では一人でいれば普通に過ごせたのか？ 決してそんなことは無い。鳥のさえずり、虫の羽音、すきま風、家鳴り、人の喋り声。音だ

けではなく、部屋を開けて差し込んで来る、日の光、行燈の明かりからすら逃げ出す始末。過剰に。あらゆるものに反応してしまう。

目に映る物、全てが此方へと迫る驚異の存在に見えていた、と。もし仮に言われたとしても誰もが信じる程に荒れ、狂っていたのだ。彼は。

今も、空の彼方から見ているのだろうか。そう思っただけでも、寝られない。

夜中も、爛々と、目を見開いて過ごしていた。静かに輝く月も、部屋の隅に溜まり切った闇も、睨みつけて過ごす。決して、あらゆる異変を見過ごしてしまう事とのないように、と。

しかし、そんな一睡もせず、気を張っている等、大人でも長く保てない。

先ず、叫ぶ喉が枯れ声が出せぬようになった。次に、目が掠れ、殆どマトモに物が見れなくなり、最後には……物音すら、ぼんやりとしか聞こえず。気にも留められなくなる。口を締めて置く事も出来ず、だらしなく開かれたまま。

まるでその姿は幽鬼のようですらあって。呻く事しか出来ない。心身は削れきって、もう、自ら何かする事すら出来ぬようになって行った。

そんな状態に陥って、幾日が経ったか。

腐った食事と、倒れた家具、そんな中心で、呆然と天井を喜六郎は眺めていた。

「――入りますよ」

もはや、誰が入っても反応すら示さない。そんな状態になって、しかしながら。誰も入る事も無くなっていった室内に、堂々と入ってくる者が一人居た。

喜六郎にはもうそれが一体誰かも分からない。それを考える事も、出来て居ない。

そんな彼の前に、影が差す。

遮られた光と、刺した影の差で、ようやく反応して、体を起こした。それでも追い出そうなどと言う気にはならない。何も考えられないまま、ただ見上げる事しか出来ない。

「酷いものですね。悪いモノに取り憑かれた、という話でしたが。ここまでとは」

「御前様!! 危のうございます! 喜六郎様は!」

「コレは私の子。何を恐れる事がある? ——何をしているのです」

「立ちなさい」

— パァン!!

その刹那の後だった。

乾いた音と共に、小柄な体が容易く畳を転がった。呆然としていた意識が、痛みと共に一気に引き戻されていく。喜六郎は、先ず、霞む視界でもう一度、その人物を見た。何が起きたのかを、考えるよりも前にだ。

その女性は、堂々と。日の光を背に背負って、真つすぐに立って。喜六郎を見下ろしていたのだ。

「何を怯える事がありますか。しゃんとなさい」

頬を叩かれた、とか。謝りもしないで、とか。先ず、考えなかった。目の前の女性に、喜六郎は間違いなく見惚れていた。自分と同じ色の、真つ赤な、燃えるような瞳に、喜六郎は見惚れていた。

覚えている。あの巨大な十二かの瞳とは違う。綺麗で、真つすぐな目だった。

誰か入って来ても只管に追い返していた。内なる衝動に身を任せて。不思議と目の前の女性には、傍に寄りたいたすら思い……少しふらつきながらもその女性に近寄ろうと、震える足に喝を入れて……歯を食いしばって立ち上がったのだ。

「き、喜六郎様!」

「あら、立てるではありませんか」

寧ろ……暖かさすら感じた。そのぬくもりに向けて、彼は必死に近

寄ろうとしていた。この荒れる心から、何とか逃れよう。安寧を得よう。必死になって、近寄ろうとした。震える手を、出来る限り遠くへ伸ばした。

そうして伸ばした手に、触れる感触があつた。ぼやけた視界に写るのは自分の薄汚れた手に触れる、白い、綺麗な手。

「しかし、汚れがひどい……体を洗わせなさい」

「え……いや、しかし、喜六郎様は部屋から出たくない、と」

「何を言っているのです。その様な情けない言葉に従わず、この子の乳母であるのなら無理にでも連れ出しなさい。それこそ、真の忠臣の在り方でしょう」

——ここから出る。

先ほどまでそんな事を考えつきもしなかつた。外の全てが恐ろしく感じていたのだ。でもこの人が言うのなら。別に出ても良いかもしれない。そう思った。

「……あの」

「ん？ 何です」

「あなたが、ついてきて、くださるのなら……です。ここから。おねがいします、そばにいて、ください」

あと少しだけ。この温もりの傍に居たい、というのが彼の本音であつた。故に、最早掠れた声しか出せぬ喉で、必死に訴えたのだ。

貴女に従いますから、決して離れないで欲しい、と。そう言われた女性は……一つ溜息を吐いて、乳母に向けて振り向いた。

「行きますよ」

「えっ？ し、しかし御前様」

「構いません。子に寄り添うのは、母の役割でしょう」

——そうして、喜六郎は久しぶりに部屋を出た。その手を、女性に握られて。

汚れていると言った割りには。優しく、確と、握られたその手を、彼はじっと見つめていた。一体この人が誰なのか。喜六郎は未だ知らなかつたけれど。それでも、この人に自分が救われたという事は。何となくわかつた。

だから……彼は何も言わず、その手を少し握り返した。
その手は暖かくて。少し、凍り付いていたように動かなかつた顔
が。少し、動いて。笑えた気がしたのだ。

自分を連れ出してくれた彼女が、自分の母親である事を、喜六郎は
その時知った。名前を、土田御前という。

曰く織田家の、武家の子として醜態を晒していた息子を諭しに来た
のだ、と乳母は喜六郎に語った。とても子供思いの優しい方である、
そうでなくては今の喜六郎の元へは来ないだろう、とも。

喜六郎は、自分が何かしらに取り憑かれている、と噂されて、多く
の織田家の者から距離を置かれていた事を知った。

そして、そんな自分に母が会いに来てくれたのを、知った。

「喜六郎様、御前様に感謝せねばなりませんよ」

そう乳母には言われたが、そう言われずとも、彼は漠然と、母への
感謝を胸に抱いていた。感謝、というには余りにも形をもたない、淡
い物であったが。しかしそれ程形容するのも難しい、原始的な気持ち
だったからこそ。彼の胸の奥、其処にそれは、刻まれた。

絵画

土田御前に連れ出されてから。喜六郎は、漸く人並みに外をうろつけるようになるまで回復した……と、言う訳でもなかった。確かに、外を歩けるようにはなった。が、一人で歩き回れるかとなれば話が變わってくる。

何せ、土田御前の一喝、鶴の一声で漸く引き戻されたのだ。彼女の影響が彼に与えたものは大きく、彼女が居なければ落ち着かない。暴れる事こそなくなっただけで、一人の時は常日頃からびくびくと怯えた様に震え、俯いてばかりいるばかり。

常日頃から、大名の妻たる彼女が喜六郎の傍に居られる訳もなく。しかし乳母が彼女の代わりになるかと言えば、そもいかなかった。

母がいないときに外に出たいかと言えば、まだまだそうでもない。結果として、憑き物の噂は消えたというのに全く部屋から出てこない喜六郎が出来上がり。今度は家中の者に、外に全く出てこない、引きこもりの軟弱者の烙印を押されかねないような有様であった。

「喜六郎様、御前様にまた叱られてしまいますよ」

乳母にそう言われ、何とか人として最低限の事をする位で。

彼のそんな状態が改善されたのは……もう一度喜六郎の前に、土田御前が姿を見せた時だった。

「何を怯えているのです？」

彼女は、部屋の中の喜六郎を見てそう言った。

前と同じ言葉を、今度は問いかけとして。こんなに良いお天気で、庭は緑青々と、何も問題ない美しい景色ではないか。何をそんなに怖がることがある、と。

喜六郎は……母の言葉に対して、何とか答えようとしたが、出来なかつた。聞かれている事を、どうにも言葉に出来なかつた。どんな言葉にしても、何かが違ったのだ。

しかし、それでも必死になって何かを言おうとした喜六郎だったが、それは土田御前の溜息によって遮られてしまった。

怒らせてしまったか。そう思っただけ嫌を伺うように視線を向けた喜六郎に、もう一度溜息が返って来た。

「そのような卑屈な態度をするものではありません。貴方は私と殿の子なのですよ。もっとしやんとなさい……とはいえ、そう容易くはいきませんか」

少し考える仕草をした後、御前はこう口にした。

「――紙と筆、それと墨を持って来させなさい」

それは普通では出来ないやり方だった。彼女が大家として贅沢を知っていたからこそ思いついたやり方だった。

乳母に頼まれた一式を持って来させた後、彼女は先ず紙を喜六郎の前に置いたのである。何気ない事のように。

「描いてみなさい。何を恐れているのか」

取り敢えず。土田御前は、自分の子が何を恐れているのか、知るところから始めた。

それも、当事者に描かせる、という到底普通ではないやり方で。文字が書けないなら絵で描かせればいいと思っただけか。それとも言葉をつらつら言われても分かりにくいから絵で描かせた方が分かりやすいと思っただけか。

兎も角、普通にややこをあやしたり、不安を取り除くやり方では、到底ない。

喜六郎からしてみれば、筆の使い方も何も分からないのに、いきなりそれらを出されても、戸惑うばかりだ。描け、と言われても何をすればいいのか。

「ほら、喜六郎さま、こうやって……墨を、筆に付けて……」
「……」

「紙の上に、筆を、走らせるのですよ」

しかし、それを見かねた乳母が、紙と墨がどういうモノかを、実際に使っただけ見せた。

白い紙の端を、ちよつとだけきつと黒で染めて……その時である。

どうやって使うかを理解した時、彼の中で、何かがガキリと噛み合っ
た。

「……！」

「きゃっ……!?!」

彼は、目の前の乳母が差し出したその手に飛びつくと、筆をふんだ
くって目の前に向き直り……そのまま、白い紙に向かって振り下ろし
た。

筆の力加減など、こんな幼い少年が知っている筈もないというの
に、紙が破れる事もなく、彼は物凄い疾さで、その白い紙の上に筆を
走らせる。

頭の中に焼き付いた、あの景色を描く為。

目をつぶっても、開いていても。何時だってあの巨大な怪物を見て
いた

血よりもさらに鮮烈な赤、空に走る巨大な傷、無機質で相手を威圧
する瞳。

彼に絵の心得は無かった。だが余りにも強烈で、何時でも鮮烈なそ
の景色を。手が、書き上げようと、伝えようと、物凄い力で勝手に動
かされている様で。

「まあー！」

「ほう……随分と、上手に描けるものですね」

——終わった時、喜六郎の息は疲れによって、少し荒くなっていた。
そうして出来上がった一枚の絵、墨だけで書かれた白黒の一枚は、
天に現れた一文字の裂け目、そしてそこから覗く、二本の角持つ想像
を絶する巨軀の異形が、自分を見つめているその様子を、見事に描き
上げていた。

気が付けば、その裂け目の向こうに居るソレに飲み込まれてしまい
そうな……染みついた記憶をそのままに写し取ったつもりだが。し
かしながら、目の前に居る母も、乳母も。その絵に多少驚いてはいる
ようだが、自分が思っ居る感情からは程遠い。

それが分かったから、必死になって、彼は自分が見た物を母親にも
伝えようと、それを手に取って大きく広げて見せる。

「どれだけアレが『おおきな』物なのか。」

「どれだけアレが『とんでもない』物なのか。」

しばし、土田御前はその絵を眺めて……もう一度、喜六郎に目を向けてきた。

「コレが怖いのですか?」

そう問われ、喜六郎は……再び、少し考えた。

先ほどは、何が怖いのか、と問われ。口に出す事が出来なかったが……絵に描いて、コレが怖いのかと問われて。その時は彼の中で、言葉に出来なかつたそれに、一つの形が与えられたのである。

「……コレ、怖い?」

言葉にした時、喜六郎は、ふと自分の体から力が抜ける気がした。強張っていた体が緩んだのを、彼はそうとは知らず、感じ取っていた。分からない物を見て、分からない感情に振り回されていた。それに、土田御前の言葉で一つの『形』を付けた事で、分からない色々な物は取り敢えず、自分の中で一つの形になった。それ故に、彼は半分ほど、平静を取り戻した。

「大丈夫ですよ。この様な物、何処にもいません」

「で、でも……」

「もしこやつが現れても、私が居ます。怖がることはありませんか?」

「……」

そして、もう一つの方は彼女の母としての言葉が、包み込む様にしてくれた。

確かに、自分だけなら、『怖い』のかもしれない。だけど、母と一緒に居てくれるならどうだろう。彼は一度想像して……自分で、首を振った。

「だい、じょうぶ」

少し、震えながら。

怖くない。とは言い切れなかったが……しかし。それでも。大分マシだと思ったから。そして何よりも。子供として、母親が言った言葉には、根拠のない信頼を覚えていたから。我慢できる、と口にしたのだ。怖がっている態度も、隠せもしないで。

そんな様子を見てなのか。震えながら紡がれた言葉を聞いてなのか……それとも。

土田御前は、彼が描き上げたその絵をもう一度だけちらと見つめた後、改めて喜六郎を見つめて口を開いた。

「……もし、私が傍に居ない時。どうしようもないと思つたら……これを、描いてなさい」

「これ？」

彼女はそつと、喜六郎が描き上げた絵を指でなぞる様にして、示した。

「そうです。自分が楽しいと思つた事を、好きに描きなさい。怖い事を考えずに、楽しい事を考えるのです。こんなに絵が上手いのですから、描かないのも勿体ない」

——それが。

単なる思い付きから出た言葉だったのか。それとも、本当に我が子を思つての言葉だったのかは定かではない。だが、いずれにせよ。喜六郎と言う男の人生に『絵』という物が組み込まれたのは、この時に間違いない。

狂ったように、とは一切の比喩でもなく。その日から、土田御前のいない日は何枚もの紙を贅沢に使い、喜六郎は墨を紙に走らせ続けた。描くものは実に他愛の無いものが多い。

例えば、庭で青々と茂る木や、乳母が仕事をする姿。本当に自分の日常のそれを、彼は取り敢えず描き続けた。

母が言った通り。怖い時は絵に只管に打ち込んだ。別に、絵で売れようとかそう言う事ではなく。子供が口寂しい時に指をしゃぶる様に。一種、自分の心の平穏を保つための行動であった。

実際、絵に打ち込んでいれば、怖い想像をする事もない。理由が些かと歪んでいたのは間違いないが、しかし彼は母に勧められた『絵』という物に、急速にのめり込んでいった。

「お上手ですねえ」

「そうでしょうか？　こんなにもお上手なのですから、高名な絵師様にも弟子入りできるんじゃないかと思うの」

「芸事の道に進まれるのかしら……」

そうして描いた数は、腕に比例する。描いて描いて描いて、その腕は既に家中ではちよつとした噂になる程にまで成長していたのである。

——災厄の如き出来事から、彼は何とか持ち直しつつあった。

が、喜六郎はそれだけを素直に喜んでもらえるような立場ではない。彼は大名の子であるのだ。絵を描く事を通して、漸く自分自身を立て直したとしても、しかしながらそれ以上の事……お家を盛り立てる、血族としての役割を求められる。

三男とはいえ、それは変わらない。

「……」

「き、喜六郎様！　いい加減、集中を」

「ごめんなさい、後で」

しかしながら。逆に言えば彼は絵に没頭し過ぎた。漸く守り役を付けられたというのにその教育にも全く我関せずで、ずっと絵画ばかり

りに没頭するばかり。守り役が青い顔をしているのにもお構いなく。ある意味、当然と言えば当然だ。心の安寧を保つために必死になつて取り組んだ。上手くなりたい、等も思わず。脇目もふらずに。

守り役が口を閉じてしまったのは、きつとその姿を見たからであろうか。コレが下手な絵を描いているばかりであるならば、直ぐにでも辞めさせたかもしれないが。人の間で噂になる程の物を、簡単に潰して良いのか、とも思ったのか。

いずれにせよ、喜六郎の絵を誰も阻む事は出来ず。そうして暫しの時が過ぎたころ。

そんなある日の事であつた。

「喜六郎様、今日は少し、お話がございます」

守り役がそう言った時も、彼はずっと絵に打ち込んでいた。

べたりと地面に座つて描いていたのが、最近は何膝を揃え、前のめりになる様な姿勢で描いている。そうした方が集中できると気が付いてからは、自分からそうするようになっていた。こうなつてしまえば、全く彼は誰かに対して反応する事も無かつた。

「……あの」

「……」

「御前様からの、お達し、なのですけれども……」

「——母上から？」

しかし、その名前が出たなら話は別だつた。

喜六郎にとって母は何よりも優先する存在である。誰がその名前を出しても、直ぐに反応する程には、彼にとって土田御前は大きな存在である。

自然と言えば自然な事だつた。彼が立ち直つたのは、母の言葉が切つ掛けであり、絵という物を教えたのも、母であつた

幼い少年にとって、普通以上に、母と言う存在は大きかつた。

「どんな？」

「お引き合わせたい方が、いる、との事で……」

「会わせたい……うん。分かつた」

そんな母から、誰かに会わせたい、等と言われるのは初めての事だった。とはいえ、彼には母の言葉に逆らう、と言う発想は存在しない。母上が言うのであれば、と何も考えずに頷いた。

「どこに行けばいいの」

「私をご案内しますので、ついて来ていただければ」

「分かった。お願い」

——何時もは、進んで部屋から出たりもしない。

否、正確に言えば何処か、部屋以外を目的地にした事は無い。どんなものを絵に描くかを考えて歩き回るくらいで。最後には部屋に戻ってくる事が殆どだ。

でも、母からの呼び出しと言うだけで、その繰り返しを容易く破る位には、そしてまるで興味も持っていない相手についていく事だつて普通にした。

寧ろ、足取りは軽い位だった。自分の部屋から離れて、行った事も無い様な場所にまで案内されても、全く何も怖かったり、警戒したりもしない。

そうして辿り着いた戸の前。

守り役が膝をついて、頭を下げて。

「御前様。喜六郎様をお連れしました」

『ご苦労でした。では下がりなさい。後は私達だけで話をします』

「承知しました……」

そして去っていくのを眺めながら、彼は一体誰が中にいるのだろうか、と想像していた。彼は、中にいる人物に興味がある訳ではない。ただ、中に居る人物を絵に描いたら、どんな感じになるだろう。それくらいの事は考えて。

取り敢えず、入りなさいと声をかけられて……そつと障子に手をかけて、横に引いた。

先ず、目に入ったのは部屋の奥に座して、自分を待っていたであろう母の姿。凜とした表情も何時ものままだ、と駆け寄ろうとして。その傍らにいるもう一人の姿に、足を止めた。

「喜六郎、先ずは其処に座りなさい」

そう言われ、自分の少し前の辺りを指さされて。彼は足を畳んで、膝をついて座った。

その間も、彼は母親の傍らにいる一人の少年を見つめていた。自らと同じ。紅い瞳をしていると思った。自分とよく似た顔立ちをしているとも思った。だがそれ以上に……なんだか、より母と似ている気がした。

「……あの、母上。その、人は」

「勘十郎」

喜六郎の問いかけにも答えず、彼女は遮るように、その少年の名を呼んだ

「この子は喜六郎。貴方の弟です。これから兄弟として、当主となる貴方を良く支える事でしょう……喜六郎、挨拶をなさい」

弟。兄弟。そう言われ、その相手が何者かを喜六郎は漸く理解した。彼は……自分の血縁なのだ。兄なのだ、と。

自分に兄がいる、と言う事は、乳母から聞かされていた。しかしながらこうして実際に顔を合わせるのは、初めての事だった。自分と似ているのもそうだが、何よりも母とここ迄似ているというのに驚いた。

「き、喜六郎、です」

どのような顔をすればいいのかも分からなくて。取り敢えず、言われるがままに頭を下げた。やり方もまともに知らず、それでも乳母や、守り役がやっていたのを必死に思い出しながら。必然、自信なんて無いその仕草に比例するように、吐き出す声も小さくなってしまう。

何だか、とても居心地が悪い。彼自身、上手に挨拶が出来たとは思わなかったからか。それとも、初めて会った兄に、気後れしていたのか。

「あ……えつと……よ、宜しく、頼む」

そんな兄から帰って来たのは……意外にも、自分と似たような。いや、もしやすれば自分よりもちよつとだけ小さいかも知れない、そんな声だった。

え、と思つて顔を上げたのは、兄の顔を伺おうとしたからだ、しかしそれより先に割り込んで来たのは、やはり母の言葉であつた。

「——兄弟とはいえ、顔を合わせるのは初めて。やはり気後れもしますね。喜六郎」

「は、はいっ！」

「暫しここを空けます。二人で話しなさい」

え、と。二度も同じような感想を抱き、そんな子供からすればとんでもない暴挙に出た母に待つたという間もなく……なんと、本当に勘十郎と、喜六郎を置いて、土田御前はその部屋を後にしたのである。

喜六郎としては困つた所の騒ぎではない。全く知らない、初めて会つた兄の前に放置だ。しかも二人で話せ、と言ひ残されている。彼としては、母の言いつけを破ろうという気持ちには土台なれず、結果として。

「……」

どうすればいいのか。途方に暮れるしかない。

そもそも、喜六郎は物心ついてからというもの、他人と自ら話した経験などロクにない。強いて言うなら乳母との会話がそれに当たるだろうか、しかしそんなもの何の参考にもならないのは、流石に幼い喜六郎でも分かる。

彼は、ゆつくりと後ろを振り向いた。そこに居る兄の顔が、なんだか険しいものに見えてしまつて……どうしても、顔をそむけざるを得なかつた。

兄弟

会話が弾む事など、全く無かった。

寧ろ子供だから会話の機会を作りやすい、等と言う事は一切ない。喜六郎は、初めて出会う兄の前で、完全に途方に暮れてしまっていた。何時もは、話さずとも絵に意識を向けて仕舞えば良かったが、今はそうする訳にも行けなかった。話して仲良くなれ。そう言われたのだから、そうしようと思った。しかしそうする為にどうすればいいかがサツパリと分からないのである。

そもそも目の前の兄は、母とそっくりの顔で、母と同じように無表情で。何を考えているかなんて、喜六郎にわかる訳がない。

「……」
「……」

時折チラチラと、兄に向けて視線を向けるが、そんな幼い救援要請など気付かれる訳もない。言葉にしなければ他人には伝わらない、という当たり前の事すら、今の喜六郎にはイマイチ浸透しきっていない。

なので、喜六郎にとっては全力でやったせめてもの反応の積りだ。それが上手いかわず喜六郎は泣きそうだった。

こう話せばいい、とか。こういう事を話せばいい、とか。そう言う取っ掛かりすらない相手だ。こういう時、どんな相手にも無難に通じる話題の振り方、と言うのを知っていれば苦労はしない。だが、残念ながら喜六郎はそんな経験を持っていない。

だから、こう思うしかないのだ……どうしよう、と。

改めて言うようだが……喜六郎は、完全に途方に暮れていた。そして。

「……おい」
「は、はひっ!?!」

そんなところに急に話しかけられて、驚かない訳が無かった。考え込んで、考え込んで限界になって。途方に暮れた所である。本来、話しかけて貰って嬉しい筈なのに、この時ばかりは全てが自分を責め立

てている様にすら聞こえてしまうのだ。

「……えつと……その……」

「な……ん、です……か」

「な、なんでもない」

そして双方黙りこくる時間が再開されてしまう。

結果。

喜六郎は余計に泣きそうになった。もう実際、少し泣いていた。どうして自分はこんな所に居るんだろう。母上助けて。どうかして。自分ではどうにもできないと早々に諦めて、いもしない助けを求める。

喜六郎は子供だ。本来限界になれば泣き叫びもする……が。それに関しては。信じられない程に心を苛まれた経験から、ギリギリで踏みとどまる事が出来ていた。泣いてもどうしようもない、と言う事を幼い頃に知っていたからか。

その経験と……そして。

母に言われ続けて来た一つの経験が、一助の光となった。

「……あつ」

必死になって重い空気に抗っていた喜六郎の懐から、一枚の紙が零れ落ちた。

それは、先程迄描いていた絵だった。母に褒めてもらおう積りで持ってきたのだが、完全に機会を逃していた……それは、母を描いた一枚だった。

それがひらりと舞いながら落ちて行ったその先は。何と。

渦中の中に居るもう一人、勘十郎の前だった。

「ん？」

「あ、あのっ」

止める前に、勘十郎の目がその絵の中身を捉えていた。

中身をみられるのが、どうして嫌だったのか。それは分からない。

それが、出来るだけ上手に描いたつもり、母の絵だったから……むず痒い気持ちになってしまったのか。それとも。

今、意識している相手に見られるというのが、何となく『マズい』と

思ったから。そこから来る、恐怖にも似た感情を抱いていたからか。

「……」

「あ、の……その」

「お前」

「は、はいつ!?!」

「コレ、お前が描いたのか」

「へ?」

言われた言葉に、きよとんとした。何を言われるのだろうか、と体に無駄な力が入っていたからか。余計に。そして……その質問には、全く以外の事はしなかった。それは確かに自分が描いたもので。誤魔化す、と言う選択肢はまだ彼には存在しなかった。

そして、その仕草に彼は。少しだけ険しかった顔を緩めて。

「へー……上手だな」

「え」

「僕、こんなに上手な絵を見たの、始めてだ」

それから、につこりと笑った。

母と同じ表情をしていた勘十郎が。始めて見せた『知らない』表情だった。

母は、基本的に喜六郎に笑いかけた事は無かった。母が自分を愛してくれている、という自負は喜六郎にもあつたが、しかしながらこの様なハッキリとした笑顔を見せてくれた事は無かった、と思う。

そして、自分の絵をこんなにしっかりと褒められたのも初めてだった。

「——あの」

「ん?」

「よろしければ、兄上の絵を、描きましようか」

ふと、そんな言葉が、喜六郎の口について出ていた。

褒められたのが嬉しかった。

半ば自業自得ではあるが、彼は今まで人に絵を褒められたことが少ない。褒められるために描いていた訳ではないのも間違いないが、何時も『自分の為』に絵を描いていたというのが何よりも大きい。

そんな彼が初めて褒められて。悪い言い方をすれば。浮かれてしまつて……恐らくは、初めて誰かの為に。明確に。絵を描こうと口にしたのだ。

「ほ、僕の絵を？」

「はい」

「……分かつた、描いてくれないか」

それが、彼等。喜六郎と勘十郎の、初めての兄弟らしい会話となつたのだつた。

「——おお！ スゴイ！ 僕だ！ 僕が居る！」

「あ、兄上を描きましたから……」

彼が、今までよりも若干気合を入れて描き上げた勘十郎の似姿絵は……見事な仕上がりとなつた。

正座の勘十郎は、目を軽く伏せ……涼やかな微笑みを浮かべている。まるで本人をそのままそっくり写したかの様な仕上がりである。

その分かりやすい上手さは、渡した勘十郎を、大きく喜ばせた。

子供らしく澆瀨に喜ぶ勘十郎の姿に、喜六郎もつられて笑顔になる。

「凄いじゃないか喜六郎！」

「ありがとうございます。兄上が嬉しいなら、良かったです」

いつの間にか、勘十郎に話しかけるのも、普通にできるようになっていた。まだちよつときこちない部分は抜けないのだが。

「……もしよければ、これからも、兄上の欲しい絵があつたら、描きましようか」

「良いのかー」

「は、はい。絵を描く事は……好き、なので。それで兄上が喜ぶのであれば。暇を見つけた時で、あれば」

それでも。兄と交流する手がかり、と言えはいいのか。それが掴めただけで、喜六郎は全然嬉しかった。それに、自分の描いた絵で喜ん

でくれる人は初めてだった。だから自分の絵をたくさん見て、喜んでほしかった。

そんな子供の無邪気な提案だったのである。彼としては。

「……じゃあ、一つ聞いて良いか」

「はい」

「何でも、誰でも、あ描いてくれるのか」

「え、えっと。はい、出来るだけ、ですけど」

「嘘じゃないよな!!」

「うわっ……」

が、勘十郎の食いつき方は、喜六郎の思っていた物以上に物凄い食いつき方だった。こっちに向けてぐい、と迫るその勢いに、一步のけ反ってしまう位には。喜六郎が最も気圧されたのは、その強烈な目だった。その眼は、同じ子供とは思えぬ程に、ギラギラと力の入った光が宿っていた。

恐らく喜六郎ではなく、大人がその眼を見れば……間違いなくそれを『狂気の光』と称しただろう。

「じゃあじゃあ、描いて欲しい人がいるんだ」

「描いてほしい、人。ですか」

「そうだ。ついてこい」

「えっ？ 今から？ で、でも母上は……」

「お前たちで話せて言ってたろ！ だったら別にどうしたって僕らの自由だ！」

それに気圧されている間に、手を取られ引つ張られるようにして走り出す。先ほどまでごく普通の人にか見えなかった兄が、急に一変した事に、喜六郎は困惑せざるを得ず、止める言葉も思い浮かばない。流されるままに、引つ張られる喜六郎は……しかしながら、何となく、この状況に納得とは言えないが、しかしそれに近い、そんな思いを感じていた。

この強引き、というか。有無を言わせなさ。それと近いものを、形は違えど喜六郎は良く知っている。

「——やっぱり」

母によく似ている。それがなんだから、喜六郎にとっては面白くて。兄への親近感をちよつと強めながら。喜六郎は、引き摺られるままにその部屋を後にしたのである。

業焰

——さて。

ここで連れられていた喜六郎が、ふと気が付く。勘十郎に引つ張られるままに動いていたのだが、しかしながら描いて欲しいと言われても、一体誰を描けというのだろうか。

連れていかれてば分かる事……的な事など一切考えず、取り敢えず疑問に思ってしまったのだから口に出した。

「えつと、兄上……その、誰を描けばいいのでしょうか」

「姉上だ！」

「……あねうえ？」

姉上、と言われ。喜六郎は首を傾げた。

兄が居るのは、聞いた事があつた。だが……姉が居る、と言うのは一切まるで聞いた事が無かつた。少なくとも喜六郎の記憶内では、だが。

知つていて当然、と言わんばかりの勘十郎に対し、正直首を傾げざるを得ない喜六郎。そんな喜六郎を見て、今度は勘十郎が首をかしげて来た。

「そうだよ。姉上だよ」

「えつと、その」

「なんだよ……もしかして知らないのか。姉上の事を」

「は、はい。姉上、つて？」

「ホントに……嘘だろ？ 姉上だぞ？」

次に飛んで来たのは信じられない、という声色の返事だった。しかしそう言われても全く知らないし分からないし想像出来ない。勘十郎が知つていて当然、寧ろなぜ知らない、そんな風に言われても。

喜六郎としては全くもつて、本当にその『姉上』というのが誰なのか、いやとんと分からないのである。

「あの、あの、本当にごめんなさい……でも、本当に知らなくて……」
「全く、お前は僕の弟なんだろ？ なんで姉上の事を知らないんだよ……よし、良く分かつた。なら姉上の所に行く前に、姉上の事を教

えてやる」

ちよつと不機嫌そうになった兄に対し、喜六郎は縮こまるしかない。こういう時はどうすれば良いんだろう、と思つたその直後。

「——良いか、姉上はな、凄い人なんだ」

……たつた一言。そう言われた。

喜六郎は、次の言葉を待った。流石に子供ながらにそれだけでは終わらないだろう、という想像が働いた。だが……一向に次は飛んでこない。

今度は喜六郎が首を傾げる。喜六郎がその人の事を知るための、具体的な情報が一切ないのである。まさかの感想そのものを、とんでもない剛速球で叩きつけられた形だ。そりゃあ困惑も極限に至るだろう。

「……えつと?」

「だから! 姉上は僕よりも凄い人なんだ! 恰好良くて! お綺麗で。それでいてだな」

「あ、あの……名前とかは」

そこで差し込まれた一言に、勘十郎の動きが止まる。

一拍。二拍。三拍……勘十郎は、視線を改めて、此方に向けて来た。

「……き、吉法師だ。姉上のお名前は、吉法師というんだ」

「吉法師、さん。ですか」

流石に勘十郎も、些か以上にすつ飛んだ言い方をしてしまったのを理解したのだろう。誰かを紹介するのに、先ずは名前を言わない、というのは子供ですらやらない。

と言うか喜六郎も、その人の性格や何やら言われても、どうしようもない。先ずは名前を聞かせて欲しいと思うのは至極当然の事で。寧ろ、先ず名前ぐらいからじゃないと、子供の脳では整理も利かない。

と言う事で、先ずはその名前を脳と口で反芻する。吉法師、吉法師と。しかしそうしてみてもやはり、喜六郎にとっては全く聞いた事が無い名前である事には変わりはない。

「やっぱり、聞いた事がない、です」

「誰からもか?」

「は、はい」

少し首を捻り……一つ、勘十郎はため息を吐いた。

「嘘ついでないよな」

「ないです」

「んー、可笑しいな。僕の事は聞かせてある、つて言つてたのに母上……」

そうして首を捻る勘十郎の前に、喜六郎は少し、その吉法師という存在に思考を傾けた。

勘十郎は、凄い人なんだ。と言つていた。喜六郎はあまり人と会つた事はない。凄い人というか、自分が懂れている人……そういった類の人。喜六郎に想像出来たのは、たった一人だけだ。

母。土田御前。彼女の様な人なのだろうか、と考えてみる。

自分に対して甘やかす姿を見せない土田御前。凜とした表情がきれいな母。そして自分を救う事に何の労苦すらかけなかった凄い人。女の人であるのは、姉上、と言う言葉でわかる。土田御前の子。自分の事を褒めてくれた兄が自分よりももつと凄いという人。やはり母の如く、完璧な人なのだろうか。

そう想像してみると。

「……凄い人なんですな」

「——そうだぞ！ 姉上は凄い人なんだ！」

結論として、勘十郎と全く同じ結論に至つたのは……何と最早、一種の落語のオチのようですらあるのだが。

——梢が音を立てて、そこにはたばたと足音が混ざる。

既に二人は家を出て、喜六郎は物珍しそうに周りを見渡している。それもその筈で、彼は外に出た事が無かった。箱入り、と言うよりは本来外に出ても不思議じゃない時期に、アレに遭遇したからか……兎も角、初めての経験だ。

「(きれいだ)」

そんな彼にとつて、家の外に連れ出された事、と言うのは正に青天の霹靂であつた。

彼の世界は、あくまで母と一緒に過ごした、あの大名屋敷の中だけだ。しかしその限られた範囲の中でも、今までの彼にとってはなにに自由ない『広い』世界であった。

だが、一度外に出てみたらどうだろう。

屋敷のように壁も無く。風は自由に行きかい、頬を撫でて。遠くから聞いた事の無い音が聞こえてくる。外の世界は実に、実に分かりやすく『広大』。目を丸くするばかり。

木々から洩れる日の光が、斑に道を照らす光と影の連続がそれだけで絵の様で。少し遠くに見える川の煌めきの反射が、一瞬自分の目を焼く程に強く、そして美しい。

今まで、絵に没頭していたのは、母から言われた言葉に従って、というのが当然ある。だがしかし、題材を選んでいなかったかと言えばそうではない。自分が描きたい、と思ったものを描いてきた。

こうして外に出て見るものは、どれも『描きたい』と喜六郎に想わせるものばかりだ。

「……きれい」

「そろそろ、この先だ！ 姉上は今日、河原で遊ぶって言った！」

こうして連れ出された事が、結果として喜六郎には大きな贈り物であり。いつの間にか彼が本来連れてこられた意味、理由と言うのを忘れてしまう程で……それを思い出すきっかけとなったのは、勘十郎が、足を止めた事だった。

「ついたー！」

「ついた、って」

「ほら、あそこにいるだろ！ 姉上〜！」

そこは、先程迄見ていた小川の傍だった。

照り返す光と共に、耳に届く涼やかなせせらぎが、喜六郎の耳に届き……そこに、混ざる可笑しな音が聞こえた。

——……ごごおお……ぐうう……

「……姉上？」

「？」

「ね、寝てる……」

喜六郎も、ちよつと度肝を抜かれたような勘十郎の見ていた先を見つめる。そこに……確かに一人、その人物は寝つ転がっていた。

喜六郎は、先ず目を丸くした。地面に寝つ転がる、なんて発想そのものが無かった。寝る時は布団で、少なくとも家の中で……と言うのが、今までの喜六郎の中の常識だったのだがしかし。その人物は……地面の上で、寝つ転がっているだけではなく、普通に眠っていた。

「ちよつと待つてろ……姉上、姉上、起きてくださいよ」

「……んん、なんじゃ爺……もうちよつとくらい良いではないか……」

「平手じゃありません。姉上、勘十郎です」

「んあ……」

近寄った勘十郎にゆすられる少女は、どうにも少女には見えない恰好をしている。なんだったら、家中でも全く見た事の無い恰好をしている。喜六郎は『軽そうな恰好』だと思った。物理的に。

……アレが姉上か。

先ず喜六郎としては『凄い人だ』と言う感想を抱かざるを得なかった。ああして地面に寝つ転がる、と言う事が発想の外、全く未知の行為と言う事で。

そのの是非ではなく『当然の如く地面に寝つ転がっている』と言うその姿、自分との発想の違いに『凄さ』を感じていた。

「……なんだ、勘十郎か」

「姉上、おはようございます。良くお眠りでしたね」

「ったくう……無理に起こしてナクお前……」

暫し揺すられてから、少女は体を起こす。そして……ちらと此方に視線を流した。

——その眼に、喜六郎は熱を見た。

母や兄とよく似た顔。そして、同じような紅い、紅い瞳だった。だが……既視感を覚える事は無かった。

その二つとは明確に違う何かを喜六郎は見たからだ。その瞳の奥に。

目に映る川の輝きすら軽く突き抜ける程に……揺らぎ、逆巻き、立ち上っていた。燃え上がるのは、焰。誰かが触れてしまえば、きつと

あつと言う間に燃えてなくなってしまうだろうと、思った。

では、今こうして見ている喜六郎は、どうなのだろうか。その焰を、恐れるのか。それとも。その答えは……

「……なんだソイツ」

「弟です！ 僕が連れて来ました！ 姉上の御尊顔を絵にしようかと
!!! さあ喜六郎！ お前の腕を姉上にお披露目するんだ！」

——見惚れる。それに尽きた。

その焰は、あの空に見た輝きとは明らかに違う。しかし、しかしながら。それと同じくらいに喜六郎を惹きつけて止まない。

ああではその瞳の焰も、あの天上の奥に潜む紅い巨人の如く。人を押し、そして心を狂わせるものであろうか。それとも。

「——おいつてばー」

「……あ。えっと、は、はい」

……引き戻されたのは、兄の声によつてだった。気が付けば、目の前で勘十郎が此方を軽く睨んでいるのに気が付いた。そして、自分が見ていた彼女……吉法師も、怪訝な顔で此方を見ている。

「なにボーっとしてるんだよ。姉上を描くんだろ」

早く描け、と言わんばかりの勘十郎にそう言われ、漸く自分が大分ぼーっとしていた事に気が付いて、ハツとした。

兄の言葉に、自分がどうしてここに連れてこられたのかを思い出した。しかしながら……思い出しても喜六郎は、その言葉に首を振らざるを得なかった。

「……ごめんなさい兄上」

「なんだよ！ 描くつて言ったじゃないか！」

「あの……紙も、筆も、ないです」

自分が何を描くにしても。急に連れ出された所為で描く道具も、何も無い状態である。

一体それで何を、どうやって描けというのか。それを問われた勘十郎は……一度、二度と目をぱちくりとさせた後、それを早く言え、と天に向けて吠えた。

喜六郎は、そんな事を言う暇もない程に、自分は色々と、いっぱい

いっばいだったのだ。と思った。
「……なんだこれ」

姉弟

「ほーん、絵を、なあ」

「はい。先ほどはちよつと興奮し過ぎて……すみません、姉上」

「あの、兄上は一体どうなされたんでしょう」

「あやつがなんか興奮しとるのは何時もの事だ。まあいい、そこまで言うのであれば、一つ見せてみる」

「あの、ですから紙も筆も無いんです。姉上……様」

「……そうだったな」

河原の大きな石の上に、どっしりと腰を下ろして此方を見据える吉法師。そしてその傍らに立ってはしゃぐ勘十郎。それは喜六郎からみても、とつてもしつくりくるというか。収まりが非常に良かった、と言う風に見える。

このまま二人も普通に描きたい、と思うが。けど勘十郎には『姉上の絵を描け』と言われてるのでそのままやらないと怒られるかもしれない、とか考えたりである……それは兎も角として。

「仕方ないな……勘十郎！」

「は、はい？」

「お前が紙と筆とつてこい」

「えっ、あ、はいっ！ 行ってまいります！」

結局、自分の失態は、自分で拭う事になった勘十郎が駆けていくのを見送ってから……改めて、吉法師に向けて、喜六郎は向き直った。

「えつと……姉上、様」

「様は要らん。姉上で良い」

「分かりました。姉上」

「そっちは、喜六郎、だったか。はっ、姉弟此処まで母上に似ているとは、愉快よな」

改めてみる吉法師は、不思議な少女だった。

喜六郎からしてみても、女子にも見え……そして同時に、男子にも見える。今まで見た事の無い人物。恐らく、勘十郎が彼を『兄上』と呼んでいたならば、喜六郎がそれを決して疑う事は無かつただろうと

思われる。

そして、今。吉法師は、此方を見て一つニヤリと笑っていた。

「しかし、そうか。お前がそうか」

「……………」

「くくつ、なに。平手の爺から一応は聞いていたのよ。奇怪な何かに取り憑かれた弟が居たと。見舞いの一つに行かぬのかと言われたが……すまんな、行かんかった」

カラカラと笑う吉法師に、喜六郎は少し頭を傾げた。謝られている意味が分からなかったのであるが……そんな喜六郎に、今度は笑っていた吉法師がその笑みを潜め、代わって怪訝な顔を浮かべた。

「あー。なんだ、もしかや小さいから分からんかったか？ よーするに、お前に割と酷い事をしたんだよ」

「酷い……いや、そんなことは」

喜六郎は、改めてもう一度首を傾げる。

母に助けられるまでの自分が『悪い子』であったのは、喜六郎とて分かる事である。それを恐れて皆来なくなつた。それが自分のあの時の願いで、外敵を排除する為に必死だった。もし吉法師が来ていようと何をしようと追い出そうと必死になっていた筈である。

そうなれば困っていたのは吉法師の方だ。だから寧ろ、来なくて良かった。というのは喜六郎だつて分かっていた。

「そもそも姉上を蹴ったりもしてたかもしれませんが。それに、姉上が来た、来ないは……多分、あの時、どうでも良かったので」

「はつきりと言うなあオイ」

「嘘言つてもしかたないので」

「まあそりゃあそうか」

故に、酷い事なんてしてない、とだけ言つたつもりだったが。しかしそれに対し、吉法師は面白い、と笑つてから。お前の話を聞かせてみる、とも吉法師は言つた。

喜六郎は……取り合えず自分の言葉で、話した。取り敢えず、空の傷の事は、きつと誰も信じてくれないであろう、と伏せはしたが。それ以外は凡そ、今こうして吉法師の前に立つまでの出来事を。話し

た。それを聞いて、吉法師はまた笑った。

「はっはっはっ、なんだそりゃあ。母上も、とんだ事を言う。しかもそれを真に受けて、お前も絵を阿呆な程描いたと来た。冗談だとしても質が悪い！ 愉快ではないか！」

しかし、それは馬鹿にしている笑い方では無い。

喜六郎も釣られて笑いそうになる。そんな屈託のない笑顔だった。

「だが良いな。そのタガの外れ方は、嫌いではない。褒めてやろう」

「ありがとうございます？」

「うむうむ、俺が褒めるなんぞそう無いからなあ。ありがたがれ、大層！」

勘十郎は、吉法師と言う人物を兎も角褒めて、良し人物と持ち上げていた。凄い人だと言っていた。それが本当かどうかは、喜六郎には分からなかった。

今も凄いかどうかは分からないが……少なくとも、勘十郎があんなに嬉しそうに姉の事を語る理由は分かった気がした。

きつとこの人は、誰からも好かれる人だ、と。喜六郎は思った。こんなに心底愉快に笑う人を、喜六郎は見た事が無かった。

「ふむ。ここまで来るとお前の絵にも興味が湧いて来た。勘十郎の奴が戻ってくるのが待ち遠しいなあ——」

「姉上ええええええつ!!!」

「……馬鹿みたいな大声張り上げるんじゃねえ!」

少なくとも、兄には心底好かれて居るなあ、とも思った。

「紙、筆、それと墨と硯……板! ……これだけあれば大丈夫だろ!」

「この板どこから持ってきた」

「適当な所です!」

「おおそうか」

河原の荒れた地面では描きにくいだろう、という細やかな気遣いによってもってきた結構な大きさの板の上。喜六郎は履物を脱いで

……何時も通り、墨に筆を付けて、紙に向き直った。

何時もは、気に入らなければ丸めて捨てる、と言う贅沢をしている喜六郎だが……今回は不思議と、そんな事にはならない気がした。

改めて、吉法師を見る。

此方を興味深そうに見つめる彼女の真つ赤な瞳を改めて見つめ直し。先ほどの事を思い出す。その中に宿る紅を。なんだか、こうして見たままを描くだけではつまらない気がしていた。故に。

喜六郎は、初めて、絵を描く前に。目を閉じて描きたい物を思い浮かべたのだ。

焰と吉法師。意志の強い瞳。不敵な笑み。自らの肌を舐める焰すら、なにをするものぞと堂々と、寧ろ戯れる様に……

「――！」
筆を入れる。

先ず、吉法師から。

前提として、喜六郎は服など描かなかった。わざわざその下を見ずとも、裸身は勝手に頭に思い浮かんだ。堂々と立つ、だけではなく。踊るが如くに両の手をくねらせ、そのしなやかな指先まで。

後ろに括った髪を解き、そのいと長い黒糸が、何処までもさらりとなびく様に。流すように。外に出て感じた風を想い、そこに乗るが如く。波打ちもすれば、真つすぐに伸びもする。

髪を揺らすはしかし、ただの風じゃない。それは、焰の熱を纏った烈風。天まで立ち上らんと燃え上がる焰を、吉法師の体を舐めるが如く、這わせ、付かせ、纏わせて……

自らの体より生じた熱を、吉法師は愛でているのだ。

——奇しくも上下に広げられた手、片足で立つ恰好は、まるで天に舞う如来像の如く。

「――ほうっ！」
「ちよっ!? まって!? おまえっ、なんて、なんてものを……うわ、す、すっ！」

完成したそれは……一種の裸婦画、と呼ばれる類のものに仕上がっていた。喜六郎は意識して描いたつもりもなかったが……

しかし、そこに艶やかさは無く。寧ろ、巻き上がる焰の中で、不敵に笑いながらその熱を愛でる姿には、一種迫力すら感じられた。

描き上げた時……喜六郎は、久しぶりに少しふらっと、頭が揺れた気がした。それ程までに集中して描いていたのだろう。そして、手が、ちよつと汗ばんでいても居た。

それ程までに集中して描いていた。

それ故に、喜六郎にとって……今まで描いてきた絵のどれよりも、会心の出来だった。物凄い頑張つて『良い物が描けた』と喜六郎自身、頷けるような出来の絵だった。

「俺を、こう描くか。くくく、随分と傾いたものよなあ！　なんだこりゃあ、素っ裸ではないか！」

「あ、あの姉上、その、えつと……」

「——どう、でしょう」

一体どうすればいいのか、と右往左往する勘十郎を取り敢えず置いておいて。喜六郎は真つすぐ、吉法師に向けて問うた。

「気に入ったわ！」

面と向かつてそう言われた時。

喜六郎は、ほんの微かに、拳を握りしめた。それは……腹の底から湧いてきた、達成感によつて。

「喜六郎、この絵は俺が貰う。構わんな？」

「あ、はい……えつと、でも、それは兄上に、描いてくれ、と言われた物なので……兄上に訊いて下されば」

「あー、そう言えばそんな話だったな。勘十郎、これ俺が貰つて良いか？」

「へ？　あ、はい……」

「よし、良いんだな！　うははははっ！　いい拾い物をした！」

しかし……それ故に気になつてしまうのが、勘十郎の態度だ。先ほど褒めてくれた時とは違ってどうにも煮え切らない様子だ。喜六郎は、兄も諸手を上げて褒めてくれる、とばかり喜六郎は思っていた。

「……あの」

「なんだよ、今、姉上と話してるんだから」

「その……気に入りませんでしたか。コレ」

故に少しばかり、気分落ち込んでしまつて。ついそう問いかけてしまふ。

だが。気に入らないか、という問いに対し。勘十郎は、う、う、う、なんとも言えない唸り声を上げてピタリと止まつてしまつた。

吉法師は一瞬怪訝な顔を浮かべた後、何か思いついたような顔になつて、明らかに邪悪と呼べるような笑顔を浮かべて勘十郎を見ている。

「可愛い弟が困っているぞ？ 答えてやつたらどうだ？」

「会つたばかりで可愛いも何も無いですよ！ いや、でも……その」

何をやっているんだろう、と喜六郎が思つていふ。しばし吉法師と此方で視線を行つたり来たりとさせた後、勘十郎は獣かと聞き間違ふ様な唸り声をもう一度上げて……大きくため息を吐いて……

「……出来自体に不満は無いよ！ 上手いと思う！ 本当に！」

「！」

——そう、勘十郎が口にした時。思わず、少しぴよんと跳ねてしまった。

気に入らなかつたのだろうか、と不安に思つていたのは間違いない。褒めてもらつた後のあの不審な態度だ。その不安も、より大きなものだ。それが一転。上手いとしつかりと言つて貰えたのだ。

文字通り見た通り、子供の如く喜んでしまふ。我慢なんてしない。全力で喜びを体で表現していた。

「……」

「別に俺の真つ裸くらいどうつてこともねえだろうに」

「どうつて事無い事無いですよ!?!」

良い日だ。

とても良い日だ。

絵を褒めて貰つた。兄と姉を得た。

幼き日の喜六郎は、ただ無邪気に、この良き日に喜んでゐるばかりだつた。

鼓動 成長

「——ふっ！」

裂帛の気合と共に振られた木刀は、その勢いでは信じられぬ程にピタリと静止した。

綺麗な弧を描く木刀の軌道は、良く言えば基本に忠実、悪く言えば型通りである。遊びと言う物が感じられないその動きは、普通であれば見向きもされないただの武芸の練習風景なのだが。

それが元服も迎えていない、少年の動きとなれば、話は違ってくる。「ふう……」

手拭いで汗をぬぐう少年……喜六郎は、幼き日の少年らしい体格から、その歳にしてはしつかりとしていると言われる程度のそれへと移り変わっていた。もう若武者と表現しても何も問題無い程に。

「……全く、今日もまあ、びかびかと……はあ」

天を見上げ、苦々しい表情を浮かべるその仕草も、可愛らしい、と言うよりは凜々しいという評価をする方がしつくりとくる位だ。

それは、彼が剣をこうして振るう理由でもあった。少年ながら、普通よりも早く体がしつかりと出来て来た彼に対し、守り役からの『武』の修練が仕込まれるのも早かった。

では、彼がそれに良く取り組んだか……それは、今現状が示している。

与えられた木刀を、型通りに振れるくらいには、彼は剣の腕を上げている。守り役の言う事を素直に聞いて。

幼き日の彼の所業からは、考えられぬことだったが……それは、喜六郎が自ら心を入れ替えた、と言う訳でもなかった。

「精が出るな喜六郎」

「——兄上。おはようございます」

「調子良さそうだな」

「ええ。最近は特に。修練にも身が入るとい物です」

——きつかけは、彼の目の前を通りかかった彼よりも些かと細い少年……兄、勘十郎である。

喜六郎にとつて、兄と姉は尊敬し、そして言葉を聞くに値する相手だ。幼い頃の出会いより、母、兄、姉の三人の言葉を彼は真つ先に良く聞くようになったのだが……

『なにっ!? 今日姉上の絵が描けない!』

『は、はい……ごめんなさい……どうしても、今日は勉強に集中してもらう、つて……』

絵ばかり描いていたのが災いしたとある一件が、勘十郎を動かしたのである。喜六郎がきちんと学びに手を出す様に心を入れ替えさせる為に。

勘十郎は、単純明快にそのままでは満足に絵も描けなくなる、と先ずは喜六郎を諭した。理屈も何も説明されなくても、絵が描けなくなるというのは、喜六郎にとっては大変に辛い事だ。

そこから、漸く喜六郎は自ら学びきっかけを得た……しかしそれだけではなく。ここで、乳母がもう一つ、手を打った。

『多くの学びを得て、将来勘十郎様をお支え出来れば、きつと勘十郎様、御前様もお喜びになりますよ』

——それからの喜六郎の真面目ぶりは凄まじいものだった。

幼い少年は守り役と初めて真つ向から向き合い、とんでもない貪欲さで知識を吸収していった。当然、兄や姉と会う時の為に、絵をしたためるのも決して辞めない。

その内、絵の腕が家中でも噂になり。正式に絵の師が付けられる程になった頃。彼は、いつの間にか自ら進んで学びを得る様になっていた。

元から、怠惰な性格と言う訳でもない。切欠さえ只管にそれに取り組む様な男だ。描く喜びと同じように、学ぶ喜びを得てからは、早いものだった。

「姉上は?」

「ん、なんか父上と話してる。もう元服も迎えたしって。そんなに時間もかからなそうだから、終わるまでお前と話してようと思ったん

だ」

「左様ですか……」

「それよりも。依頼していた絵は出来たんだろうな？」

「あ、はい。それは滞りなく。今、お渡ししましょうか？」

「……いや、良い。また姉上に持っていていかれると、ちよつと……寂しいから」

「ふふ、そうですか。そう言つて頂けると、腕の振るい甲斐がありません」

単純に、学ぶのが楽しい、知識が増えるのが楽しい……と言うだけではなく。絵だけではない、様々な事で兄や姉と話せる。そんな小さな事で、彼は学びへの意欲を育てて、こうして一人の武家の子として、育つていった。

仲を深めながら、絵を見てもらつたり、時には共に外ではしゃいだりと、満ち溢れた生活を送っていた。

あの頃から既に幾年か、姉も元服を迎える程に月日は流れた。その間多くを学ばば成長しない方が可笑しいという話だ。

「しかし、もう姉上も元服ですか……早いものですね」

「うん。姉上が当主になるのも、きつと直ぐだ」

「そ、それは些か話が早いのでは。父上もまだまだ現役でしようし」

「いやいや、父上も姉上の才覚を理解されて当主の座を譲る。うん、僕には見える」

「流石に元服したばかりの姉上に家督を譲るのは、家中の者に対し説明も利かぬと思うのですが」

……流石に成長して尚、兄の姉好き具合三千世界突破ぶりや、姉の自由人ぶりに関しては全て良しと思えた訳でもなかったが。それでも、そんな部分も含めて二人を愛せるぐらいに仲良くなれたと喜六郎は、勝手に思っている。

そんな兄と、姉の傍に居ながら、その時見た物を気分次第でつらつら描くのが最近の喜六郎の絵の常であった。

兄と姉の傍にいと、色んな所へと連れて行ってもらえる。描きたいと思う物がたくさん見れる……そして描きたいと思えば何枚でも

描く。そしてその上で、兄と姉に見て貰えるのである。

「それよりも、だ……仕上がりの方はどうだ？」

「はあ、兄上の無茶な要求に応えて諸々付け加えましたので……大変でしたよ、お眼鏡に敵う仕上がりを持って行くのは」

「そこは『ちよつと無理でした』って言う所だろー」

「兄上は私に何を望んでるんですか」

「可愛げだ。つたく、弟のくせに生意気だぞ」

「全く……困った兄上をもって幸せ者ですよ、私は」

……些かと兄からの要求が無茶な事もあつたが。姉も割とそうではあつたが。

兎も角、環境が良かった、と言うのは間違いなく。故に、絵の腕も

上達するばかり。一切何も気にせず、順風満帆――

「――ところで」

「はい？」

「母上は、どうだ？」

「……」

――と言うばかりではなく。

姉と兄と共にあるが故、どうにも逃れ得ぬことはある。

姉の人を振り回す性格は、決して万人から好かれる類のものではない。

しかし、特に折り合いが良くないのは……恐らく、哀しき事ではあるのだが。彼等、三姉弟の生みの親であり、喜六郎にとって大恩ある母。

「……大丈夫です。何時か、和をもって成すと思います」

「そうか――うん、分かった」

土田御前である。

こうして、母に呼ばれて自室に向かう度。

己の心のままに動く自由な吉法師と、何方かと言えば武家の倣いを

重視する母。その折り合いが悪い方向に流れたのは、一体何時頃からの話だろうか、と喜六郎は回顧する。

幾度回顧しようとも現状が変わる訳でもないが。しかしながら。それでも、と。この事に思考を巡らせず、頭を停止させるよりは全然良いと考えている故に……。

そもその話。母から紹介されたのが兄だけであった、という所も可笑しな話ではあったが。その頃は、まだ『幼い勘十郎を鼻屑している』程度で。此処まで決定的な不和を生んではいなかったと言える。

「――母上、喜六郎です。入ります」

しかし、ここ最近においては、その限りではない。

「お呼びでしょうか」

「ええ。最近の調子はどうですか？ 武に政、最近は良く学んでいるようですが」

「はい。お二人を支えられるよう、只管に精進する毎日でございます」
先ずもって、今の二人、と言う言葉に少し眉を顰める。喜六郎の言う二人、と言うのを分かっているからこそ、今の発言が気に入らないのだろう。

「……そうですね。勘十郎を良く支える為のその努力、武の家の子として大変誉れ高い」

「兄上は家中の者に慕われておりますから。姉上との仲も良好でございますれば、もしお二人を私が支える事が叶えば、我ら三姉弟に並ぶ者等居ないでしょう」

姉上、と口にしだした途端。その表情が僅かに固くなったのを、喜六郎は見逃さない。これでも母とは、子として長い間接して来た積りだった。無表情に見えるが、良く見て居れば分かる。

母が、激情家である事も。

「喜六郎。お前が支えるべきは、将来の当主である勘十郎です。吉法師の事は」

「我らは姉弟。立場が如何に変わろうとも弟は。兄を、姉を、生涯の間、支える義理がございます。母上」

こういう時、喜六郎は気を使った言い方をする。と言うより、母と

の会話で気を使う事を覚えざるを得なかった、と言うべきか。あくまで『姉弟』の立場を強調しているのは、母が自分の口から姉の事が出てくるのを、相当に警戒しているため。

母は、姉から離れるのと同時に、兄である勘十郎を篤く愛するようになった。元々から勘十郎が当主になる筈だったのが、父の鶴の一声で方針が曲がったのがそれに拍車をかけたのは間違いない。

その一部始終を、喜六郎は母の傍で見ていたから、良く知っていた。彼女にとって、喜六郎や、織田家臣が跪くべき、次の当主は勘十郎だ。故に喜六郎が吉法師になびく素振りを見せるのは、あまり良くない。

故に、彼はあくまで『姉には肩入れしていない』事を遠回しに伝える……様に喋る。この場合の肩入れとは、当主としての争いに関する事と同意だ。

「……姉弟として、支える。ですか」

「はい。兄上が当主となり、姉上が兄上の下に付いても、それは変わりませぬ」

「——ああ、そういうのであれば。安心しました」

最近、喜六郎を土田御前が呼び出す事が多い。その何れも、姉に対する否定的な感情を隠しもしなかった。

そして、今日ここに来てのこの露骨な態度。吉法師が元服を迎えた事が原因ではないのかというのは、喜六郎も武家の子故に、何となくではあるが分かっていた。

「であれば、喜六郎。その心持ち、忘れぬように」

「……はい」

繰り返すようではあるが。喜六郎は、母に大恩がある。

その母に、無茶な真似をして欲しくは無かった。故に……当主の座に何れかが座り、落ち着くまでは。彼はあくまで母の側に付いている様に振舞う積りだった。

例え、当主としての争いなど、喜六郎にとってはどうしてもよく。

何方にも肩入れするつもりもなく、最終的に兄と姉が決めた事に従う積りであろうとも。

何方が当主に付くのか。凡そ、彼の中でも『予想』が付いているよう

とも。

嘘は、吐いていない。喜六郎は嘘を吐かず、しかして全てを見せない事で賢しく立ち回る方法を、こうして学んで。

せめて母が穏やかに過ごさせるようにと、立ち回っている、積みだつた。

虚実

彼にとって、母、兄、姉の三人は『寄る辺』であった。自分を救ってくれた母。

絵に価値を見出してくれた兄。

そして……姉。

彼にとつての姉、吉法師は。文字通りの『氣の良い姉』でしかなかった。

兄が言っている通りの『次期当主』でもなく。母が思う通りの『大うつけ』でもない。彼にとつて……姉は、姉以外の何者でも無かった。柿を投げてよこした時も。自分の思う未来を語っていた時も。そして、母との確執が少しずつ、現れて行つた時も。

「——ん？　なんだ、どうした？」

「あ、いえ何も……これとかは、最近の中で一番好きな奴です」

「おおそうか、ちよつと見せてみる」

こうして。自分の絵を見ている時も。存外と普通な姉なのだ。

姉は、普通に喜ぶし、怒りもするし。そして……母に疎まれているこの時は。

『……そうか』

普通に、寂しがりもする。その顔を見た事がある喜六郎は、姉を『うつけ』だの『稀代の才人』等と呼べなかった。

やっぱり姉は姉で、姉以外の何者でもないし、ならない。

だから、そもそも姉が当主になつても別に姉以外にはならないし。その辺りがどうなるかも正直な話どうでもいいか思つてたりする。それを姉に伝えた所、『お前相当頭おかしいなさては』と言われたりした。

兎も角。彼にとつて、姉は特別な人ではない、というのが全面的な認識だ。侮つているというか、それ以外に認識できないというべきか。

「おー、これは……信勝か」

「ええ。家臣の皆様に色々言われて喧しそうにしてたのを、ちよつと」

「うーんこの嫌そうな顔。良く描けている。俺にはちよつと理解できんから、信勝の気持ちはいまいち分らんが」

——強いて、人と違う所をあげるとすれば。

「……相変わらず、聞こえませんか」

「ん？ ああ」

「左様で。まあ兄上と私が居れば、なんとか意思疎通は出来ますから。良いんじゃないですか」

「勘十郎じゃちつとキツイだろ。彼奴は俺の言う事、微妙に理解しておらんし」

「しようと思えば出来ますよきつと」

「そうかなー……」

「姉上は、ご自分が思ってるよりも、周りが思ってるよりも、『普通』ですから」

「じゃあなんで聞こえんのか。俺の耳」

「さあ？」

吉法師の耳は度を過ぎて『人の言う事が聞こえにくい』……より正確に言えば『人の言っている事が分からない』と言うのが近いようだった。

例にすれば。兄上が姉上に色々と話しかけている時も、その言っている事が殆ど聞こえない、らしい。のんびりしてる姉を描いている時に、ぼつりと零したのを聞いた。

聞こえない、という表現をするので、少し頭を捻ったのを覚えている。こうして会話できているというのに聞こえないとはどういうことか。

よくよく話を聞いてみれば、挨拶などは普通に返せる辺り、音が聞こえない訳ではないらしく、分からない、と言う方が正しい、との事だった。

故に、相手との話がかみ合わない。それだけではなく、自分の言っている事に首を捻られるのもしょっちゅうらしく。

そう言った部分が周りから『うつけ』と呼ばれる原因であるらしい。では、喜六郎の声は聞こえるのか。

姉曰く『聞こえる』との簡潔な返事。兄の言葉が聞こえなくて、自分の言葉が聞こえる理由は良く分からなかった。

「ま、良いか……あつコレ楽しんで描いて無かったろ。線が悍ましい事になってるぞ。うわぁ気持ち悪ッ！ なまじ上手い様に見せてるから余計に気持ちが悪いな！」

「自覚はしてます。でもこういうのも練習になるんで良いんです」

「失敗するならもっとガッツリこけるよなー。こういう風に、変にこぎれいにコケるのはあんま好まんぞ」

「それ結構派手にこけてるんですけどね。分かりませんか、姉上には」「なんだとー。よーし分かってやる」

「頑張つて下さい、姉上」

まあ。喜六郎としては、聞こえるなら聞こえるでそれで理由なんて気にしない。最悪聞こえなくても、まあそれも姉だろうと思つて接していたらうから、多分だが気にしていなかったと喜六郎は思う。

別に相手の事を理解できない位で、姉が姉足り得ない訳はない。という弟的な信頼が彼にはある。根拠は一切ない。

強いて根拠を言うのであれば……たとえば話を聞いていなくても、姉は兄を愛しているのを知っている事くらいだろうか。

姉は、兄への情がきちんとある。

それは理解できない兄の言葉をそれでも暇そう聞いている辺りからも分かる。情が無ければ話も聞こえない相手と何時も一緒には居ないし、付いて来るなら追い払うどころか無視するだろう。

退屈そうに、それでも兄上が話しているのを眺めているのは、そんな事情を覆つて余りあるほどに、兄へのちゃんとした情がある、と言う事……だと喜六郎は思っている。

相手を理解しなくては愛してはいけない、等という法も決まりも存在しない。

誰かを普通に愛している姉だから。喜六郎は姉が好きだ。たかが相手の事を分からない位で、彼は姉から離れる事はしないと書いた。当主の争いは投げ捨てて、ただ姉への親愛のみで動こうと思った。

というか、喜六郎にとっては、あの時の事と比べればこの世で起こ

る大抵の事はそんな大した出来事でもない。なので気にもならない、と言うのが正しいのだろうか。

——あの日の、空に比べれば。

「——んー」

「どうしました?」

「いや、何でもない。お前こそ天なんぞ睨んでどうした」

「えっ?」

「お天道様がどうかしたか?」

気が付けば、喜六郎は、障子の先に広がる空を睨んでいた。姉の方を向いて話している積りだったのだが、しかし。どうやらそうでもなかったらしい。

「そ、そうですね……すみません、ちよつと、日差しが眩しかったもので」

「今日曇っておるな」

「……」

吉法師の言葉に、その先の言葉を詰まらせた。誤魔化すつもりだったのが、一発で分かってしまったようだった。というか、その辺りを探るために『お天道様』という言葉を出したのだろう。抜け目ない。

吉法師の目が、先程迄と違い、冷えた物になるのが分かった。姉は、時々こういう視線になる。見た物を容易く見通す、そんな目になるのだ。人が『稀代の才』と呼ぶのはこういう部分なのだろう。

「お主の目が腐っているのか……それにしても、空を睨む目には明確な光が見える。しかし同じくらい、随分と濁って、ドロドロとした」

「そう、でしたかね」

「最近そう言う事が多い」

「……」

「俺には見えない何かをお前は見ているのか? 喜六郎」

その眼に見据えられて。

喜六郎は、すこし、曖昧に笑うしかなかった。

廊下を歩く。曇りの……『姉から見れば曇っている天』を見上げた。
喜六郎には。

天の全ては、一面に翠の輝きが満ちている様に見えていた。灰色な
ど欠片も無く。天の光ではない何かに満たされていた。見えて居れ
ば、恐らくは余人の目を焼くのではないか、と思うほどに。

まるで晴天が如く眩い輝き。ただし、その光は此方を祝福する物な
のだろうか。少なくとも喜六郎には……そうは見えない。禍々しい
ものに見えていた。

そして、その中心には。

ぎぎぎ ぎぎぎぎぎ ぎぎ

不気味な音と共に、黒い孔が天を裂いて、その口を開いて行ってい
るのが見えた。それは幼い頃に見た、あの『傷』に相違なく。

ここ最近、そこから零れ落ちた光がこうして天を翠で満たす事も
多かった。

「――」

その奥には……ああ、見える。見えてしまう。

目だ。大地にも匹敵しようかと言う大きさの。金色に爛々と輝く、
瞳無い無機質な目が此方をじいつと見つめている。喜六郎には分か
る。アレは……暗い天の底から、まるで蟲の様に小さい自分を間違
いなく見ているのだと。

子供の頃よりも、世の中という物を知り。だからこそ天のアレがど
んな存在なのかが分かってしまった。だから……感じる物は桁が違
うのだ。本当に。丹田に無理矢理に力を込めて歯を食いしばって。
必死になって体の奥からよじ登ってくる衝動に耐える事が出来るだ
けでも、成長だと個人的には思う。

母や、姉、兄と出会った後。しかし、アレが姿を消す事は無く、空
に傷は刻まれたままだった。しかし、誰に信じて貰える訳でもない
……と言う事は、喜六郎だって分からざるを得なかったのだ。

だから……だから。

目を逸らす為に必死だったのだ。

兄や姉の為に努力した、と言うのは間違いない。学びが楽しかったというのも、嘘ではないだろう。しかし……幼き頃、絵を始めたきっかけ、もう一つの動機は今までも決して変わった事は無かった。

アレに耐える為の、絵の努力。転じて、アレを気にせぬ為の、勉強の努力、武の努力でもあった。結局の所、喜六郎の中で利害が一致したのだ。天から目を逸らす為に、彼は地の上で泥を啜る様な努力を繰り返した。

此方を見つめるその眼をもう一度睨みつけ。

喜六郎は自分の自室に向けて踵を返した。

絵を描くのだ。絵を描けば、きっとアレの事も忘れられるだろう、と。そう信じて……

悪夢

ふと、目を覚ます。

自分が何をしていたのかを思い返し……空に見たモノを忘れる為に、絵に熱中していたのだと、頭に浮かんで来た。今日はいつても以上に、集中してしまつたらしくいつの間にか眠っていたようだ。

何枚ほど描いたのか。それすら朧げで。それくらい集中する程にアレが気になつてしまつていた事に、苦笑いを浮かべ……

——体が、自由に動かない事に気が付いた。

そもそも、自分は寝転がっていない。そもそも自分の部屋に居ない。道端に立っている。いや、立っている、という感覚すら曖昧だ。ただ、地面が足元に見えているから、きつと立っているのだろう。

立っているばかりではない。動いている。走っている位の早さで。地面に散らばる小石や、道端に生える雑草がちらと目についた。何処かで見えた事がある様な道を、今、自分は走っているのだ、と思つた。

そうして進んでいる内に。しばし先に、地面に紅いものが飛び散っているのが見えた。錆び臭い香りがした。

兄や姉の瞳より尚紅いそれが何か。喜六郎は、あまり見た経験が無かつたから一見では気が付かなかつた。ただ、紅い色に、あの天上に住まう何かを思い出して、少し寒気がした。

そして……その色を辿つて行つた先に。

紅く染まつた少女を見た。

肩口から流れるそれ。周りを取り囲む人相の悪いものども。そして……手元の、刃こぼれ塗れの酷い有様の『真剣』。それが、一体何を意味するか。

道端に飛び散っているのは……その紅いものは。血であつた。人うちのうちに流れる血潮であつた。では、それは誰のものか。

あねうえ。

そう口に出そうと思つたが、声も出せない。

手を伸ばす。走ろうと思う。だが近寄れない。体は動かないという事を忘れていた。見ている事しか出来ない。鼻に香る錆び臭さが、

むせ返る程濃くなった気がした。

悪漢共が、姉に近寄っていく。刃こぼれ塗れで切れもしなさそうな、刀とも呼べない鉄の棒きれを構えて。しかしそれでも、人を一人殺すには十分に過ぎる脅威だ。どうすれば良い。

考えている間にも、男はじりじりと姉の方へとにじり寄っていく。下卑た笑みを浮かべている。ダメだ。

必死に手を伸ばそうとする。

男が、刀を振り上げる。

喉の奥から悲鳴が——漏れない。聞こえない。

吉法師が……退かず、立ち向かおうとしている。

その先は——

「——駄目だっ!!!」

叫び声と共に、体を起こし……喜六郎は、散らばった紙の中心で自分が寝転がっている事に気が付いた。滝の様な汗を浮かべているというのに、酷く体が冷えている気がした。

何だ今のは。

ただの悪夢か。そう思うにしては、余りにも『良く出来た』夢だった。現実の様に、ハッキリと思い出せる夢だった。今でも、あの光景が、紅い色が、頭にこびりついて離れない。鼻の奥に、匂いがまだ残っている気がする。

もし、あの刀が振り下ろされていたならば……今頃、姉はどうなっていたのだろう。その先を想像出来てしまう。

「……ッ」

立ち上がって、障子戸を乱暴に開き、夜風に当たろうとして……眼に刺さる輝きに、思わずして目を覆う。

翠色の輝きが太陽の如く、深い藍に見える筈の夜の空を埋め尽くしていた。差し込む極光は、まるで奔流である。

少し、驚いた。普段よりも格段に多いのだ。翠の輝きは、飲み込ま

れると錯覚するほどに濃く、そして眩い。

そしてその奔流の先。やはり赤い巨影は自分を見ていた。

「……なんのつもりだ」

今まで、アレが此方に明確に何かしてきたのは、初めての事だと思った。

別に天の上に座すアレが、何かやったという確証は何処にもない。だが、いつも以上のこの輝きとあの悪夢が、一切の関係が無いと思える程、喜六郎も呑気ではない。

初めて。

アレは、此方へと干渉して来た。その事実が、ただただ、背筋が冷えて行くほどに不気味だった。

逃げる様にこの光に背を向けて、障子戸を閉め直す。

閉じてしまえば光は入り込んでこない。月明りが仄かに障子突き抜けて部屋の中を照らすだけだ。その僅かな明かりを頼りに、彼は再び絵に没頭する事にした。

そうすれば、気が付けばまた眠っているだろう、と。その輝きから目を逸らしながら。

「おおおおおおおおお……」

「如何でしょうか。『鬼を踏みつけにする雄々しい姉上』でございませう」

「良いぞっ！ 姉上の、こう、なんていうか、余人を越えた圧倒的な迫力が凄い、表現されてる！ 流石喜六郎！」

「満足していただき恐悦至極」

今日は、兄に頼まれていた絵を届けに来た。『格好良く、そして神々しく』という注文を受けて描いた絵だったが、どうやら相当上手くいったようだ、とコツソリと、拳を握り溜めた。

喜六郎としても、どう足掻いても裸婦像になる為、大股開きにも見えるようなその恰好を如何に『そういう風』に見せないかには苦心

……はしていないが、鬼の表情とか、姉の嘲笑う、というか、勝ち誇る、というか。そんな感じの笑顔にするのにはこだわった。

……没頭できる理由があったからこそここまで仕上がった訳だが。理由を思うと素直に喜ぶことは出来なかった。

「全く、姉上を馬鹿にする奴らもみんなこんな風に姉上に踏みつけられてしまえばいいのに……いや、それじゃご褒美か？」

「ご褒美ってなんですか。踏みつけられるのなんて最大限の屈辱でしょう」

「いや姉上のおみあしだぞ。踏まれること自体が栄誉だろうが」

「兄上相当ダメな事言ってますんか？」

姉上が『聞こえない』様になっているのは。兄上の普段のこういう言動とかが原因じゃないのか、と思わないでもない。姉のアレがどういう理由からそうなっているのかは知らないが、こういうすつ飛んだ発言は流石に聞きたくないと思っても不思議じゃないだろう。

兄は、美德も多くあれど、こう言う良くない所が出てしまう事もある。一応、弟として兄を慕ってはいる。いるが、これにはさすがに苦笑いである。

「まあ兎に角！ 文句はない！ 褒めて遣わす」

「ふふ、ありがたき幸せ」

「もうこれだけ描ければこれだけでも十分に喰って行けそうだな」

「そう言っただけだとありがたい。誠にそうなれば嬉しいですが」

——とはいえ。

その美德は、そんな欠点を帳消しにしてしまえる位だと、喜六郎は思っている。

兄は姉ばかりを兎も角持ち上げるが、しかし姉は些かと興味の無い相手に厳しすぎる所はある。しかし、兄はどんな人間であっても、ある程度使い方を模索する。

というより、そう言う部分は兄の方が『普通』ではあるのだが。

そんな兄だからこそ、自分の絵についても、こう言う事を言ってくれるのだろう……正直な話をすれば、喜六郎は自分自身がそこまで絵が上手い。とは考えていない。

絵を描くのは好きだが、それとこれとは話は別だ。結局の所、世に受けているのは自分の絵とは似ても似つかぬ類の絵であり、そういった絵は『上手い』と評されている。

だから自分の絵は『上手い』部類には入らない……と言う訳で。逆に言えば、上手いと評価されるかどうかを気にせず喜六郎は絵を描いているので、気楽に描けると言えばそうなのだが。

「……ん？ お前、絵で食っていくつもりなのか？」

「私は姉上、兄上の事を生涯支えたいと思っておりますので」

「だって別に、自分の絵を売って稼いで、その金を納めるだけでも十分な支えになるだろう？ 僕はそうするんじゃないかと思ってたぞ」「ええ？」

「お前の絵は、色んな奴に評価されてしかるべきだ。幾ら無能な僕だって、それくらいは分かる。弟とか最真目なしで、だ」

そんな自分の絵を……評価してくれる。下手の横好き程度の絵を。自分の絵を初めて褒めてくれたのも、兄だった。それを思い出して、口元が少し緩んでしまう。

「ありがとうございます。そう言って頂くだけで、嬉しいですよ」

「……そうか。まあでも、なんだ。姉上が当主になれば、自然とお前の絵は売り込まれるだろう。姉上が、これを使わない理由なんて無い」「もしそうなれば、私も腕の振るい様がありますなあ」

「うん。だからお前がどう考えてるかなんて全然関係なく、お前は絵で稼げるんだ。良かったな喜六郎」

「はい。お二人にはお礼を言わねば」

喜六郎にとって、吉法師が『気の良い姉』であるならば、勘十郎は、『優しい兄』だ。彼が居なければ、こうして絵を続ける事もなかったろう。

そんな二人に恵まれて。あんな悪夢位に参っている場合でもない。そう思っ一つ息を吐いた。

姉が、兄の言うとおりに当主になったのならば。その頃には自分達も元服して、今のように穏やかな時間を過ごしているばかりにも行かない。その時、二人を支えなければいけないのは、弟である自分だ。

色々な恩がある。愛を貰っている。故にこそ。二人を支える事を、喜六郎はこうした会話の中でも、夢見る事をやめられない。

……しかし、そう思うからこそ、余計に思い出してしまう。

あの悪夢。ただの夢と切って捨てるには、余りにも不吉な夢見。目の前で本当に起きているような、夢ではなく現実と錯覚するような。姉が飛躍を迎えようというその時に、泥をかけられたような。この不快感。

「うん、母上も漸く分かって下さったみたいだし、ほぼ姉上が当主になるのは確定だからな。今からでもいっぱいお礼を申し上げておけ。姉上に」

「ほう」

——そんな中で、悪夢の事を思い出していたからなのか。それとも。

「母上が、どうかなさったのですか？」

「朝方、母上が何か機嫌が良さそうだったんだ。聞いてみたら『吉法師の事で、漸く心が落ち着きそうだ』と」

ふと、喜六郎はその言葉に引っかけかりを覚えた。

母から姉の名前が出る事には引っ掛からない。しかし……それを、勘十郎。兄の前で言うというのは、少し気になる。

先日の様子から、そこ迄気持ちを変えられるのか？ というのが正直な話。とはいえ兄がそう言っていたのであれば、嘘ではないと思う。

「そう、ですか」

「お前は変に気にしなかったからな。これで安心出来ただろ。全く、お前は弟なんだから変に考えなくて良いってのにさあ……」

変にだといわれる程じゃあ無い、と言いたいがしかし。実際母と姉の関係に相当に気をもんでいたのは間違いない。何も言えず、ぐぬぬと少し俯くしかなく、その姿を見て兄はケラケラ笑っているばかりだ。

恥ずかしい。が、兄の言う通りではある。喜六郎としては、自分が気をもまなくて良くなるのが一番良いのだ。本当に。そりやあ家族

みんな仲良く、の方がそりゃあ良いだろうという話で。

「……そう、ですね。私も漸く無駄な心配をしなくて良く、なるので
しょうか」

「ん。と言う事で追加で描いてくれ」

「えっ」

「やはり格好いい姉上は見た事だし。次はその……ちよつと、なんだ。
女性らしい、姉上とか見たいし」

「えっ、そんなの描いた事無いですけど」

悪い事なんて起きない。

言い聞かせるように頭の中で繰り返す。兄の無茶振りに応える事
にした。

予見

「とはいえ、どういう風に描こうかな……ん？」

吉法師の絵を描くにせよ。女性らしい姉などそもそも見た事もない。ならばせめて本人を目の前に描くのが良いのではないか……そう思っていた所である。

ふと、遠くに件の姉の姿が見えた。どうやら出かける直前の模様で。折角なので引き留めて少し時間を貰おうと思った。が、しかしながらここから声を掛けても届くかどうか。

結局、迷っている間に吉法師は外へと繰り出してしまい……機を逃した、と一つ溜息をついた。

ならば帰って来るのを待つしかない。仕方なしと息を一つ吐いて。元服したからと言って姉はやはりそう変わらぬものだな。そう考えて、少し安心すらしてしまう位にいつも通りのお出かけである。

「さて、何時お戻りになられるか」

兄には急ぎと言われていないので構わないが。

精々じっくり考えてやろうではないか、と踵を返した……ふとその時。

「——ん？」

そこに、見覚えのある人影を見た。

少し自分より離れた場所から、外に出ていく吉法師を、自分と同じように見ていたのだらうその人物の赤い瞳は……喜六郎にとっては見間違えようもない。

「母上？」

土田御前は、誰に声をかけるでもなく、静かに。しかし、ずうっと吉法師の方を見ていたのだらう事は容易に想像し得た。眉をしかめる訳でもなく、静かな表情で。そんな風に吉法師の事を見つめるのも、喜六郎としては驚きで。

兄の言っていた事は、本当だったんだらう、と。そう思えて、改めて胸の底に溜まっていた不安が晴れていくような気がした。

そう思って……母の表情を見た。しかし、その直後喜六郎の胸に沸

いたのは、決して温かな物ではなく……

「——ふ」

……その表情を見た時だった。

それは、間違いなく笑顔だった。何時も無表情だった母が、笑ったのだ。間違いなく。それだけで驚きだった。

優しい、慈しむ様な笑顔だった。あんな風に母が笑ったなら、喜六郎も釣られて笑うだろう。そう思う位に、優しい笑顔だった。なのに。

あの目は誰に向けられているのだろうか。

喜六郎は、それが分からなかった。と言うよりもあの目は今、どんな誰にも向けられていない様に見えたのだ。

それは、ただの勘にも近かったが。

「……」

背中が冷えた。

思わず、出て行った吉法師の方を見てしまった。その笑顔を見た時……何故か思い出してしまったのだ。あの——悪夢の中で見たものを。母の笑顔と悪意の笑みとが、重なる。

似ても似つかない筈なのに。しかし、何故かあの笑顔が頭に思い浮かんで。どうしてそんな事を想ったのか。今思い出してしまったのか。

吉法師の事を気にしなくても良くなる。

そんな勘十郎の言葉が思い出された瞬間だった。彼は、改めて自室に足を向けた。しかし違うのは、先程よりも早い足取りである事、そして……その用が絵ではなく、鍛錬用の木刀を取りに行く事。

嫌な予感がした。

その予感が外れて欲しいと、強く願った。

「……何処だっ……何処に行った!？」

見つからない。吉法師の姿が。出てからそう時間が経っている訳

でもなく、馬を使ったという様子もない。であれば、近くにいと踏んでいたのだが、しかし。何処にも吉法師の姿は見当たらないのだ。

「姉上……！」

となれば後は手当たり次第だが……喜六郎に姉の考えている事をピタリと充てられる訳もない。故に、本当に何の指針も無く、今の足取りが正しいかどうかも分からない、不安で胸が潰れそうのまま、走りまわるしかない。

誰かに声をかけようか、とも思ったがしかし。そんな時間も惜しかった。今すぐに行動しなくては間に合わない気がしたのだ。

しかし、声をかければ良かったか、と泣きごとの様な物が漏れそうになる。誰か他に居れば、その分、早く、見つけられるかもしれない。

仕方ない。兎も角、今は止まっている場合じゃない。道なりでも良いから、兎も角先へ進まない……と、思っていた時だった。

「あれ？」

今向かおうとしている道。

見覚えがある。あの夢に出てきたその道の、そのままの形である事に気が付いて……更に背筋が冷えてくる。まるで、あの夢をなぞっているかのようじゃないか、と。

「……いい、いいや」

そんな訳がない、と否定したい。だが、足取りはそれを否定できないと証明するかのようその先へと歩みを進めていく。導かれるように。悪夢の様に、その道を行く。

バラバラと地面に散らばる小石。脇の草。その全てがまるで同じである事を、進めば進む程に理解していく。遠くに見える景色、道のうねり方まで全てが、一つ一つ、歯車を当て嵌めていくかのように全てが。

ただ一つ。違う事があるとすれば。夢の時と違って、空にはまた爛々と翠の光が輝いている位だ。

その輝きは。今こそが最高潮と言わんばかりに、道に喜六郎の影を落とす。それはまるで自分の背中を押している様で……そして、同じ

ように、そうやって必死になっている自分を嘲笑っている。

紅い巨大な鬼の手の中に。

自分が囲われている。真っ赤な、生き物とは思えぬ鋼の如き、固い両の手の中に。そしてその中に、足からうずもれて行つて。

そんな景色を、見た。

そんな事は一切ありえない。

そう感じているのが幻覚である事を、喜六郎は嫌と言うほど分かっている。あの空の向こうにあるモノは、自分を見ながらも、自分の行動に一切何をして来た事もない。只あの空で、異様な迫力を放っているだけで。

「……なんであんな景色を見せた」

だが、今朝の夢だけは別だ。明確に向こうからの干渉だ。

態々、アレが自分に見せて来たという確信を今になって得る。あんなにも異質な夢と、此処まで同じ光景。ここを通った記憶なんて何度もある……なんて陳腐な言い訳など通じない程に、まるで今、見ている光景は同じものだ。

まるで、予知でもしたかのようだった。

空に向けてもう一度問いかけようとしたけれど。でも、上から答えが返って来る訳もないのだから。アレが此方の呼びかけに応える訳がないのだから。喜六郎は、顔を伏せて再び走り出す。

「ああ、畜生……」

もし。

夢の通り、姉が襲われて居たら？

助ける以外に選択肢は存在しない。倒せるかどうかは分からないけど。頑張れば一緒に逃げられるかもしれないんだからと。寧ろ、戦う必要だつてない。一撃入れて。逃げ出せばいい。

後は家に逃げ込めばいい。逃げ込めば、良い筈なんだと言ひ聞かせ
る。

だけど。

「……母上」

あの微笑みが、頭から離れない。

家に逃げ帰って来た吉法師を見て、母が浮かべる顔を想像する。もしそれが……

「いいや、関係など無い」

その先を、無理矢理打ち切った。信じてはいる。関係ないから大丈夫だと、言い聞かせた。

そもそも姉だつてなんにもないだろう。襲われてる訳がない。きっと無事だ。

そう思っているなら家で待っていれば良かった。こうしてここへ来る事も無かつただろうにと、頭の何処かが自分に言っている。

煩い。

煩い。

煩い。

ぐちゃぐちゃだ。喜六郎の頭の中はもう。

落ち着いて考えるなんて出来ない。今は不安に従つて走る。立ち止まる事だけは出来ない。知らず知らずの内に、木刀を握る手に力がかもつていた。

手元を見て思い直す。細かい事は、今は気にしない。まずは姉の事を優先しないと。考えられないなら、考えない。必死になって、喜六郎は視線を先に向けて……

——道に滴る、紅を見た。

「——っ!!」

知らない内に足の動きが早まる。

血が点々と落ちるその先へ。急げ。急げ。急げ。

口から荒い息が零れ落ちた。止まるな。走れ。息を切らして、その先へ。

犬の如く、地面を這いつくばる勢いで辿る。

これは、証拠だ。これは、あの悪夢からの、贈り物だ。信じたくない等と、甘い事を言っている俺に。なら、ならどうすれば……

「死ねやあっ!!」

耳に届いた叫びに、顔を上げる。

声の主は、既に、その檻樓の刀を振り上げていた。目の前には——

肩口を紅く染めた少女の姿。姉だ。見た通りの光景だった。

下卑た笑顔。死の予感。そして……絶望的な、距離。致命的な遅れ。

止めろ。

声は、間に合わない。手は、届かない。思いは、届いた所で——
止めろ。止めろ。止めてくれ。

喜六郎の頭を埋め尽くしていく叫び。それが……限界まで達する。姉が死ぬ。その事実を認めたくなくて。それが——誰の手によつてか。その答えを認めたくなくて。

石のように固まった口から——

「——とまれええええええええっ!!!」

飛び出した咆哮。

それが呼んだかの如く、翠の輝きが——視界を、埋め尽くして体の中を外も中もズルズルはいずり回って肩から腕から腿から足先まで止まらなくて何処を通る答えは体の中の細い管に満ちて行って体が音を立ってねじれて変わって行くのが分かって手も足も犯していくのが分かって自分じゃなくてこれはなにものかが

ガチン

頭の中で。

何かが。

組み合う音が聞こえた。

憑依

全てが唐突だった。

少しばかり風に当たろうと——ついでに、少しばかり父から話された『当主』についての事を考えよう——外に出た。

室内でぐちぐち考えるよりも、こうして外に出て考える方が性に合っていたから。

その最中だった。何者かを問いかける間もなく。風体からして浪人だろう男共。

「吉法師、だな」

しかし、自分の名前を呼んだことで、即座に意識を切り替える。恐らく自分を殺す為に雇われた刺客だろう。

喰うに困った浪人共に、護衛も付けずに外に出たうつけが襲われて死んだ。考えてみればしつくりとくる筋書きだ。

誰がそれを仕掛けたのかも、凡そは察しが付いた。そこ迄自分が恨まれていたとは、想像の外ではあったが。

とはいえ。そのように意図が分かっても抵抗できるかは話が別だ。相手は大人が数人。此方は子供が一人。吉法師で無くてもそれが

どれだけ絶望的なのは分かる。

力の差、数の差。その二つが揃った時点で、勝つ事は土台不可能であることは吉法師にも分かり切っていた。故に——逃げ遂せる期を探っていた。

別に真つ向から戦ってやる必要などない。上手い事逃れ、家にまで戻れば此奴らも捕らえられるし。そして、絵図を描いたあの方にも、釘を刺す事も出来るだろう。

吉法師には、凡そ全てが察しが付いていたのだ。だからこそ、先ずあつさりと抵抗を諦めてから、その次につなげようとしている。

——母を殺さぬように抑えるには、それが一番だろう、と。

「つたく、ちよこまか逃げやがって……ま、一発当たって足が竦んじまう辺りは、やっぱりガキだな」

男の刀を観察する。

後ろに括っていた、自分と同じ母譲りの黒髪を、ざんばらに広げて、上体を倒し、頭をだけを暴漢に向ける様に立っていた。

自分の前に立つその背中は……自分の記憶にある弟のそれとは、まるで似ても似つかなかった。

「おい」

その一瞬の疑問を解決する前に、目の前の少年は、低い、低い声で問いかけた。弟の子供らしい声とは思えぬ、野太い、耳に届くような声だった。

「……な、なんだコイツ」

「何処をカいて欲しい」

「は？」

「言わないのか？ 言わなければ……俺が勝手にカいてやる」

それに応えるか、応えないか。

それを相手が判断する前に、喜六郎はその手にした木刀を――

バギイツ！

「ぎゃっ」

「鼻だっ」

思い切り相手の顔面に……それも、鼻っ柱に向けて、叩きつけた。

不意打ちだった。猿叫の如き声と、乱入で度肝を抜かれていた男にとつては、相当の一発で合つたろう事は、男がその一撃であつさりと倒れてから吉法師も遅れて理解した。

同時に、驚いている。自分は、今。目の前の少年――喜六郎の動きに、呑まれていたのだ。間違いなく。目の前の男達と同じように。

「――っ!? こ、コイツっ」

「耳だあっ!」

「えっ、ぎいっ!?!」

自分より、一步、二歩遅れて正気を取り戻した男が近寄ろうとする前に、一步踏み込んだ喜六郎が、相手の……耳を、抉った。殴ったのではない。木刀の先で、耳の穴に真正面から無理矢理に突き入れた。

無理矢理なその動きに、やられた男の耳は半ばから、ぶちりと半分に千切れていた。耳たぶが、ではない。耳が、耳穴も含めた耳が、で

ある。

「良いじゃないか。良く力けているよ。キレイだよ」

「ふぎけんなあッ!」

二人がやられて、漸く他も戦意を取り戻した……と言うより、感情に振り回されたのだろうか。後ろから喜六郎に襲い掛かる。

吉法師は。その一撃が、当たるとは思えなかった。

それは、男が大したことが無い刺客だと、分かっていたからか？

そうではない。それ以上に、今の弟から溢れる異質な気配が、そんな小物にやられる訳がないというのを……

「お前は指かッ」

「ぎっ!? い、だっ……」

「指だっ! 指だっ、指だっ、指だあッ!」

「あぎやっ!? やめ、やめてっ、ひぎっ、ぐれえっ!」

確信、させていたのだ。

結局後ろから襲い掛かった男は、目の前で、振り上げた拳を木刀によつて強かに打たれ怯んだ。

その大きな隙に付け込む様に、くるり、堂々と振り向いて、更に手にもう一発。そして、もうしゃがみ込んでしまった所に、さらに何度も何度も、木刀を振り下ろす。

殴られて、男の指はもう何本か曲がる筈の無い方向に曲がってしまっている。

仕留める、というやり方には、到底見えなかった。

「なんだ……なんだってんだ……チクショウッ!」

「——あっ、ちよ、ちよつと待て!」

その様子に気圧されたのか。最後の一人が逃げ出してしまふ。吉法師が止めようと思つたが、しかしもう既に、男は背中を見せて逃げ出している途中。止まる訳もないと、一つ溜息をついた。

喜六郎が乱入したせいか、予定が狂ってしまった、とため息を一つ。助けて貰つたのは確かだが、と一つ眉をひそめながら振り向く。

「全く……喜六郎、お前なんで付いて——」

「もう片方もだ、さあ。折角指を力くんだから、だせっ、もつと出せ」

その先で、喜六郎は、再び木刀を振り上げていた。
は？ という言葉が頭を埋め尽くす。

殴っていた男の片手は、完全に折れて……否。二、三本、欠けている。男の周りは、振り回された木刀から飛び散った血で真っ赤に染められていた。男は悲鳴どころか、恐怖で声も出せていない。

「やだっ……！ ゆ、るじ、て……！」

「隠すな、出せ。足りないだろう。紅が」

襲って来た相手を返り討ちにするのでもない。弟は、人間を破壊するのを楽しんでいる様に見えた。

幾らなんでも、残虐に過ぎる。襲ってきたとはいえ、何をしても良い訳ではない。傷を抉って痛めつけるような真似は、武士として些か以上にマズい。

「オイ喜六郎、もういい。止せ」

完全に男は戦意どころか、正気を保っているかも怪しい程だ。一旦やめさせようともう一度声をかけて……ふと、その横顔を見た。

その顔に走る、翠の線を見た。

目を疑った。凡そ、人間が……いいや、生き物が象る筈もない、幾つにも枝分かれした直線が、顔をびっしりと、するするするするする
這いまわっていたのだ。

何かに、侵されている様だった。

その顔が、見た事もない異様な、満面の笑みを浮かべていた。
楽しんでいる、笑顔ではない。ただただ、純粹に何が可笑しいのか、笑っていた。

血の付いた木刀を、まるで子供の様に振り回して。血が、地面にびちやびちやと飛び散らせて。それを見て……笑っていた。

「出せっ、カいてやる。俺がカク！ カかせる、カかせるお！」
マズい。

吉法師は、直感的にそう思った。故に——

「喜六郎！ 貴様、俺の言う事が聞けんのか!!!」

先ほど以上の大声を出して怒鳴った。怒鳴る、なんて何時ぶりだろうかと吉法師は間の抜けた考えを抱いた。大きな声を出す事はあつ

た。威圧の為に。だが、誰かに心乱されたのは、そう無い経験だった。その言葉に、漸く喜六郎の動きが止まる。

振り上げていた木刀を、ゆっくりと下ろして……見える横顔からは、いつの間にかあの可笑しな模様も消えていた。

ふう、ふうと呼吸は荒く。困惑した様な顔をして。

それから、周りを見回した。鼻が折れて倒れている男。耳が抉られて蹲っている男。そして自分の手の惨状を見て、笑っているのか、泣いているのか。分からない表情を浮かべている男。それぞれを。

「……」
「喜六郎、お前……」

先ほどまでの異質な様子。それを問いかけようと、最初は思った。だが……しかし。

「……あね、うえ」

「……」

しかし、それを思い留めたのは。

振り返った彼の顔が、必死だったから。

助けを求めようとしているようだった。瞳はゆらゆらと揺れていた。しかしながら。それでも齒を食いしばって。必死に声を出さぬように、耐えていたのだ。

どうして助けを求めないのか。吉法師には分からない。だが、その表情を見て、喜六郎がどんな状況なのか、察せない訳がない。寧ろ……察せられてしまう。

今にも悲鳴を上げそうな顔だった。金切り声が、今にも耳に届きそう。そんな悲痛な顔だった。

「おーい、喜六郎！……ちよつと言い忘れ……て、た……」

そんな時間こえてきた声に、振り返る。

道の向こうから勘十郎が駆けてきているのが見えて……そして、此方の惨状を見て、その顔を歪めたのがはつきりと分かった。

「――姉上!? どうしたんですか!？」

「……刺客だ。いきなり襲い掛かってきよった」

「し、刺客……そんな、いったい誰が……えっと、ち、違う！ それよ

りまず姉上の手当しないと！ ええつと……」

そしてその時だ、勘十郎の顔が、ある一点で止まる。

「……喜六郎？ どうしたんだ？」

「あ……」

視線の先に居るのはやはりと言うべきか、様子のおかしい喜六郎であつた。

「あにうえ……」

「なんで木刀なんかもつて……つて、うわっ!? なんだ此奴ら!?

えつ、えつ、もしかして此奴らが刺客……!?!」

「——っ!」

その直後だつた。

喜六郎が、勘十郎に駆け寄つて。この腰に縋りついたのは。

「……はっ、えつ、なに!?! なんだよ一体!?!」

「あにうえ、あにうえ」

絞り出された声は、震えていた。かすれていた。

「……な、なんだよ」

「あねうえを、ははうえが……」

「!」

勘十郎に向けて告げられたその言葉は、凡そ吉法師には想像できていた事だったが、しかし勘十郎には想像だにしない言葉だつたのだから。分かりやすく顔を驚きで染めているのが丸わかりで。

「あにうえ、わたし……わたし、どうすれば」

その言葉を……吉法師は、些か酷な問いだと素直に思った。

母が、姉を殺そうとしている。それを勘十郎は分かっているのだから、そこから先ず一つ、彼は考えなくてはならないというのに。

その上で、どうにかしてくれ、等と。

理解の外だ。今の勘十郎には、答えられないだろう。そう、吉法師は思っていた。

けれど。

勘十郎は……先ず一つ、息を吸つた。そして……ぎゅつと目を閉じて。口を引き結び……もう一度、目を開いた時。そこは一つ、此方の

目に飛び込んで来る細に強い光が宿っている様にも見えて、吉法師は驚いたのだ。

自分に何やら色々言っている時の、あの思考を停止した目では、到底あり得ないモノ宿したまま、喜六郎の体を抱き締めた。

「だ……大丈夫だ」

勘十郎は、喜六郎よりも、ハッキリと。声に出して。言い聞かせるように。

「お前は、弟なんだから。兄の、僕がなんとか、してやる」

「あにうえ……」

「弟の癖に、変に考えるな。馬鹿」

そう、言った。

その時。吉法師は、今まで『聞こえて』いなかった勘十郎の言葉を、初めてハッキリと『聞いた』気がしたのだ。

脈動 夢宙

朱く。朱く。朱く。そこは熱気巻き上がる死地。地獄の底かと間違えよう焔の海。壁も床も朱く嘗め尽くされた出口無き袋小路。四方八方より聞こえる剣戟の音と、命の潰える音。悲鳴。掛け声。

そんな中心に、座して笑う白装束の女が一人。否、将が一人。

『是非も無し』

女は、そうなんて事の無いように呟いて。

渦巻く焔は、その女を風の如く連れ去ってしまう。その後には、何も残らなかった。

そして。

紅い。紅い。紅い。まるでつららの如く、その細い体は冷え切つて、命の息吹という物を感じさせない。ぴちやり、ぴちやりと命を繋ぐはずの血潮は、静かな室内で、刃を伝って床へと零れ落ちていく。

男は、余りにも穏やかに腹を割って死んでいた。

『後はお願ひします、姉上』

男は、当たり前のように言い残して。

当然の様に自ら死を選んで。温もりは、もうどこにも残ってやしなかった。

死んだ。死んだ。死んだ。

なんて事の無い様に。大切な人が、二人死んでいた。力が抜けて、蹲つて、地面を見つめる。

いつの間にか脈動する何かの上に居た。生き物の様な鼓動が耳に届く。それはしかし生き物には到底見えなくて。見た事もない様な管、金属で作られた部品、そして——顔、腕、足。人ではない、人型で埋め尽くされた、灰色の地面の上に。

二角の角を持つ物。

巨大な槍の様な物が腕の代わりに持っている物。

異様に長い腕を持つ物。

ここは人ならざる者達の、死骸によって、作られていた。いつの間にか、立っている足に管の様なものが絡みついて、少しずつだが、ズルズルと這い上がってくるのが見えた。

天を見上げれば、此処は、何処までも広がる虚空の中にある事が分かる。

夜空にも似た暗さ。紅い巨躯が住まう、あの黒い孔の如き色。

天上に星が瞬くその空間には、星が瞬いていた。巨大な流星が、この大地を嘲笑うように天を飛び、そして、その流星の落ちる先を追って行けば、巨大な白い何かが、はるか遠くを闊歩しているのが見えた。

一步踏み出すごとに震える大地。それに合わせ、ギギギ、と何かが擦れる耳障りな音と共に、投げ捨てられた腕が動いている。首が震えている。足が踏み出そうと不格好に足掻いている。

「――」

ナニカ共の終わりの上で、喜六郎は、天を見つめた。

その先に、白とは違う、巨大な影があった。

三つの顔が埋め込まれたその異形は、どこか空の向こうのアレに似ている気もしていた。

だが、その色は赤ではない。灰色だった。崩れ、文字通り灰になって散っている様にすら見える。その影も、周りの大地のモノたちと同じく『終わり』を迎えた後の様に見えていた。

白い巨人は、それに向けて歩みを進めていつている。

「――なんなんだ、お前らは」

質問に答える事もなく。

大地の終わったモノ共は何も答えはしない。それどころか地面から延びる管は、もう既に体の半ばまで覆い尽くしている。

最早動けない自分の周りには、翠色のホタルの如き輝きが漏れて、辺りを漂っているではないか。まるで自分を取り囲んで、逃がさないかのように――

はっ、と目を覚ました。

着物は汗で酷く冷たく、そしてじつとりと湿っていて、肌にはべたり張り付いている場所まである。酷く不快な事この上ないが、しかし、それでもこの着物に、今は縋りつかざるを得ない程に、心は不安だった。

嫌な夢だった。人が凄惨に死ぬ夢など。

だが、それだけでここまで取り乱してしまふのであれば。彼はとつくのとうに潰れているだろう。それでもなお。

あの夢は、それだけ心を乱されるのに十分な力を持っていた。

灰色の大地。その後ろに聳え立つ朽ちた巨体

アレに、喜六郎が見覚えが無いわけもない。間違いなく天より覗く『アレ』に連なるものだろう。大きな違いがあるとすれば。あれら全ては最早残骸でしかない事であろうか。

砕かれ、ばら撒かれ、そして最早、大地を埋め尽くすのみ。天の彼方にあるだけで、人一人を狂わせ得る存在とは、文字通り天と地ほどの差があった。

彼自身の感性で物を言うのであれば……どうしてもなくあそこにあった全ては『終わって』いたように感じた。ただの『物』の筈なのに。無数の死体が積み重なった如く、悍ましさすら感じさせる『終わり』の景色。

あの異様な光景を誰が見せたのか。それは最早、考える必要すらない。

問題は、なぜあの光景を見せたのか。そして。

その直前に、どうして別の景色を挟み込んだのか。

「——ただの夢だ。そうに決まっている」

燃え盛る焰の中で、少し寂しげに笑う女。己の手で腹を裂いて、しかしながら笑った男。

その二人は、揃いの濡れ羽色の髪を揺らし。とてもとても紅い、滾る焰よりも、滴る血よりも、なお輝く紅い目をしていて。

まるで、自分とそっくりな。そんな。

——喜六郎が夢に見たものは。

何よりも愛しい。誰よりも離れがたい家族。
姉と、兄の。非業の死の姿であった。

「——喜六郎！」

ふと、名を呼ばれ振り返った。

屋敷の廊下、その向こうで、大柄な男——側近である、柴田勝家を
供に付けた華奢な姿の男が此方を見ている。多少背丈が伸びても、些
かと武家の男としては色々と頼りない様に見える。と言うよ
り些かと、顔つきが可愛らしいので、むっけき、とまでは思えぬので
ある。

まあ彼がそうは思えなかったのが、自分がそもそも背丈に置いて兄
も、姉も、越しているから、と言うのもあったが。見下ろす形、とい
うのは予想以上に相手への見方に影響してくるものだ。

「……兄上、もう私も元服したのですよ。何時までもその名前で呼ば
れるのは」

「なにおー。お前は何時だって僕の弟の喜六郎だ。呼んで欲しけ
りや、そう呼んでもらえるだけの働きをして見せろー」

「しても絶対呼ばないでしょ……全く」

いよいよ元服を迎え。

喜六郎が秀隆と名を改めて。

されど、勘十郎——信勝との関係が変わる事はあまり無かった。相
変わらず秀隆に兄貴風を吹かせ、何時だって幼い弟を構うままだ。

背丈が頭一つ違うというのにこうして自分をかがませて、頭をわし
わしとするのをやめない辺り絶対に、元服した、と言う事実を気にし
てはいない。武家の子として大切な儀を迎えたというのに、と少し複
雑な気持ちにもなる。

そこ迄可愛がってもらえている、というのは嬉しい事なのだが。

「の、信勝様！ 秀隆様ももう立派な武士なのです、その様に子供をあ
やす様な……」

「別に構わないだろうが。コイツは何時だつて僕の弟なんだから、弟扱いをして何が悪い。変に背伸びするのは相変わらずだしな」

「しかしですなあ」

「大丈夫ですよ勝家殿……もう慣れておりますが故」

こうして家臣に見られる事が、些かと気恥ずかしいのもまた事実。

一応、一人前の武士として認められた歳なのだから、兄上もその辺りを気にして頂きたい——等と……まあ間違つても口には出したりしないが。

「それで、如何なされました」

「あ、そうだ！ 聞いてくれ！ 僕、姉上と一緒に城に行くことになつたんだ！」

「——それはそれは、良かったですね。兄上」

このように。一人前となつた証として、領地を守るための任に付く様な年なのだ。流石に弟扱いが恥ずかしい、等と取り乱したりは出来ない。それこそ、周りの失笑をどれだけ買うか。

……正直な所、そう言う反応をすると、兄が凄まじく不機嫌になるので、兄の前では特に抑えている、というのも無いでもないがそれは兎も角。

「姉上を兄上がお支えする、正に隙の無い布陣ですなあ」

「当然。まあそもそも姉上が居れば全く問題はないから、僕は暇を持って余す事になるだろうが……それでも、姉上を侮る馬鹿共を見逃すわけにはいかない。姉上は寛大でも僕はそうはいかないって事をしっかり見せて行かないとな。そうだろう、権六」

「はっ」

姉——信長がここ、清州の地より別の城に居を移し、領地の経営に携わるようになってから、それなりに経つ。いよいよ領地の運営を任されたというのに『退屈そうだ』とぼやいていた姉の様子を思い出す。

兄も最初の方は姉を応援していたものの、姉に会えない期間が長引けば、分かりやすく寂しそうにするようになって。その代わりと言わんばかりに、こぞつて秀隆に構つて来た。

幼い日の如く、とは行かずとも。やれ修練に付き合え、絵を描け、姉

上の絵を描け、散歩に付き合え、仕事を手伝え……下手をすれば、側近である勝家以上に、彼の側近的な役割を負っていたかもしれない。お陰で勝家とも大分仲良くなった気がする。

秀隆自体、それが嫌だったかと言え……まあそんな事は無い。

兄弟仲良く、と言うのは彼も望むところだ。姉にも欠かさず毎月手紙を送っている秀隆が、構ってくる兄を鬱陶しく等思う訳もない。

姉に関しては、暇を紛らわせるための極上の絵も一緒に送れ、と言われていたというのもあるが。お陰で昔以上に絵に気合を入れる事が多くなった。

「ま、僕は向こうの城で姉上と楽しく過ごすが……お前は大丈夫か。喜六郎」

そう言われ、笑いが零れる。

こうして構われるのも、暫し無くなると考えると、少し寂しい気持ちにならないでもないが。流石に心配される程ではない。

「聞かれずとも問題はございませぬ。最近任された仕事も問題なく……」

「そんな訳ないだろう。僕が知らないとも思うのか」

僕が来たのは、その為だぞ。

そう言いたげな顔……先ほどの楽し気な顔とは、一転している。この兄に隠し事は不可能かと、思わずして笑ってしまった。

「僕が居なくて、大丈夫か」

「……お気遣い、ありがたく。しかしながら俺ももう立派な武士。この程度の事でそう凹んでいても居られませぬよ」

「程度、じゃあないだろう」

視線がより鋭く自分を射抜いているのを見てしまうと……余計な事を口から漏らしてしまいそうになった。それを、グググつと堪えて見せる。

兄が居なくて寂しくないのか。

信勝は、そんな事を秀隆に対して聞いている訳ではない。

秀隆とて、自覚をしていない訳ではない。今、この城に置いて。彼に明確に味方する存在は居ない。文字通り、秀隆は一人なのだ。

孤独

——木刀を振る時に意識するのは、絵を描く時の筆だ。

筆の先に見立てた切っ先で、目の前の景色を墨で塗りつぶすような意識で振り下ろすのだ。すると切っ先は真つすぐブレず、ストーンと下まで振り下ろせる。

無駄に力んだりせず動かし、そして最後にピタリと止める。絵筆の扱い方と、剣の道には一種通じるものがある。絵の腕が仕上がると共に、剣の腕も上がって行くようになったのは一体何時ごろだったか。

「……九百八十一」

ある意味助かつたとも言える。

絵の腕だけでは、家中の者共にも軽んじられていたかもしれない。こうして、孤立して居て尚、三男坊としての面目を保っているのは、剣の腕もあつてこそだ。

二つが連なり、比翼が如く鍛えられれば、後は学問だけを自力で頑張ればいい。彼は学問自体はそこまで得意という訳ではないので、努力の比重を傾けられるのは幸いだつた。

姉と、兄と。

双方との仲を決して変えない。幼き頃からの、兄弟、姉弟としての距離を変えない。そうして生きて来た事の代償ではあるのだから、当然と言えば当然か。

もう姉弟、皆が次期当主を争う様な年になつた。

皆が元服を迎え、一つの節目を迎えた。それは一人の武士として認められると同時に家の状況に大きく巻き込まれる年になつたことも表していた。

兄を支持する母と姉との確執はさらに深まっていつて、いよいよ姉を支持する者、母と兄の側につくそぶりを見せる者。はっきりとその形は分かれていったのである。

「九百、九十ッ……！」

普通なら何方か一方を支持する動きを見せるのが普通だろう。

だが、秀隆はその常道に沿わず、ずっと何方にも良い顔をしていた……様には周りにも見えただろう。何方が沈もうとも何方かに乗り換える。そんな卑劣な男に取られる事もあったかもしれない。

更に言えば。どっちつかず、というのは、何方が当主の椅子に座つても疎まれる立場になるのは間違いない。そんな不安定な立場に望んで立っている秀隆に近寄るといふのは、自分から立場を悪くしに行くのと同様だ。

「——九百九十九」

要するに。彼はそう意識した訳でもないのだが、まるで『蝙蝠』の如き男だと家中の者の不興を買って、結果、孤立を深める事になっている。

それが困っているか、と言えば。別に秀隆は一切困っていない。

兄と姉が居ればその他はどうでもいい……と思っている訳ではないが。別に他者と交わらねば人間死ぬわけでも無い。印象は、これから変えて行けばいい。

こうして武士として一人前の年になったのだから、働きて幾らでも見返す事は出来るだろうと、実に前向きに彼は生きていた。

それに、彼にとって、周囲からの孤立など慣れたものだ。更に言えば。自分のこの景色を本当の意味で理解してもらえない者が居ない以上は、自分は『独り』である事を変えられないとも、最近思う様にもなった。

「千……ッ！」

そうなった時、結局は『個』の力しか、秀隆には頼るものがない。

秀隆にとって、武士の誉れだなんだというのはあまり気にならない。しかし、鍛えたこの剣が兄と姉の役に立つのであれば。それに勝る喜びはない。母と姉の確執が行きつき所まで行った場合……最後には、きつと力による勝負になるだろう。

その時、自分が弱ければ何もできやしない。そういう世の中だ。秀隆が生まれた時代というのは。

どこまで我を通せるかはわからないが。

それでも何もしないよりはよっぽど、よっぽどマシだと思って鍛え

てきた。

それに。鍛える理由は、それだけではない。
天を仰ぐ。

今日も、青い筈の晴天の空を塗りつぶし、翠の極光は秀隆に降り注いで、そしてその大本の存在は自ら太陽か何かであると勘違いしているかの如く、堂々と天の彼方に座すばかりである。

アレを見れるのは、秀隆だけであり。

アレからの影響を受けるのも秀隆ただ一人だけである故に。

負けないようにに、必死になつて鍛えているのだ。一人でも負けぬように。強くあれば、何も揺らぎはしない、と信じて。一人、強くなろうと腕を磨いている。

加えて言えば。

一人でいるというのは、決して悪いことばかりでもない故に、一人である今を維持している、という側面もある。

「ふう」

縁側に腰を下ろす。素振りに区切りをつけた汗だくの体を、手拭いで軽く拭きながら。横目で見つめるのは、庭に面した廊下だ。そこを二人の男が歩いて行くのが見えた。

数日前に、信勝の近くで見た事がある男共だ。向かう方向は……母、土田御前が居る部屋である。その辺りで『何かしらの内緒事か』と当たりを付けた。

この後は、母に会いに行かねばならない。

母の様子を探り、万が一の場合は止めねばならないだろう。周りから蝙蝠とは思われて居ようとも、未だ彼は、母の元を離れた事は無い。というより、母の側からは『信勝側』に初めから付いている様しか見えない様に行動している。

周りに何方かについている味方が居ない、という事は、自分一人の目で、何方かに寄った意見に左右されず、物事が見えるという事でもある。兄も姉も、何方も支える積りの秀隆にとって、母の動向や、家中の勢力図を俯瞰で見られる今の位置は、まさに理想と言えば理想だ。

最悪、姉に母の動向を知らせる、間者の如き真似も覚悟していた。

「……全く、母上も元気な事だ」

秀隆にとつての理想は、姉である信長が無事当主の座に座り、母が信勝が当主になる夢を諦める事だ。

実際、兄が姉を当主とするべき、という意思を持っており、自分では務まらないと零しているのだからそれが自明の理だ。そもそもやるべきではないと当人が言っているのにそれを無理矢理押し上げようとするのが不思議ではあるのだが。

母のそれは、些か度を越している。

それを止めるには、些かと強引だが……敗北という強い劇薬で、大人しくさせるしかないという確信があった。

生中な事ではきつと母は止まらない。止まらない。ならば最悪、自分が泥を被つても母の望みを終らせなければならぬ。

愛されている兄ではダメだ。母は余計に躍起になる。

憎まれている姉でもダメだろう。敵では当然無理だ。

だから他者からの仲裁が必要なのだろう。彼女にとつて二人に遠く及ばぬ存在からの言葉が、彼女を冷静にさせる。

「全く、憎まれも、そこまで愛されもしないからこそその役割とは」
面白いではないか、と彼は笑う。

彼は母を心から『家族』として愛している。だが、母にとつて自分
はただ一人の『子供』でしかない。兄の様な『愛する子』ではない。
他者であり、しかしながら身内だからこそ、口にしやすい立場にある。

——もう終わりにしないか、という言葉を。
他の家臣ではなく。

自らが救い、そして彼女の意に沿うと思っている、自分からの言葉
であれば。恐らく一番冷静になれるのではないだろうか。

感情ではなく、冷静に『引き時』と考えられるのではないか。

今更ながら。彼は、自分の役割という物に因果を感じざるを得ない。
い。

最悪の破滅を迎えそうだった所を母に救われた自分が、今度は母の

最悪の破滅を回避する為に動くというのは。

恩を漸く一つ返せるのではないか、と思う。

「まあそう思えば、骨を折るのも苦でもない、か」
腰を上げる。

自分にやれる事は決して多くない。それでも全てが大人しく着地するように、祈りながら母の下を訪ねようとして……

「――秀隆様！」

「ん……勝家殿か」

だがその前に、自分呼び止めた声に振り返る。此方に走りながら声をかけて来たのは兄の側近である勝家であった。

「何用か」

「狼藉を働く賊の討伐を行うので。秀隆様もその一勢に加わる様にとの命が」

「――承知した」

どうやらその前に、仕事の一つ増えたらしい。

頷いて、自分の部屋に向けて踵を返した。出陣なのだから流石に木刀で殴り倒す訳には行かない。賜った刀を持つてくる必要があった。

障子戸を開け、部屋の中に足を入れる。

筆や、紙が散乱する中を蹴散らかし。壁にかかったそれを掴み取る。

銘も知らない刀だが、切れ味は悪くない。頑丈で、実戦で使うのであれば最適と呼べるような刀だ。実際――人を切るのに、支障をきたした事は無い。

引き抜けば、手入れされて鏡の如き刃が顔を写す……兄や姉よりも、些か老けている様にも見える、自分の顔が。

「……よし」

パチリ、と刀を収め。

そこから改めて抜刀。虚空を切り払う。

振り切った剣の軌道に微塵も揺らぎはない。問題なく一撃で相手を切り伏せられるだろう。調子は悪くない。

一つ心配はあるが……それは気にしても仕方ないだろう。

少しばかり震える、刀を携える手を見て、ため息を一つこぼした。

使者

「がっ……」

勝負を決したのは、一太刀。

首の傷からから血を吹き散らし数歩よろけた後、相対していた賊が倒れ伏す。それを見届けてから、刀についた血を振って払い、鞘へと納める。パチリ、とハバキと鍔が鳴る音を聞いて、一つ息を吐いた。

最初の威勢こそ良かったが、最初に一撃で仲間が切り伏せられてからは、一気に総崩れになり……残党狩りの如き有様。そのまま森の中に追い込んだ後は、そう難しくもない任に変わった。

手応えが無い、等と己惚れた事を言うつもりもないが。必死に磨いて来た腕に見合う相手かと言えば、まあ違おうだろうとは、秀隆だつて思う。

「すげえな……全部一太刀で終わってる……」

「無駄が無い、というべきか」

「剣の腕だけなら柴田様以上というのも、まんざら嘘ではないのかもしれん」

それは、間違いなくただの噂だろうと思う。もし勝家と面と向かって戦う事になれば自分が負けるのは目に見えている。十度剣を交えたならば、三は勝ちを拾えるやもしれないが、七は絶対に向こうに軍配が上がるだろう。

喉を切り裂き、心臓を突き……兎も角、人体の弱点を突いて基本的に一撃で仕留めるのが、彼の得意とする剣術だ。『巧い』と評される側の戦い方だが、しかしそれ故に力で押し切られたりするには対処できない。

勝家の剣は本物の剛剣だ。小手先の技術に頼っている秀隆に勝てるとは思えない。そもそも、秀隆が得意とする技においても、向こうの経験から考えてそこ迄差があるわけでも無いだろう。

「——これで、全部か」

「あ、はいっ」

「であれば、任は終了だ……お前たちは、戻っていて構わん」

「え？ 私達は、つて。秀隆様は」

「すまない。少しもようしてしまつてな。終わらせたら俺も帰る」
「左様でしたか。であれば、某たちはこれで」

——それに、勝家と、秀隆には、致命的な差という物がある。

立ち去っていく部下達の後姿を見つめ、それから……傍に有った木に、体を預けた。先ほどから震えが止まらなかったのだ。無理矢理、力を込めて抑え込んでいたが、それももうもたない

そのまま、木に背を預けたままに、地面に座り込んでしまった。

そのまま両腕で体を掻き抱いて、体を縮こませて、震えを抑え込もうとする。

血が、手に握られた刀の重みが、倒れ伏す人が。重なる。あの日の景色と。

人を破壊する、ということを嫌というほど知った。

相手の体を千切つて、叩いて挽いて。その時の感触。それが、手に残っている。

そして……その間の、悍ましい感覚も。

体の中に、何か自分とは別のものが……ミミズのような、ムカデのような、冷たい何かが。自分と溶け合おうとしつつ、体を動かしている。肌の下、腕の中を、這い回るかのようにズルズルと。

「……止まれ、止まれ……気を確かに持て」

あの食欲さは、まるで底なしの沼のようだ。口だけの巨大な筒状の化け物に飲み込まれてしまえば、もう出てこれない。自分というものを失いそうになる感覚……人の体をぐちゃぐちゃにする感触。

人としての何かを狂わせるような記憶に……秀隆はずっと悩まされている。切り裂き、人を切つて血が飛べば、その時の感覚が当たり前のように蘇ってくる。血の匂いが、人の悲鳴が、呼び起こす。

彼が、人を最低限の一撃で戦闘不能に追い込む戦い方を選んだのはこの為だ。出来るだけ血を見ず、悲鳴を上げさせず倒す。それでようやく、秀隆はまともに戦う事が出来ている。それですら、戦った後はこのザマなのだ。

「——うえ……ぐ……」

そしていよいよ、喉の奥から何かがり上がり、少しでも森の奥へと進むために歩き出す。ゆつくりと立ち上がり、少しでも森の奥へと進むために歩き出す。万が一にも、はいている様子など見せられない。

木を伝って、出来るだけ、奥へ、奥へと向かうが、力が入らず、足元がおぼつかない。視界がぐわんぐわんと、嵐にでも巻き込まれたように揺らぐ。幻覚でも見そうな状態ではないか、と自嘲する。

早めに吐いて、少しでも楽になろう、何処で吐こうか、と地面を頼りにしつつ首を回して周りを確認しようとした……その時だった。

木漏れ日の光の中にちら、と何か映り込んだ気がした——何かの、足の様な。

「——っ!？」

顔を、直ぐに上げた。

それが足であると断定できなかつたのは、秀隆が見覚えがある、人間の足とは、明らかに骨格が違う。指の先まで、蛇の様な鱗を持っていて、爪が恐ろしく尖っていた。指の数も人のものよりも明らかに数が少なつたような。

周りをゆつくりと見まわす。

……いた。存在した。幻覚などではない。木々の合間に、ぬぼう、日本の足で立っているのが見えた。そして、それだけではない。

尻尾だ。尻尾が見えた。人ではあり得ぬ、大蛇の如く太い尾。あれで締め付けられれば間違いなく全身の骨も砕け散るだろう。力と肉の塊だ。

その足をたどって、ゆつくり顔を上げる。そこには……

「——ああっ」

居る。異形の化け物が。

頭为天辺に生えた、間違いのない一匹の蛇の頭、その下の蜥蜴の様な瞳はこちらを見つめている。笑顔を、浮かべながら。

実に大柄な体だった。秀隆よりも頭一つ、否、二つは大きいかもしれない。足どころではない。腕も、顔に至るまで。全身に鱗をまとっているその姿は、明らかに物の怪と呼ぶに相応しいだろう。

敵なのは間違いはない。

吐き気を、気合で無理矢理押し込めて、腰の刀を引き抜いた。万全とは言えないが、何もしないよりはマシだ。

『』

「な、何者だ……」

『貴様は、選ばれたのだ』

刀を突き付けた秀隆の問いに答えることもなく、物の怪は朗々と語りかけ……。

『滅びし者共の旗印。彼らがこの世界に再び、舞い戻る——そのために！』

「何を、何を言っている、貴様」

『貴様が見つめるあの空より……ワシは遣わされた。貴様に運命を告げる『像』として！』

そして、チパア、とその口を大きく開けて笑い。

ゆっくりとその鋭い指を、ゆっくりと持ち上げ、そして天へと向けたのだ。

その指が向けられた先は、赤い巨軀。

秀隆はそうと分かった途端……腹に気合を入れて、剣を構え直した。先ほどまでの様な形だけのものではない。いつでも目の前の相手に切りかかれるように。

初めてだった。

向こうから明確に接触を図ってくるのは。この機に、聞きたいことは、秀隆には山の様にあった。

「——あれからの使者だと？」

『お前も知っているだろう。ゲッター線の満ちた宇宙に浮かぶあの船を！』

「げったー……それが、あの天上のモノの名前か！」

『そう。ゲッター……ゲッターエンペラー！』

ゲッターエンペラー。

その言葉を、何度も頭の中で繰り返す。

今まで知りようもなかった、その名前。

『しかし我らでは此処に手を出すことはできぬ。』

「何だと、いったい何の話をしている、貴様は」

『お前でなくてはいけないのだ。形にせねばならぬ。一度、失われたものは……形にせねばならぬのだ。故に、お前が形にする。目と、その腕で』

「形にする……？」

『ゲッター線をただ一つの形へと成せ、織田秀隆！ その時こそ、お前はゲッター線の真実を知る！』

——ふぎけるな。

天上に向けて。

その彼方に今もある、ゲッターエンペラーなる存在になってに向けて。吠えたてた。腹の底にある、煮えたぎるような物を、吐きかける勢いで。

「——何を、勝手な事を！ 誰が貴様の思うとおりになどなるか!!」

秀隆は、間違いなく今までで一番激昂していた。

どんな存在であろうと、もはや関係ない。

アレに自分はどれだけ……どれだけ人生を狂わされてきたのか。

その上選ばれた、などと。勝手に決められて、口にされたとて全くもって納得出来るわけがない。むしろ、勝手を言われさらに頭の中は煮えたぎる溶岩の如く、最早、蜥蜴男に切りかかっているのは、切つて何とかなる相手ではない、という僅かな理性の糸で持たせているからに過ぎない。

「言葉を選べ無礼者……次にふぎけたことを抜かせば、切るッ！」

『フフ、威勢の良い事だ。やはり、ゲッターの操縦者はこうでなくては』

だが、そんな秀隆の迫力など、蠍の斧だとも言いたげに物の怪は泰然としている。むしろ、秀隆の様子を面白がっているかのようにすらあった。

「なにい？」

『何れ全て分かる。己自身でゲッター線を求めた時、全てがな』

——目の前が真っ赤に染まって。

気が付けば、抜刀して切りかかっていた。相手の首を刎ねる積り

で、全力で振り抜いた。最低限の動きどころか、力任せの一撃だった。しかしながら……太刀の一閃は、物の怪の肌に傷をつけるどころか、当たってすらいらない。すり抜けてしまったのだ。

「はッ!?」

『お前はこれより、己の運命に抗うために求めざるを得なくなる……ゲッターを！ ゲッター線を！ 全ては、当然の様に収束していく！』

「く、だ、黙れっ！」

念のため、返しの一太刀を浴びせるも……やはり、掠りもしない。目の前に見えてはいるというのに。幻術の類なのだろう。舌打ちを堪え切れなかった。

『お前も何れ、一つの形へと収束していく』

「……ッ」

『そして、さらなる飛躍を……』

その姿が、薄く、掻き消えていく。

お前では変えられないと嘲笑うかのように。手の届かぬ所へと。アレが寄越した使者に、触れられもしない。

自分の努力が、何の意味もなさない。

フラリ、足が揺れて、再び立っていられなくなる。ただし……もはや、今度はドカツと地面に尻を突いて立ち上がることもできない。

歯を食いしばって、無力感に必死に耐えていた。

そうでないと、叫びだしそうになる。

「おのれっ……ふざけるな……」

今まで、必死に努力してきたことが。

全てが。

あれらが望むところに繋がっていた、と言われたようだった。

大好きだった絵が。母や姉、兄との日々が。まるで、一飲みにされてしまったようで。

怒りとそして……底冷えしそうな、今にも叫び散らしたい程の、狂おしい感情が今、震える言葉となって絞り出されてくる。

「なんだと思っている……人を、俺をつ……!」

負の感情がぐちゃぐちゃに絡まり合って。
押しつぶされそうになって。弱音の様な、恨み言を。
言っていないければ……自分の全てが信じられなくなりそうだった
から。

選択

目の前には、紙と、墨がある。

好きだった。母に見出され。兄と姉に褒められた、自分の誇れる数少ない長所だった。今までも、決して、食うための物でなかったにしろ。それでも自分なりに真剣に取り組んできたつもりだった。

だが……今、最早、やる気を持って取り組むことができない。

これが『ゲッター』にとつては重要な『鍵』なのだ。滅びたアレらを蘇ら選らせるための切り札なのである。

秀隆とてあの言葉を全て信じているわけではない。

そもそも、あの巨軀……『エンペラー』が滅びる側などという言葉、到底信じられない。あれは今でもなお、自分を天空から見つめているというのに。

何か、言葉の裏に隠されているとは思うが、とはいえそれを見つめるだけの手段が自分には存在しない。

「……」

しかし。それを踏まえて尚。あの物の怪はこちらを説得しようという『必死さ』に欠けていた。こちらを信じようと信じまいと同じ事、とでも言いたげに、明らかな余裕が見て取れる。

そこには『説得力』があった。

感情を絡めて訴えるのとは、別物の。

二つだ。二つの心が今、彼の中で揺れていた。

疑い、抗う心と……そして、信じて、恐れる心に。

「……描かないからと言って、何が変わるわけでもない。あれらを形にする、など。そもそも……そうだ。形にする必要などないのだから、別のものを描き続けていけばいい」

惑うてばかりのこんな調子では、彼は筆を取ることができない。

何よりも、そんな状態で絵を描いたとて、万が一にも満足する絵を描くことなどできはしないことを、誰よりも当人が知っている。

言葉では強く張っているつもりでも。

腸の中は焼けた匙でかき乱されたが如く。平静を保って居られて

いない。

「……ええい」

悩んで答えが出ないのであれば、置いておいてしまえば良い——とはいかない。

頭を冷やし、考えてみれば一目瞭然。自分が誠に、ゲッター線なるものを復興するための旗印になった時、どうなるかは想像もつかない。

秀隆は、ゲッター線なるものを知らない。

それが人の文化程度であれば、どうとでもなるだろう。

しかし『エンペラー』に連なるもの、ゲッター線。それが一体どんな劇薬なのか、想像だにできない。文字通り、人の世を一変させうるものですらあるかもしれない。それを想像すれば、迂闊に手を出すことはできない。

絵を捨てればいい。そうすれば……

「——嫌だっ……」

——その捨てる『絵』というものは、彼にとっては、あまりにも大きい。

今の自分が存在しているその土台となったもの。母にこれを与えられていなければ、自分ももっと、惨めな人生を送っていたかもしれない。兄と、姉に認めてもらえたことがあって、初めて本当に自分は立ち直れた。そう、秀隆は思っている。

今までの人生の半分以上を、絵に費やしてきた。それを捨てるというところが、どれだけの傷になるか。

彼にとっての大切な三人との鎧にも等しいものを捨てる。自分にとって最も大きい『価値あるもの』を捨てる。

容易くできるものではない。

その恐怖に抗い、打ち勝ち。絵を捨てるのか。それとも恐怖に屈しても尚、絵を続けるのか。彼にとっては、あまりにも大きな。そして。

人生を一変させかねない、そんな選択だった。

「調子が悪いから、書けないか」

「……はい」

兄である信勝の頼みを断ったのは、これが初めてではないかと彼は思う。

今まで、兄のどんな頼みであろうと聞いてきた。大半が絵の事であった故、当然といえば当然だが。それでも、喜んで受けていたのは間違いない。

それを断るのは、秀隆にとっては、後悔してもしきれない事だ。

しかも……調子が悪いなど本心を誤魔化してまで。

結局の所、自分が絵をやめるか、続けるか。その二つに答えを出しきれず。その結果兄の頼みを初めて断る事になった。少しでも考える時間を先延ばしにするために。内心では卑劣だと自分を罵るばかりである。

兄は……しかし、そんな自分の卑劣な内心など知る由もない。どころか、しようがないとでも言いたげに笑って見せる。

「そっか。無理するなよ。最近、なんか……なんだ、お前変だったけど、そうか。調子が悪かったんだな」

「そう見えましたか」

「うん。なんか張り詰めてたっていうか。まあ調子が悪いなら納得だ」

改めて、兄には敵わないと思った。秀隆としては、出来る限り隠しているつもりではあったのだが……しかし、そんな弟の小賢しい取り繕いなど、まったく無意味であったという事であろうか。頭も下がるといふものである。

「じゃ、姉上の分は死んでも描けよ」

「えっ、そっちは描くんですか?」

「……冗談だよ、本気にするな。全く。いいから少し休め。わかったな」

「はい」

「全く……こんなんじや、姉上の所に行くにも、ちよつと心残りだな。喜六郎、僕が居ないと勝手に無茶して倒れてるんじやないか？」

その言葉に思わず苦笑してしまう。

ここ最近の事を考えれば、本当に倒れても不思議ではないと、自分でも思ったからだ。

調子が悪い、というのも、真つ赤な嘘という訳でもない。自分の進退を決めることも出来ずに、眠れぬ夜を過ごす事も多かったからだ。目をつむれば、あの日の言葉を、呪いでもかけられているかのよう
に、思い出す。

『お前はこれより、己の運命に抗うために求めざるを得なくなる……ゲッターを！ ゲッター線を！ 全ては、当然の様に収束してく！』
運命。

あの化け物の言っていた言葉に、覚えがない訳ではない。
夢に出てきた、姉と、兄の最期……と思わしき景色。焰と、血の色。
生き続けたその先にあるやもしれない、織田の姉弟が辿る非業の終わり。それをあの夢は示し、そしてその上で……誘いをかけた、のだろうか。

あれは決まった事とでも言いたげな態度で。

兄の顔を見つめる。

あの時夢の中の兄は……自ら腹を裂いて。口元を真つ赤に染めて、血の気の引いた、青白い顔をしていた。だというのに、笑顔で死んでいった。

兄はいずれ、あのような死を迎えるのか。自ら死を選ぶような、そんな事に。

それを避けられる、というのであれば……本当か分からずとも、手を取つても、いいのではないか。

どうせ自分は、絵をやめられないのだ。であれば、自分に都合のいい方を選んでしまつても誰が、誰がそれを責められるだろう、と。

「……なんだよ、ぼーっとして、大丈夫か？」

「つ……いえ、何でもありません」

——そこまで考えて、急いでその考えを振り払う。

駄目だ。それでは、あの化け物の思うつぼではないかと。

何も努力せずあの化け物のいう言葉に何の躊躇いもなく踊らされれば、何が起るかもわからないというのに。

自分は、織田家の将なのだ。

別に普段からそれを意識していたわけではない。しかし、秀隆にも最低限の自覚、というか。責任感はある。自分が愚かな行いをすれば……それは兄と姉、母に返っていきかねないのだから。

「喜六郎、お前変だぞ」

しかし、それを今、考えるのは明らかな悪手。

信勝は、その秀隆の様子を見逃すことはなかった。

「……調子が悪いですから。様子も可笑しくもなりますよ」

「それだけじゃないだろ。姉上を……刺客が襲った時からだ。こうやって時々、何か考え込んだり。ここ最近なんか、出陣した後、一人で帰ってくることで多いいじゃないか」

「そ、れは」

「僕が知らないとでも思ったのか。馬鹿にするな。姉上ほどじゃないけど、僕だって頭はそこそこ回るんだぞ」

兄はぐい、と距離を詰めてこちらに踏み込んでくる。

「……やっぱり、何かあるのか」

「そ、そのようなことは」

「そんなんで一人でやっていけるのか。僕は姉上の下に行かないといけないけど、その代わりに権六をお前につけてやってもいいんだぞ」
「何を言います、勝家殿は兄の側近中の側近、そのような方を……」

兄と姉に迷惑をかけぬように、といろいろ考えいるというのに。その事で兄に気遣わせてしまったては本末転倒。

どうやって自分は平気か、と伝えるか、悩んでいたところで……

「——信勝様！　秀隆様！」

大声をあげてドスドスと荒々しい足音と共に、二人の元へと突如として走ってきたのは、勝家だった。

素っ頓狂な叫び声に何事かと驚いてしまったが……その表情を見て即座に意識を切り替えた。恐らくは、それ程に重要な要件なのだろう

う。

勝家の顔から、血の気が引き切っているのが容易に分かったから。

「どうした権六。そんなに慌てて」

「……」大事にございます。お二方、どうか落ち着いて聞いて頂ければ」

わなわなと震える唇から、紡がれた次の言葉に。

秀隆は、陰鬱な気持ちなど吹っ飛ぶような衝撃を受けることとなった。

「お館様が……お亡くなりになりました」

——秀隆が元服を迎えたこの歳。

織田家に、大きな激震が走る事となる。

織田家を一つの戦国大名の家に育て上げた、辣腕。織田信秀。信長、信勝、秀隆の父である、織田信秀の死であった。

葬式

父との記憶はそう多い訳ではない。とはいえ、武家に生まれた三男坊など、存外そんな物だ。全ての父子の絆が厚い等、それこそ相当に珍しいだろう。

特に、父は上の二人……姉と兄に、目を掛けていたというのもあって、自分に目が行く事は、まあ少なかつたと思う。

こんな事があつた。

兄と姉が父の前に呼び出され、家を守るのに何が必要なかを聞かれた。

その時秀隆はと言えば、何時もの如く姉からの依頼の絵を描いていた。それを後で見せた所、姉は大喜びしていたので満足だつた。

要するに、秀隆は三姉弟の内、唯一省かれたのである。兄からは『後から呼ばれたとかじゃなかつたのか!』と驚かれたが、そんなことはかけらもなかつたのです。

秀隆としては、ある種納得も出来た。国を引つ張る器を持っているのは、兄と姉だ。自分ではない。寧ろ、自分と大して会つても居ないのにその辺りを見抜いている父を初めて尊敬したのである。

父との関係など、彼にとつてそんな物だ。

そんな父が——死んだ。

「……大往生、か」

衝撃ではあつたが、しかし。感情が乱れる程でも無かつた。

そんな大して仲がいいわけでも無く。付き合いが長いわけでも無い。そんな実子の中でも異質な存在だつた秀隆だつたからこそ、今こうして、少し冷えた頭で葬儀全体を見渡せているのだと思うし……気が付いた事もあつた。

葬儀に慣れている訳ではない。

そんな秀隆をして尚、この葬儀にどれだけの金がかつたのかは想像出来た。

棺や位牌を見るだけで凡そ。恐らくはこの場にある全てが、間違いなく金に糸目を付けずに仕上げられたのであろう、と。

大家家の当主が死んだのだ。それも当然——と、秀隆が素直に思えなかったのは、それが余りにも露骨過ぎたためか。

率直に、秀隆がこの葬式の間を見た時に思ったのは、『無駄』のただ一言である。

「……」

葬儀に金をかけるのが悪いとは言わないが、しかし。別に金は湯水の如く湧いてくるものではない。姉も、金の重要性は何時も口にしていたのを思い出す。そんな姉に触れていたからか、この葬式の豪華さに、違和感を覚えてしまったのだろう。

即ち……これを、誰が取り仕切っているか、だ。

喪主は、姉だ。次の当主として、それを取り仕切る立場にある。

だが、この葬式を見ている限り、姉がこれを取り仕切った様には思えないのだ。もっと上手に金をかけるのではないか……こんな下手なやり方はしないのではないか。

言い方を変えれば『無為な金のかけ方』をする訳がない。

「……殿……！」

「殿ッ……ぐっ……！」

「泣くな……泣くな馬鹿者ッ……」

秀隆が、周りの者ほど取り乱していない事が、棺ではなく、ある一点……恐らく、この葬儀を実質取り仕切っている相手に視線を向ける要因にもなっていた。

——恐らく、この葬式で涙を見せていない数少ない人物。

悲しみの中でも気丈に振舞っているのだろう事は間違いない。けれど、この葬式を、喪主である姉の代わりに仕切る事で『上手く利用』している事も間違いない。

母、土田御前。

恐らく、父の葬儀について周りに令を出しているのは彼女だ。姉の仕切りになる所を頭を飛び越えて、その権限を奪うかの如きやり方で。

本来、姉が座るべき席に、先ず兄上が座り。その隣に母が座っている辺り、ほぼ間違いないと思う。姉を貶め、兄を持ち上げる。それ

を、葬儀の場すら利用して行っているのだ。父への愛情も当然ある、その上で。

思う所は多いがしかし……先ず、先ず強かだとは思う。実に。

……否、強かにならざるを得ないのか。

こんな無理矢理なやり方をしたのは、理由がある。

父が死んだ事で、当然ながら家中は揺れた。

その中で、一体誰が次の当主になるか……家中にはその話題も出ていた。しかし、そこに、父はあらかじめ一手を打っていたのだ。

『次の当主は信長に』

父は、それを遺言として近い家臣に遺していたのだという。死者からの遺言、前当主からの指名だ。覆す事は、ほぼ不可能と言って良いだろう。

兄、信勝が当主になる可能性は、ほぼ消えた。

母は明確に焦っているのだろう。姉が式を整える前に葬儀を断行。無理矢理に姉を省いた拳句、自分達の仕切りで手柄にしようとしている……ならば。

それを兄が良しと思っているかどうかは、兎も角として。秀隆としては兄が参加しているのが、疑問だった。姉をあそこ迄慕っている兄が、この様な暴挙を許してこの場に居るのが。

ちら、と兄を見る。目が合った。

しかし……寧ろ兄は誇らしげに胸を張った。

姉を差し置いて、等と悩んでいる様子には見えない。

あの姉好きの兄が、である。となると……自然と答えは出てくる気がする。兄は別に何もしていない訳じゃない。寧ろ、この母の策略に乗じて何か企んでいるのではないだろうか。先ほどの顔も『黙って見て居ろ』位の表情だ。

「——何を企んでいるのか……」

そう思っていたその時だった。

パァン、と何かがぶつかるような音が葬儀の場に響く。

皆が振り向いた。そこには、寺の戸がある。そこが開いていた。その先々に立っていたのは……姉の姿。

白装束ではない。普段のままの姿で。

ぎろり、と睨んだのは……兄と、母の方向。それを見て、兄はうやうやしく、いつそ不敵な態度で、姉に向けて頭を下げた。

「これは姉上。申し訳ありません、この様に勝手な事を……しかし、母上が是非に、と申すものですから」

……白々しい、と思った。

そこで分かった。要するに、兄は既に姉に全てを知らせていたのだろう。そして勝手に仕切りをさせていた母を糾弾させるつもりなのだ。姉を省いて葬式を行おうとしていたのは明確だ。そこで、行動を起こした所で首根っこを押さえさせようと、此処に呼んだ。

一見して、この葬儀を開いたことで、兄を姉が出し抜いたようにも見えるだろう。だが、それは何も知らないから出てくる感想だ。

しかし、姉の事を本当はどう思っているかを知っている側からすれば、最早これは茶番と言ってもいい。信勝の彼女に対するあの慕い方、というのは家中でそこまで周知されていない。でなければそこ迄持ち上げられはしないだろう。

彼からすれば、自分が姉に睨まれているこの状況すら『姉が当主としての器を示す機会』位にしか思っていないだろう。母からすれば、味方だと思っていた信勝から背中を刺された形である。

「……信長、貴様」

「……」

このまま姉に糾弾を受ければ、母にとっては大きな失態になる。こう言う悪だくみというのは公に糾弾を受けるのが、最も効果的なのだ——だが。

「このような勝手をしてしまいました……一旦仕切り直しましょうか、姉上」

「必要ない」

「……えっ？」

姉は、兄の方から直ぐに顔を、目の前の父の位牌の方に向けて、わずかかずかと葬儀の参列者の間を通り抜け……否、左右に無理矢理押しのけて、棺の置かれている祭壇の前まで歩みを進め。

母を糾弾するでもなく、寧ろ気にする様子はなく、姉はそのまま焼香でもするかのように、位牌の前に堂々と立った。

……皆が静まり返っていた。

突如として乱入して来た姉の一挙手一投足に、全員が集中している。空気が、張り詰めていくのを感じている。喉が渴いていくのを感じた。

秀隆のいる場所からは、姉の横顔が見えている。

姉は、位牌を睨みつけていた。目を見開いて、人でも殺せるのではないかという程だ。

「……え？」

だが一瞬だけ、その顔が歪んだ。まるで今にも泣き出しそうな――

「……ふんっ!!」

直後の事だった。

一気に顔を怒りに歪めた姉が抹香を収めた器に手を突っ込むと、砂状のソレを掴み取った。

全員がその様子を目を丸くして見つめていたがしかし、それでは終わらない。

固く握りこんだそのこぶしを頭の後ろまで思い切って振りかぶって――抹香を位牌に叩きつけたのだ。全力で。

石造りの濃い灰色を染める、白い色。霧の様に散った抹香が宙を漂うのを、秀隆のみならず、葬儀場の誰もが見ている。坊主も、参列した将も、そして信勝の後ろあたりに控えていた勝家も、だ。

全員が、呆然とその景色を眺めていた。それだけの出来事だった。死者の事に対する冒瀆、どこかの騒ぎではない。葬儀にて最もあり得ない……否、そんなことをするとすら思われていなかったとんでもないことを、信長はやったのだ。

一瞬、完全に思考を持つていかれていたのも束の間、姉はそのまま踵を返して、開け放たれた入口に足を進める。

その時――秀隆は、真っ先に行動を起こした。

「あつ……姉上ッ！ お待ちくださいー！」

それは、姉に対する偏見の無さか原因だったのか。

姉をうつけと思うなら、『驚き』と『嘲り』から納得して追わず。
姉を才人と思うのであれば、『驚き』と『期待』からやはり納得して
追いはしない。

姉が『普通の人』だと思っていた秀隆だけが、『疑問』を以て追いか
けたのだ。

姉の真意を、確かめるために。

本質

「姉上っ！」

幾度目かの秀隆の呼びかけで、ようやく信長は彼の方を振り向いた。

感情が落ち着いてきたのか、険しかった表情は少し鳴りを潜め、今は怪訝な顔程度に落ち着いていた。

「——秀隆、何故追ってきた。葬儀の途中だぞ」

「喪主の姉上を一人で帰らせるなど、出来ません」

「あの葬儀は俺の仕切りではないのにか？ まあいい、ついてきたいなら好きにしろ」

そういう割には、気にしている様子もない……とは言わなかった。秀隆とて、言葉そのままの意味で姉の後をついていったわけではない。ただの口実だ。それを理解した上での言動だろう。

姉は、どうやら思ったよりも冷静であることを確認し、そのまま、姉の数歩後ろに、秀隆はついて歩きます。

「……」

「お早にお着きでしたね」

「信勝の奴めが早馬を出しおった。全く、知らせずとも構わんというに」

「そうですか……どこまで」

「全部。聞かずとも凡そは分かる、あの程度ならな……分らんかったのは、一つだけだ」

数歩先の姉は、道端の石を蹴っ飛ばして歩いている。まるで、拗ねてしまった子供の様に。その内、思い切り、石を蹴っ飛ばしてから……彼女は空に視線を向けて、ぽつりと呟いた。

「親父殿が、なんで俺を当主に選んじまったか」

「……」

「つたく、信勝にしておけというに。聞いたときは正気を疑ったぞ」

少し驚いてしまう。

ため息一つを吐いて。自分は当主を望んでいない。信長は今、そう

口にしているのだ。

兄も、自分も、姉が当主の器であることは疑ってもいない。しかし、当人はそんな事を知らん、とでも良いだけに、口にしたのだ。

——後ろからは、彼女の顔は見えない。

頭の後ろで腕を組んで歩く姿は、いつもの姉そのものだと、秀隆は思う。だが……その姿から零される声は、ほんの少しだけいつもよりも小さくて。裏で、彼女が今、葬式で見せた、あの顔をしていると、何となく感じた。

「……それが、抹香を叩きつけた、理由ですか」

「……」

「私からは、見えませんでした。泣きそうになっていた姉上が」

「……そうか。見えていたか。隠してるつもりもなかったが、はつきりと言われると恥ずかしいもんだな」

はっはっはっ、と。乾いたような笑い声が聞こえる。

力と張りに欠けた、抜け殻の様な笑い方だ。

こんなに元気がない姉を、秀隆は見た事がない。では元気づけようかといえ、そうでもない。そもそも、姉を元気づけようと適当な言葉を繕うのは、むしろ逆効果ではないだろうか。

故に……その前に一步、秀隆は踏み出すことにした。

「私は、姉上が当主になりたがらない訳は、分かりません」

「……」

「想像し、面倒くさい、柄じゃない、等々。姉上の言いそうな事を、並べる事くらいは出来ますが……そのどれも、今の姉上に当てはまるようには、思えません」

姉上らしくない、とは言わない。姉の事を全て理解している等と、親か、神の如き事が出来るのであれば、そうも言えるやもしれないが。

故に……秀隆は今、見えている信長の様子には当てはまらない、と言った。明らかに取り乱し、そして父の位牌に向けて激昂していた時の……何らかの逆鱗に触れたかのような、姉の様子には、到底足り得ない、と。

「……何故ですか」

「何故？ はつ、分からん訳もあるまい秀隆。俺の耳の事を、それこそ信勝の奴めより気にしておったのは、お前だろう」

「それが何だと……」

「俺の耳は聞こえん。それに、俺が当主となるのを望んでない者は多い。当然、信勝の奴めを据えた方が、全て丸く収まるではないか」

「……その信長の思いを否定する言葉は、秀隆からは全く出てこない。」

信長がうつけ、と称されるのは、ここ最近の話ではない。

もはや何年経つだろうか。その間、家中に少しづつ、少しづつ積み重なってきた姉への反感や不信……悪感情は、重なり、つもりにもって、最早山の如しであろう。

しかしそれでも。

「……兄上は、そういった声は、必ずや抑えると言っていました」

「ふん、信勝めはそう申すだろうな」

兄は、誰よりも姉を当主に据えたがっていたし。

「お前は？ どうだ？」

「私は……姉上が、誰かの下で大人しくしてられるような、お方だとは……思えません」

「はつ、ずいぶんな事を言うな。お前も」

それは、きつと姉の気質を、少しでも理解していたからだろう。

姉は当然の様に兄をこき使っていたし。誰かにへりくだる、という事から最も遠い性格をしている。そんな事ができるのであれば、そもそも我が道を行く、今の姉は存在してすらいないだろう。

信長という存在は、誰かの下についていられない、というのが信勝と秀隆の共通の考えだ。さらに言えば、兄の下で姉が働く姿など、まったくもって想像すらできない。逆ならいくらでも想像できる。

という事で、秀隆としては、姉を誰かの下につけるのは、無理というか。適材適所の真逆を行く行為だと思っている。

「姉上が本当にうつけなのであれば、兄上が上についても構わなかったでしょうが」

「……誰の意見も聞こえぬうつけに間違いはあるまい」

「だとしても。兄上が上についたところで、ずっと姉上の意見を聞く様にするのは変わりないでしょう」

今だとして、あれだけ姉を慕っている兄が、もし姉の上についた程度で、今までの構造を変えるだろうか。いや、絶対に変えない。

「言い方を選ばなければ……うつけの言葉をうのみにして為政を行う暗愚な男と、兄上は姉上以上に侮られるやもしれません」

「……嫌な想像させるな」

「事実です。そうならないと、断言はできませんか、姉上」

「ありえん……と言い切れんのが、なんとも因果よなあ」

苦笑いを浮かべる信長。もし、兄がもう少し真つ当に当主を望んでいたのであれば。又は姉が誠にただのうつけであれば。話もまた違つたやもしれない。

だが信秀は、信長を選んだのだ。この乱世、織田の家を任せられる存在として。明確に。

話は、そこに尽きる。

もはや誰もそこを覆す事は出来ないのだ。

「……お気持ちは分かります。ですが姉上、我々が我々である以上、貴女以外は、当主足り得ない、というのが……私の、正直な感想です」

「そうは言うがなあ。母上が許さんだろう」

「母上も、そろそろ止まらざるを得ないでしょう。父上が明確にお言葉を残されたのですから。ここが、限界です」

だが。

「——くく」

「なんですか」

「いや。少し、な。ああ……哀れ、哀れよな秀隆……お主は、『愛』という物の本質を知らずに育つたのであろうな」

唐突にこちらへと振り向いた信長は、笑っていた。

仕方のない子供を見るかのように。少し困ったように。

哀れ、等と。姉にそのような事を言われるのは初めてで。些かと、戸惑ってしまう。

「哀れ……私の、どこが」

「母上は、決して止まらんよ。俺には分かる」

信長の眼は、目の前の自分を見ているのか。

否、秀隆には、そう思えない。

自分の後ろ……葬儀場の方であろうか。否、もつともつと向こう。今、彼女の真紅の瞳が一体何を見ているのか。秀隆には、分からない。「行きつくところまで突っ走るだろうよ。全く、因果な家系に生まれ たものよ」

「姉上。何を……何が、姉上には見えているのですか」

「お主は母上についてやれ。流石に、お主に母上を裏切らせるのは、忍びないからの」

姉は、そう言って再び踵を返す。

「あ、姉上」

「見送りはここまでで良い。後は自分で帰る……のう秀隆」

「……はい」

「俺が、今も、あの時も、どうして母上を糾弾しなかったのか。その意味を、お主はきつと分からねのだろう」

その言葉に、息が詰まる。

あの日、母が姉を狙ったのを、信長は凡そ感じていた。にも関わらず。彼女は何もせず、あの一件をやむやにしてここまで来た。

兄は、それを気にしていない訳もない。正直な話。兄が、この葬儀に乗ったのも。その一件があつてこそ、だから姉を呼んで母を押さえつけようとしたのだと思う。

だがその時は、兄は感情を抑えたのだ。

狙われた信長本人が口に出して止めたのが大きい。そこから、姉弟の誰も、母に問いただす事もなかった。

「確証が無かった、というのには、当然あるがそれ以外にもある。そこを、よく考えてみるといい」

「——それは」

「強く愛されているならば……又は、憎まれるからこそ、知れる事がある。それを覚えておくとよい、秀隆」

——彼女は、何かを知っているからこそ。

命を狙われて尚。

こうして頭を飛び越える真似をして尚。

姉は、なぜ何も言わないのか。

去っていく姉を見ながら、秀隆はそれに思い至ることができなかつた。

母親

木刀を振る。

只管に振る。

一心に振る。

ほかの事を考えないように、やってきたことを只管になぞる。素振りという行為のお手本のようなではあるが……だが、結局素振り一つとて、何も考えずに行っていてはただの繰り返し、身にはならない。

一つ、ため息を吐いて、木刀を振る手を止めてしまう。

「……」

信長の、あの表情が頭から離れなかった。

優しい気なあの笑顔が。

『哀れよな秀隆……お主は、『愛』という物の本質を知らずに育ったのであるうな』

秀隆には、姉に『哀れ』と言われる理由が分からない。

姉の言葉の意味が分からない。

秀隆は母の『愛』によって救われ。兄の『愛』によって自分の長所を見つけた。姉に長所を『愛』してもらっていたからこそ、絵の腕はどんどん上がったと言えるだろう。

彼は多くの愛を受けて育った。恵まれていると言える。

だから、『愛』という物については、それなりに多くの事を知っているとと思った。

今も、愛という物を知っている、というその思いに揺らぎはなかった。

「……」

だが考えなくてはならない。この言葉は……秀隆を嘲笑って言った言葉ではないのだ。

姉は、『父の遺言もあるのだし、母も諦めが付く』と秀隆が言った、その直後にこの言葉を残したのである。そのような事はある得ない、という一言を付けて。

不可解ではある。前当主が残した次期当主の指名。そこで諦める

事なく、まだ自分の野望の為に動くという事があるのか……

これが、他人の言葉ならわかる。しかし、仮にも夫の、それも、実に正当な言葉を無視してまで兄を押し上げようとする理由が、いったいどこにあるのか。

「……あるいは……あるのか？」

鍛錬も集中して出来ないのであれば……向かうところは決まっている。

母の下へ向かい、確かめればいい。直接聞くのは憚られるが。もし、万が一母が本当に諦めていなかったら、その時は、自分が改めて説かねばならないと思った。

きつとしっかり話をすれば、止まれる段階にはきている。

秀隆は、そう思っていた。

部屋の前で膝を折り、三つ指ついて頭を下げる。

急な訪問だ。礼を失する事は出来ない。

「――母上。秀隆です」

母の部屋……寝室とは別の、私室。

何時も母と謁見する時はここだったが……しかし、今までとは心持という物が違う。ここに入った後、母との関係が大きく変わるやもしれない。

母と子、という関係から……敵同士に、なり得るやもしれない。

それでも。姉と兄と、母とが、万が一にも相争う事だけは、避けなければならぬだろう。であれば機会は、今しかない。

「失礼させていただけでも、よろしいでしょうか」

『……入りなさい』

許可をもらい、襖を横に開ける。部屋の中、行燈の明かりに照らされて、土田御前はこちらを見ている。母に向け、秀隆はもう一度頭を下げてから、ゆつくりとその前に進み出し、座してその瞳を見つめた。荒れているか、とも思ったが、予想以上にその瞳は澄んでいて、落

ち着いていた。

姉の行為で葬儀はもはやめちやくちやになつてしまった。あの後も誰も集中することなど出来やせず、糸が切れたかのように真剣さ、という物が失せてしまつていた気がする。その事で、ある程度の荒れている事も想像していたのだが。

……とはいえ、それも表面上の事かもしれない。

「葬儀、お疲れ様でございました」

「貴方も……というのは、些か酷ですか。関心をいささかも向けてこなかった父親の為に泣け、等と」

「……いいえ、そのような事は」

「気を使わなくても良いのですよ。殿は、良き将ではありましたが、私も愛してはいました。それでも、良き父であつた、とは思つていません」

先ずは、探り。

腹の底では、激情を煮えたぎらせているかもしれない、と思つて……だが、しかし受け答えに不穏な色はない。実に穏やかなものだ。

これならば、と。秀隆は、さらに一步を踏み出すことにした。

「……父上は、姉上を当主と名指しされましたな」

「ええ。殿はその様にと、言い残されましたね」

「私は、姉上の下でしかと働くつもりです。兄上はよく姉上に尽くすでしょうし、出世も早いでしょう。その時、兄上が少しでも早く城一つでも任せられるように、となれば。母上も喜ばしいかと思ひますし。その為にも」

……遠回りな言い方ではある。

要するに『それで問題はないな』と。『もはや兄が当主になることはない』と、分かっているな』という確認である。

これに領けば、母は漸く、諦めたことになるであろうし。

これに否というのであれば……いよいよ、秀隆も覚悟を決めざるを得ない。

母の言葉を、秀隆は待っている。
だが。

「——何を言っているのです。織田の当主になるのは信勝。それは変わりありません」

「……母上、そのような事を申しても。お館様が決めた事です。姉上を当主に任ずると。最後の遺言を、無碍にされるおつもりですか。そのような無体に、誰が付いてくると」

「殿は既にお年を召されて、少し鈍ってしまわれたのでしょうか。あのような遺言を残すなど、正気ではない」

その言葉に、秀隆は目を見開いた。

否、と言っているのかと思つた。だが。違う。

信長が当主につくというのに反対である、と口にするのではない。そうであれば、まだいいだろう。

しかし母が言っているのは、そうではない。

そもそも姉を指名した遺言……それを残した、父に正当性がないと、言っている。

そんな馬鹿な話はない。最も近い家臣に残すという判断ができている時点で、真つ当な判断をする力は残っていたはずだ。だということに。

母にとって、姉は未だ『一応認められた正当な当主』ではなく『兄が当主になるのに邪魔な存在』でしかないのだ。その二つの認識の間には……実に巨大な隔りがある。

「正常な判断を下すなら信勝を当主にと決めていたはずです。そうではないのであれば殿が正気でなかったという事。うつけの奇行からの心労も祟つたのでしょうか。殿もなんとお可哀そうに」

「母上、何を、もうしているのですか」

「正義は私にあります。歪んでしまった殿の言葉ではなく、かつてこの織田家を強くした頃の殿、私が愛した『織田信秀』の真意を汲まねば、武家の女とは言えないでしょう」

喉が渇く。

今、目の前にいるのは、本当に自分の母なのか、一瞬、疑いたくなつた。

「そういうところが出来ぬのが、秀隆。まだ未熟な所ですね。精進な

やい」

「は……」

誰かの意見に自分の意見を否、としてぶつけるのではなく。

もはや確かめられぬ真意を『自分の都合の良い方に解釈して』いる。それは最早、狂気だ

姉のやらかした事等、可愛い子供の悪戯かの様に見える。

これは最早、死者への冒瀆を超えている。安らかに眠る死者を自分の好きなように、操り人形の如く、使おうとしているのではないか。

それとも……本当に、そうとしか考えられないのか。

「とはいえ、偽りの当主が織田の頂点に立っているのは、到底許されることではありませんね。正しい織田家の形に戻さねばなりません……であれば、母が一つ骨を折るしかありませんか」

「——母上、何を、なさる積りですか」

「信長を、偽りの当主を掲げる佞臣諸共に排除する。当然の帰結でしょう。その為には信勝の味方を増やさねばなりません。まあ最悪、貴方が居てくれれば大丈夫でしょうか」

母が立ち上がり、こちらに歩み寄ってくる。

ちらり、と壁にかけられた短刀が目に入った。

——今なら、切れる。

今、秀隆の頭の中には、一つの選択肢があつた。

もはやここで手を選ばずに止めなければ……母は、恐ろしい事を始める。

兄も、姉も、下手をすれば死にかねない。そんな恐ろしいことを。

今の母は、かつて自分を地獄の底から救い出してくれた母ではない。彼女は狂ってしまった。望み諸共、その狂った人生を終らせる。やるのであれば……今だ。

歯を食いしほる。自分がやらねば。そう思つて、ゆつくりと母の顔を見上げた。もはや今生の別れ。その顔を胸に刻み込んで、罪を全て背負う。その覚悟を決めようとした。

けど、出来ない。

「あ……」

秀隆は、見た。

母の顔を。

狂った者の目か？ 否、そうではない。

あの時の、自分を救ってくれた母、そのままの顔だった。多少、年をとつても、燃え盛るような意思を込めた赤い瞳も、凜とした表情も、何も変わらない。

狂気に狂った顔には、到底見えなかった。

「秀隆。これからは、少し忙しくなるかもしれませんが」

掌が伸びてくる。体が動かない。小刻みに、自分の手が震えているのに気が付いた。

「迷惑をかけますが……共に信勝を、勘十郎を助ける為に、頑張りましょうね」

頬に触れる手の温度も。全ては、あの時のままだ。

正気を失っているわけじゃない。

母は、兄を愛している。姉を憎んでいる。

きつとそれだけなのだ。愛しているから、憎んでいるから、彼女は何でも出来るのだ。兄の為に。姉を排除する為に。それ以外に理由はいらない。全ては、愛する者の為に。彼女の中には、しっかりと理由があり、そして、そこへ向けて冷静な判断を下しているのだ。ただ一つ、信勝を当主にするという目標の為に。

狂っているのは、正気を失い、正常な判断が下せない事を言う。であれば、正気のままに、狂気にも等しい行動をとる時、それはなんと**言**えばいいのだろうか。

彼は、もう動けない。

あの頃の**大**のままの母を切ること等、彼には出来なかった。

激動 研心

——心は静かに。

織田家の菩提寺のその中心にて、只管に筆と共に、一枚の絵に向かつている。その周りに散らばる絵の数は、疾うに十枚を超えていた。

描かれているのは……菩薩、如来、天、どれも仏、仏、仏。様々な仏が描かれたその絵を人は、仏画と呼ぶ。その絵は、墨の色のみで書かれているにしては、異様な迫力を持っていた。まるで、人でも食い殺すような……穏やかなはずの仏とは、ほど遠い。

何よりも、目だ。

仏というのは衆生を慈悲を持って見守っている。

故に、目も優しく、見ているだけで心洗われる様な、優しい瞳をしているのが普通だ。

だが……これらの絵は、違う。

一枚は見守る、というより、睨みつけるといった方が正しいような瞳をしていて。またある一枚の瞳は、心の奥まで見抜くような鋭さを持つていた。

そんな、異質な仏画を、ひよいと拾い上げる手が、視界の端に入っていた。

「ほうほう——随分と腕を上げたな。秀隆。良い迫力だしてる」

「ありがとうございます」

「……にしても、お前、これおっかなすぎやしないか？ 仏画ってなんだったけ」

「私としては、普通に描いているだけなのですけれども。どうしてもこうなってしまうのですが、悩みの種です」

「それでこれとは。となれば、描いている本人の心の内が出ているのやもしれん」

絵を拾い上げた人間——信長のその言葉に、男はぴたり、と動きを

止めて。

「出来るだけ、心を落ち着けて描いているつもりなのですが」

「絵というのはそういう物よ……それで？ どうだ、最近は」

くるり、と後ろに向けて振り返った。

姉は大層愉快そうな顔をしている。どうやら、この絵が気に入った様だった。彼としてはただ、これは修行にも近い感覚で書いているだけなのだが。

「こうして仏画を描きながらこの世の衆生について思いを馳せれば、民草の為に戦う為に気合も一段と乗ろうという物です」

「あー、いらんいらん、そういうのは。俺が聞いているのはそういう事じゃない」

「何を申します。それはまづこう事なき本音でございますよ。刃に乗せる理由は、多ければ多いほど、躊躇いを無くしてくれる」

そう言って返せば、すう、と信長の目が細められる。先ほどまでけらけらと笑っていたのが急転直下、だが彼にとってはそこまで珍しい事でもない。姉、信長の機嫌の上がり下がりは昔からそれなりに激しかった。彼女がいきなり調子を変えたのも、秀隆にとってはそこまで驚くべき事ではない。

とはいえ、彼女がそこまで急に機嫌を変えたのは、下手な言葉を返したからでは当然ない。彼女が、ここに来ている理由にも、それは繋がる。

「――母を切れるほどには溜まりそうか？ 仏の含蓄は」

「その為に、こうして仏の前で、研鑽を積んでいるのですから」

――秀隆は今、織田家の菩提寺に居た。

母の企みは、酷く狡猾に進んでいた。

兄を今一度、当主に据える為に。彼女は、多くの家臣に声をかけていった。それも、今の織田家に心底忠義を尽くしている、信秀に重用されていた側の者ではなく、むしろ信秀に冷遇されていた者に対し

て。

至極当然と言えば当然。織田家への不満を持つ者であれば、信勝を
当主にした後の褒章で釣る事もさして難しくない。

織田家の前当主の妻、土田御前という強い織田家の血族の立場と、
現状への不満は、既に多くの反乱を引き起こす種を、引き込んでいた。

……秀隆という男を、その内に加えて。

「お前は、私の傍に居なさい」

彼女が秀隆に下した命は、その一言のみ。

いわば、抑止の為。万が一の護衛役として、秀隆は母が話を持ち掛
ける時に、常に傍につく事を求められている。

密会で、しかも反乱の話など持ち掛けるのだ、下手をすれば、こち
らが危険分子をみなされ切りかかられたり、さらに言えばその首を手
柄にして信長に取り入ろうとしたりする者も、現れるかもしれない。

それを抑えるために……ある程度は武術の腕が立ちかつ血縁、とい
う安心できる人材を背後に置いているのである。

……とはいえ、それだけではないだろうが。

秀隆は、信勝、信長と兄妹として仲良くやっている。信勝はともか
くとして、土田御前からしてみれば問題は信長の方だろう。

要するに信長に付かぬように唾を付け、そして常に傍に置くことで
……秀隆の動きを監視もしている、というのもあると秀隆は思ってい
る。

その証拠に……こうして、鍛錬という名目で外出する時でさえ、必
ずや誰か一人は監視が付いている。ちら、と外に見える大柄な男が、
今回のそれだ。

もしこうして姉と会っているのが、母に伝われば、信長に事が割れ
た、と判断されて母は即座に挙兵するだろう。

とはいえ、こうして姉と会うのに何も対策をしていない訳ではない
が。

「しかし、権六も大変だな。こんなところまで見張り番とは」

「彼の方がいらっしやらねば、こうして会う事も叶いませんよ」

先ず、秀隆が信勝の陣営として動くにあたり、接触を図った男がい

る。

信勝の側近であり、恐らくこちら側へ土田御前が取り込むであろう筆頭候補……柴田勝家。彼は、信勝の側近をこなしているだけあつて、猛将なれど理性的な判断の下せる信頼のおける男だ。

母、土田御前が動く前に彼は勝家に接触を図り……いわば、自らの共犯者として母の側へと引き込んだ。

当然、反乱を起こすためのものではなく。母を止める為の共犯者として。

『——秀隆様のお心、しかと受け止めました。この勝家、微力なれど、出来る限りを尽くさせて頂きます』

秀隆の言葉に、勝家は容易く頷いてくれた。

信じてもらえない、という事もあり得たのだが……しかし勝家自身、信勝の傍から見えていた土田御前の様子には違和感を持っていたよう。確信を得た、との事だった。

ちらと、開け放たれた扉の方を見つめる。

その向こうで、こちらではなく外を見張っている勝家の姿が見える。恐らく、万が一ここを覗き込もうとする者がいないか、確認しているのだろう。

彼がこうして目こぼしをしてくれているからこそ、姉とこうして会う事が出来るのだから感謝しかない。

「つってもな……こうして鍛錬という言い訳を作って、その上で権六を連れてこないとならんとは。窮屈だのう」

「言い訳ではありませんよ。鍛錬は、鍛錬です。それよりも……」

「——母上の事だろう。安心せい。万が一、お主がしくじっても俺が必ず潰す。ま、その間に出る犠牲については……保証できんが。ま、それが気になるなら、分かっておるな？」

「ええ。そう言っていたら、最早憂いもなく。必ずや、母上は、我が手で」

そうでなくては、もし万が一秀隆がしくじった場合、姉に後を託すことも、出来なかつたであろうから。

あの時、秀隆は母を切れなかった。
彼がこうして寺にいるのも。
姉とこうして会っているのも。

全ては、あの日の後悔から始まった。

多くの人が死ぬその前に。今度こそ……確実に、土田御前の首を、
秀隆自身の手で刈り取るために秀隆は、こうして刃を磨き続けている。
る。

今度は、決して躊躇わぬように。

多くの犠牲が出る前に、最小限の犠牲で済ませられるように。

自分には、今の母を切る事等、出来ない。一度思い出してしまった、
あの時の記憶と大恩は、最早この頭から消え去りはしない。彼女に
は、人生を貰った。絵という道しるべを貰った。

それを思い出してしまつては、もう刃を向ける事が出来ない。人と
しての良識よりも、親子の情の方が勝つてしまった。結局の所、秀隆
が母を愛しているのは変えられない。

ならばこのまま放っておくのか。逃げるのか。

それだけは、駄目だと。秀隆の人としての最期の一線が、止めさせ
た。

ここでもし母の凶行を見逃せば、兄も姉も相争う。何方か、下手を
すれば、何方も死ぬまで終わらない様な血みどろの争いが始まつてし
まう。

では誰かに知らせて解決を任せるのか。姉に、若しくは……兄に。
止められなかったのは、自分ではないか。

「——御仏の教えを知るたびに、『止めねばならぬ理由』は増えました
が……未だ、この重い腕を振り切るほどではありません」

「間に合いそうか？」

「間に合わせて見せます」

自分が、責任を取るしかない。

今度こそ、母を切るために……秀隆は、母の傍にて準備を始めた。

と言つてもやることは単純明快だ。母を切る覚悟を、明確に決める事。

彼自身、母の企みを止める為に出来る事等、多くない。母の計略を止める為に策を練るなど得手ではないし、下手にやればバレるだろう。

であれば……単純であつた方がいい。

万が一の場合の事を、姉に頼む。

自分がしくじつた場合の事を。

それだけやつてしまえば、後は、隙を見つけて首を取る事だけに集中し、機会を伺つて首を狩る。それだけだ。

「つーか、心を鍛える為に寺とか。素直すぎんか貴様」

「別に奇をてらう必要ありません。座禅や、読経、写経などは、武士も鍛錬の為にやる事ですから」

「鍛錬というても、己の母を切るための鍛錬だがな。仏も憤慨しているのではないか？」

「地獄で裁きを受ける覚悟はできております」

その機会の為に。彼は仏の前で、人を切る為の心構えを、一枚一枚、薄い紙を貼り重ねる様に……積み重ねているのである。

再来

「――勝家殿、お世話になりました」

「頭をお上げください、秀隆様。拙者も、無為な血が流れる事は避けたいのですから。お力添えが出来て何よりです」

「本来仕えるべき兄上の事を無視させてしまっている事、申し訳ないのですが。今しばらく、母上の企みを砕くまでは……どうか」

勝家は、その言葉に黙って頷いて、自分の部屋の前から去っていく。後は、勝家が土田御前に特に何もなかった、と伝えてくれれば、無事に事は終わる。後は……自分が情け容赦を捨て、母を切れるかどうか。

未だ、秀隆には確証は無い。彼に出来るのは、寺の中で只管に心を鍛え、そしてもう一つ……母を切る為の、理由を探す事だけ。

秀隆は、強い人間ではない。

もし、この凶行を止めるならば、恩ある母を、それでも切るだけの強い理由が居る。例えばそれは、倫理であり、人としての良識であり……そういった物を、母を止めるだけの強い理由にする。

「……」

彼は、菩提寺にて出来る限りの事を学んだ。この寺の僧は特別仏教の知識に詳しいという訳でもなかったが、多くの事を学べたのは、事実だ。仏教の思想などは、彼に母の凶行を止めさせるための、理由付けの一部になった。

だが、多いに越したことはない。

仏教の思想を学び、そこからさらに思索を深める……そこから、多くの理由を探り出すのに、仏画はうってつけのやり方だ。仏の姿をなぞり、彼らの教えを思えば、多くの事が頭に浮かぶ。

民草の事、誰かを愛するという事、親子の事。その全てを『切らねばならぬ理由』として積み重ねる。

そうして一つ、一つ、理由を積み重ねて、半ば誤魔化すようにせねば……秀隆は到底母を切る事等、出来やしない。

「……もう何枚か、描いてから寝るか」

『——全く見事な腕だ』

「っ!？」

……とはいえ、理由は、それだけではないが。

耳に聞こえた声に、思わず周りを見渡す。

しかし、刀は掴まない……もう、刀がアレに通じないことは、よく知った。

「私に、落ち着いて絵も描かせてくれないのか。貴様は」

『フフフ……ワシはお前の力になりたいだけだ。さまよえる若人を導くのも、先人の役割という物だろう』

暗闇の中、最後に見詰めた方向、その先に浮かび上がる大柄な影。

鱗に塗れたその姿には、秀隆には嫌と言うほど見覚えがある。

ゲッター線、という存在を自分に語りかけた、あの蜥蜴男。こうして、一人の時だけ、コレは秀隆の前に姿を現す。仏画を描いている時、座禅を組んでいる時、写経をしている時、何れの時であろうと構わずに。

それが再び姿を現したのが何時だったか。秀隆には定かではない。アレが自分の周りに現れている、と認識したのは、ごく最近の事だがしかし。それ以前にも現れていた様な気がしないでもない。とはいえ、何時から現れていたのか、等とは正直気にもしない。何時現れていたにせよ……秀隆は、この怪物を歓迎はしなかっただろうから。

「先人だど？ ほざくな。怪物風情が。貴様の様な先祖を持った覚えはない」

『我らも、お前たちと同じ。ゲッター線という大いなる存在の元に集う同胞。そういった意味での、同胞よ』

「下らない事を……そんな曖昧な理論で丸め込まれる程、私は間抜けではない」

何時だつてその余裕を持った笑顔は、何時だつて此方を不愉快にさせる事しかしない。

……座禅や写仏の最中に出て来たなら、邪魔があっても集中できるようになるための訓練、と考える事にはしている。成果を出すには、あまりにも手ごわい相手ではあるが。

「……貴様らに頼らず、俺一人でも乗り越えて見せる。答えはそれだけだ」

時々、一人で見ている幻であれば、どれだけ救われるか、と何度も思ったが……この世なそんなに優しくないことを思えばこれも、どうせ現実だろうとは思う。

だが、大事の前の小事。これは、あくまで自分一人の問題だ。結局の所、感化されるか否かは自分次第なのだから、如何に自分が心を強く保てるか……寺での修業は、この現れた存在の前で、平静を保つのに十分に役立つていた。

『相変わらず、血気盛んだな。此度の操縦者は』

「やかましい……兎も角、お前らの手は借りん。失せろ……!」

この蜥蜴男も永遠に存在できる、という訳ではないようだ。ある程度無視するか、さもなくばきつぱりと『否』という意思を示せば割とあっさり消えていくのも知っている。その態度に余裕が現れているのも、いつも通りの事だ。

あの蜥蜴男にとって、秀隆が拒否の意を示す事など、さして大きな問題でもないのだという事を嫌と言うほど思い知る。

当然ではある。

あの天の存在は、自分を見ているだけで邪魔も助けもしたことはない。つまり、その程度なのだ。アレにとって秀隆というのは。

その使者にしても、さして自分が何を言おうと気にしないというのは納得だ。

『……』

「なんだ。いつも通り消え失せろ。もう問答することはない」

『一つ、訂正しておこう。運命の時は、想像するよりも遥かに近いぞ』
「何?」

——だが、しかし。

蜥蜴男の口が、チパア、と開き、いつもの薄笑いとは違う明確な笑顔顔を浮かべている。奇妙な事に、此度、この物の怪はまだ消えようとしない。

「どういう意味だ」

『織田信長。第六天の魔王……そして織田信勝、かの魔王を目覚めさせし存在。その物語の今は、始まりにすぎん。古き世界を否定し、新しき世界を紡ぐ革新者の物語は、今のお前に止めきれぬものではな
い』

「……貴様、姉上と兄上について、何を知っている！」

『愚問だな！ 貴様も見たであろう、ゲッターの終わりの景色、そして……お前の姉兄達の終わりの景色を！』

——その言葉に、背筋が冷える

あの夢の出来事は、やはりアレが見せたものだったのか。今、明確に向こうが言葉にして肯定してきたという事は。あれは、意味があるものなのか。

思わず、蜥蜴男の方に、体ごと向き直った

こうして向き合うと、未だに体が竦む。

あれからの使者という物を、秀隆は悔る事が出来ない。当然だ。化け物じみた存在から遣わされた存在も、当然の様に化け物染みていておかしくはない。

その言葉には、嫌な迫力があるのだ。

『あれは遙か未来と、近い未来……始まりと、終わりの未来！ お前が何れ抗わねばならぬ未来の景色！ お前がお前である限り、避けられぬのだ！』

「世迷言を……！」

『ふふふ、仏の教えに縋り続けるのも良いだろう。だが、時間はないぞ……貴様の母が生み出したこのうねりを、果たしてお前一人で止められるのか。楽しみに見させてもらう』

それだけ言い残し、遂に大柄な姿は空間に溶けていく様に消え失せていく。それを止める手段はない事は分かっている。だがそれでも、今回ばかりは、秀隆もまだ行くな、とでも言いたげに手を虚空に伸ばすも……やはり、止まりはしなかった。

手を思い切り握りこむ。

あの夢を見せ、姉の事をただ一言、『魔王』と呼んだ。彼らは、何か秀隆には知り得ないことを知っているのかもしれない。

母が生み出したうねりが関係している様なその口ぶりは、どういう意味なのか。

「——いいや、心乱されるな」

今気にするべきではない、と頭を振る。

それらも全て、母の企みを止められれば、済む事だ。

むしろ、奴らが言っている通り、母の起こした事が何かに繋がっているのなら、ここで母を止めれば問題なく終わる。

結局の所、自分が事を成せるか、そこにかかっていることに変わりはない。

「……」

だが、という思いを抑えきれない。

本当に、アレが言う通りどうしようもないうねりが、来ているとして。自分一人がどれだけ抵抗した所で止められるものなのか、と。

——はっ、として、頭を振った。

こうして迷っている内は、母を切り、計画を止めるなど夢のまた夢。心乱されず、心静かに事を成せないといけない。秀隆は、筆と硯の前に腰を下ろし、目の前の紙に向き合った。乱れた心を静めねばならない。

墨を擦りながら。

此度、描く仏の姿を頭に思い浮かべる。

今日は、一体何枚、思い浮かべる事になるだろうか。この乱れた心を落ち着けられるまで何枚……描くことになるだろうか、と。

秀隆は、弱弱しく、歯を食いしばった。

？

謀略

「では、何れ決起の折りに」

「ええ。期待していますよ……それでは」

——未だ、手元にある刀を抜く事は出来ない。

もし引き抜いても、万が一にも揺らぐやもしれなければ、未だ時ではない事を意識し心を静める。暗がりには揺れる行燈の明かりが、自分の不安な心を現しているようだった。

隣にいる母と楽し気に喋る男は、織田家の未来を憂うならば、信長ではなく信勝様に当主を譲るべきだ……などと、調子の良い事を言っているが。しかし、結局の所は家の事ではなく、自分の栄華を夢見ているのだろう。

もし本当に家の事を考えているのであれば。先ず、反旗という手段は取るべきではないだろうに。二つに国が割れて相争えばその分、国力は失せて細くなるばかりだ。

だが……それを母が意識しているとは思えない。

否、彼女にとつては信勝を当主に据える事こそが最優先で。それ以外は取り敢えず脇に置いて考えないようにしている。目的に向けて、槍の如く思考を尖らせれば、一点に全てを賭ける分迷わず、あらゆる障害を貫いて突き進める。

それは……今の秀隆にとつて、最も必要なものだ。

素直に見習う事が出来れば、より良かったのだが。

「……どうしたのです？　こちらを見て」

「あ、いえ。母上の手腕、見習わねば、と思っております」

「この程度。在りし日の殿は、もっと辣腕を振るっておいりました。その傍に在ったのですから猿真似程度はこなさねば……とはいえ」

「はい」

「そう言ってもらえるのは、母として喜ばしいですね」

そう言って笑う母に、秀隆も……僅かに笑いを返す。

こうして言うのが。反乱について話す場でなければ、どれだけ良かっただろう。当たり前前に母から多くの事を学べれば、それはどれだ

け幸せなのだろう。

子供は、親の背を見て育つ。

そんな当たり前の事をするのが、今はとても苦しい。

「……そう、ですか」

「ええ。貴方に教えてきたことは、そう多くありませんから……これからは秀隆、お前とも親子としての時間を増やせれば、幸いです」

「はい。私も……母上と過ごせる時間が増えるのならば、ありがたく」
母から学んだ事すらも。ただ、母を切る為だけに使う。それは一体、どれだけ業の深い事なのだろう。母と触れ合う事に、こうして喜びを覚えているのも事実だというのに。

……秀隆は、母を憎んでいるわけではない。未だ家族として愛しているのに間違いはない。だが、それでも見逃せぬことがある。

愛する者を、それでも切らねばならぬ。

この世はなんと地獄に寄ったものか、と秀隆は思うばかりだった。

仏はその昔、自分の家族すらも自らの悟りに至る為の『障害』とみなし、自ら家を出たのだという。

しかし、仏には家族への愛がなかったのか……と言えば、全くもつてそうではない。寧ろ愛深かったからこそ、その愛情は悟りに至る為の大きな障害となり得ると彼は判断したのである。

愛深いからこそ、人は矛盾に苦しみ、しかしてそれでも答えを出さしかない。

仏の教えを全て理解できるわけがない。それでも僅かに分かる事をかき集め、その事実のみを頼りにしている。

「……」

少なくとも秀隆にとって救いなのは、このような悩みなど、さして特別なものではないと知る事が出来た事だろうか。

愛する事と、目標との乖離。

そんなものは、特別なものではない。寧ろ、自分を含む衆生も良く

抱くものであると寺の坊主は説いていた。

民草とてこの程度の事を乗り越えて生きているというのに、武士の子である自分が出来ない道理はない。

秀隆とて、大名の子だ。自分が民草よりも恵まれている事を理解している。民草とて乗り越えられることなのだから、決して不可能ではない、と鼓舞できるのは……実に彼にとっては大きな事だ。

特に、今は。

「――勝家殿、そのような所で見てらっしゃらずとも、御用があるのであれば話しかけてきてください」

「は……申し訳ありません」

さて。

流石にこのような場所で考え事をしているのだ。何時までもそのままとは行かない。

縁側にて、日差しが差し込む中。胡坐を組んでの考え事中。しばし前に、人よりも少し重たい足音が、自分の近くに近寄ってきていたのは、耳に捉えていた。

「精神の鍛錬でございませうか？」

「ええ。私にとって、目標を成し遂げる為に最も必要な鍛錬です。自らがどれだけ未熟なのかは、理解しておりますが故」

「いいえ、秀隆様の心が未熟などと、一体誰が言えましようか。御身の目標を考えれば」

「そう言って下さるのは勝家殿位ですよ」

――そろそろ兄の下へ戻ったのではないのか。

そう言った秀隆に対し、勝家は少し溜息をついた。

曰く、姉との蜜月を邪魔されたくないのではらく向こうで暇をつぶしてこい。後秀隆の様子を見て様子を伝える。と言われたのだという。

下手するとご自身で様子を見に来かねない勢いだったので、流石に承知せざるを得なかった、との事。

何とも兄らしい言葉に、秀隆も思わず笑顔を零してしまおう。

対して勝家は、一つ溜息を吐いてから、秀隆の隣に腰かけた。

「全く。兄上は私が幾つだと思っているのか。もう子供ではないというのに」

「信勝様にとっては、貴方はいつまでも可愛い弟なのでしょう。最近
は、絵を描いてもらうのも減った、等とぼやいておられました」

「……絵だけではないでしょう」

「はは……鍛錬なども、ですな」

「全く。姉上に近すぎるのも、些かに。姉上も困っておられる事も多いというのに」

勝家の言葉を聞いて、今度は秀隆がため息を吐くことになった。

もう兄も自分も、元服してからそれなりに経つ。幼い頃から姉弟の距離が変わらないのは実に喜ばしい事ではあるが。

とはいえ、勝家にとっては、その姉弟の距離は、実に微笑ましいものなのだろう。隣の勝家の顔は、ため息を吐いていた割には、実に笑顔である。

「……とはいえ、兄上も、決してそれだけではないでしょうが」

だが……笑顔だった勝家の表情は、その言葉で険しいものに変わった。

「秀隆様も、そう思われますか」

「ええ。平手殿の事はこちらでも聞き及んでいましたから……姉上の心労を考え、今は少しでも傍に居たいのではないか、と思います」

兄にこうして側近が居る様に。

姉にも、腹心とも呼べる人物が存在した。

織田家の家老として先代、信秀にも信頼されていた男、平手政秀。後見人として、そして信長の相談役としても、長い事彼女を支えていた男……実の父以上に、信頼できる大人であったやも知れない。

そんな政秀が、自ら命を絶った、という話を聞いたのは、つい先日の事だった。

当然、家中は大いに揺れた。信秀の統治を支えた実力ある家臣だ。彼が自ら死を選ぶなど想像も出来なかったものが多い。年を召していたとはいえ、未だにその経験で、多くの家臣の手本となれるような男だった。

秀隆も、直接会って話したことはなかったにせよ、その辣腕は自分の耳にも届くほどであった。当然、彼の死には驚いたものだ。

だが、最も衝撃を受けたのは……誰よりも、姉だったろう。

その原因が……かの葬式での信長の行いを諫める為ともなれば、なおさら。

「姉上は……」

「まるで平手殿が乗り移ったかのような辣腕ぶりでございます。それが信勝様にとっては些かと、痛々しい様にも、見えているようです」

「……平手殿は、命を賭しても構わぬほどに、姉に忠義をささげているらっしゃった」

それからだった。姉が、まるで人が変わったように当主としての仕事に取り組むようになったのは。否、以前も仕事はしていたのだが……かつて以上に、その辣腕を振るうようになっていた。

家臣の中には、かつての信秀様を思い出させるようだという者すら現れる。若き当主がそれだけの腕を見せている事に、姉を認める家臣が増えているのも、事実ではある。

「その覚悟を、受け止めた、からでしうか」

「喜ぶべき事なのかは、分かりませんな」

「……姉上にとっては、特に」

信長に、彼の思いが届いたのかは、他人には分からない。

しかし、彼女にとって何かしらのきっかけになったのは間違いないだろう。

……秀隆にとっても、喜ぶべき、と言い切れる事ではない。

大きな流れが動き出している、と物の怪は口にしていた。

平手の死は果たして、その流れに全く関係ない事なのか。それとも。

姉が、家臣に認められ始めた事。当主として相応しい傑物へだと、言われ始めた事。その裏でも尚進む、母の企み。

全ては、動き出しているようにも見える。

姉という個人を、中心として。

「なればこそ、今こそ信長様にとって正念場なのは、間違いないでしょ

う。平手殿の死を乗り越え、当主として大きく育つ……その憂いは、絶たねばなりません」

「ええ。万が一にも、家中での憂いもないようにしなくてはなりません……勝家殿、そろそろ？」

「……ではないかと思われませう」

——すでに、土田御前の下に集う反乱分子の数は相当数になった。多くの戦力を抱え、これだけあれば反旗を翻す事も可能であろう、程度には。勝てるかと言え……分らないが。

しかし、時間をかけ過ぎれば事が露見する、という危険を孕んでいく謀だ。母とて現実的な所を見て、動き出す頃合いだろうというのは、凡その予想の範疇だった。

「私も、その時まで……ですな。必ずやあの方を……」

少しでも抵抗できるように。

秀隆は、ゆつくりと立ち上がった。今日は特に任務もない。菩提寺に赴いて一人、心と決意を磨く時だと。

「では、勝家殿。その時は……良しなに」

「承知いたしました。秀隆様も」

……立ち上がる。

決行の時は、近い。その時、母と過ごしたこの屋敷を、母の血で真っ赤に染める事を想像し。震える手に、ため息を吐く。

風に、新緑の葉が舞い上がる。

顔に吹き付けてきたそれに、一瞬目を細め……

——その向こうに、黒い細い何かが靡いた気がした。

風が吹き終わった後。周りを見渡す。何か、それらしいものはない。気のせいかな、と思い改めて、菩提寺を目指し歩き出す。最近疲れているのだろうか、と思いながらも。それでも止まる理由にはならない、と自分を叱咤して。

秀隆が去った後、そこにふらり、別の人影が立っている。

秀隆よりも頭一つは小さく、そして細いその男は。

どろり、沼の様な赤い瞳で、その場に残った勝家を見つめて。母譲りの長い濡れ羽色の黒髪を後ろでくくって。

その小首を、かくん、とからくり人形の如く、傾けた。

世界

「———そうですか、母上が、いよいよ」

「え、ええ……予想よりも早かったです」

秀隆にその知らせが伝えられたのは、勝家と話した僅か数日後の事で……その話していた本人が、秀隆の下に駆け込んできたのである。その深刻そうな表情を見ただけで、凡その事は彼にも察せられた。

いよいよ、母が立ち上がる事にしたのだろう、と。

「兄上には？」

「いえ、何も……最後まで、信長様から隠れつつ、準備を整える事に終始する模様です」

「なるほど。となれば、兄上には酷な事をせねばなりませんね………理解の迫い付かぬ内にご自身の肉親の首が落ちる事になるのですから」
「………左様、ですな」

土田御前には、勝算がある。完璧に背後を突く為の勝算が。

常に隠遁を貫いていたその動きは、姉上の事を侮っていたから当主から引きずり降ろそうとしたのではなく、誰よりも疎んでいたからこそ、引きずり降ろそうとしていたのだという事を、如実に表している。

此度の計画が、信勝にすら秘密で進んでいた、という事実がその何よりの証拠であると言えるだろう。

兄、信勝は、信長と共に同じ領地で仕事をしていた。

母は、それを好機と捉え、兄に一切何も伝えることなく、静かに動き始めた。敵を欺くには、まず味方から。信勝への情報を一切流さずして動く事で、異常と呼べる程、陰に隠れて動いている。

最後に。全ての準備が整ったところで信勝に知らせ………そこから、一気に反旗を翻す。油断を突いて信長を追い落とし、信勝を当主に据える。先ずはそこから、と考えているのだろうか。

———まず最初に抱き込んだ、と思っていた秀隆が、自分を切る為に獅子身中の虫となっていなければ、姉である信長も、気づかなかつたやも知れない。

「秀隆様の……お覚悟の、程は」

「定まっている。と、言いたいところではありますが。結局は、最後にやらねばわかりませぬ。その時剣を振れるか等と……やれる事は、やってきたつもりです」

「そう、ですか。であれば、決起の日取りは、ここに」
「承知いたしました。確かに」

だが、最早この企みが成功する見込みはない。自分が失敗したとしても、姉がすぐさま対応出来る状態になっている。後は……自分の一太刀にて、最低限の犠牲でこの企みを潰せるかどうか。

「……」

「それでは、失礼いたします……」

「勝家殿」

「……は、なんでしよう」

「最後に一つ、ご助力頂きたい……姉に、最後の挨拶に参ろうと思います」

事を成し遂げたにしろ、しくじったにしろ。先ず間違いなく自分が死ぬのを、秀隆は覚悟している。

秀隆が土田御前を狙うのは、彼女が野望に向けて大きく足を踏み出すその一歩目の瞬間である。すなわち……決起の瞬間。その時、彼女の首を切り取って、計画を頓挫に追い込むのである。

土田御前が倒れた後、諸将を抑えられる柴田勝家という人材も居る。後の事は気にしてはいない。しかし……まず決起の際には、その場に多くの『信勝派』が集結しているのだろう。それら全てを一人で切り伏せられると思うほど、自分が強いと思っていない。

母の首を最小限の動きで狙い、確実に絶つ。それは、母を無駄に苦しませない様にといい、秀隆のせめてもの思いやりでもある。一撃、最小限で殺す、自分の剣術がこのような形になったのを、ある意味感謝すらしつつ。

ただそれだけ。それ以外をしない事で、本来自分では成し得ない大

業を、命と控えに成し遂げようというのだ。

故に。せめて、事情を知る姉には、挨拶をしておきたかった。

「――姉上、私です、秀隆です」

『んむ。くるしゅうない、ちこうよれ』

夜半、信勝にすら内緒で、姉の部屋の前に立っている。

この城に来てからの、姉の私室……さらに言うのであれば、城主になってからの私室に来るの等、本当に初めてだった。

普段、信勝もここに来ているのだろうか。そしてあのやる気のない返事は一体何なのだろうか。

「失礼いたします――うわ」

「言うと思った」

部屋に入って真つ先に入っただのは、床に寝つ転がる姉……ではなく、その目の前に置いてあるそれ――横倒した円盤に周りを囲まれ、四本もの足に支えられた巨大な球体の……置物。

「信勝も言うておったな、うわって。これそんなに趣味悪いか？」

「いえ、そんな事は……全く見た事もないものなのでそりゃあ、まあ驚きもしますけれども……なんなんですか、その、大きいのは」

「これは地球儀だ」

「いやだからなんなんですか」

「ふむ……よく見てみる」

寝つ転がった信長が立ち上がり、その『地球儀』という物の傍によると、とんとんとその丸い部分をくるっと回し……あるところで止めて、とんとんとある一点を叩いた。

とりあえずそのデカブツを覗き込んでみて、信長が指さしている所を見てみた。そこには、なんだか細長い、蛇にしては短い、変な模様……らしいものが描いてある。文字っぽいものも書いてあるが、そもそも秀隆には読めない。

一体何なのか、しきりに頭を捻っていると、信長がにやりと笑った。

「えっと、これ、何を描いているんでしょうか」

「分からんか？」

「……いえ全く」

「では、そうだな。一つ、解くためのカギをやるるか」

その細長い模様から、信長がつつと指をずらし……その隣にある、その細長い模様とは全然違う大きさの、広い模様の所を叩いて見せる。

「ここはの、俺らが『明』と呼んでいる国よ」

「……えっ？ 明？ コレが？」

そういわれ、流石に秀隆も理解できた。これは、地図だ。しかも球体型のなんとも珍しい形の地図である。しかしながら、コレが明、だとするならば。その隣、この小さな……細長いもの、というのは。

「じゃあ、この、細いのが日ノ本、という事ですか？」

「正解。こいつはな、世界をそのまま写し取った地図よ。南蛮から流れてきた物でな、面白いだろ」

そういわれ、驚いた。

今いる、自分が暮らしている大地、日ノ本の大きさが、これだというのか。明と比べてなんと日ノ本という国が小さい事か。しかし……その直後の世界、という言葉に、待てよ、とその考えが止まる。

明の向こう、南蛮、そして仏の生まれた地、天竺。そういった物すらここに描かれているというのか。こんなにも、広い広い物を写し取った地図など、見た事がない。その中でこの日本の大きさ。改めて……見直してみると、さらに良くわかった。

「こ、このように小さいのですか。日ノ本というのは」

世界から見れば、まるで豆粒だ。

自分一人から見ればこんなに広大な日ノ本という地が、こんなにも小さいものなんて。

「こーんな中で、俺ら永遠と同士討ちしてるんだから、笑えるよのう」

「わ、笑えるかどうかは兎も角として……驚きは、しました。正直な話」

秀隆の知識の中に無い事ばかりで、目を丸くしてしまったが……しかし、そうではない。そう言う話をしに来たのではないのだ、と思つて頭を振って……

「笑えるわい。こんなちつぽけな国で、同士討ちの果てに死ぬ覚悟決

めた男が、目の前にいるんだからな」

「――！」
「母上が動くつもりなのだろう。態々、神妙そうな声色で来よつてからに」

秀隆は、目を見開いた。姉は全てお見通しだったらしい。思わずしてクスリと笑つてしまう。やはり、姉には一歩どころか、二歩、三歩と上を行かれてしまう。

「いやはや……何ともまあ、全てお見通しですか」

「分らないでか。んで、別れの挨拶か。全く湿っぽい」

「そう言われましても」

秀隆にとつては、ずっと自分がこうなる事は覚悟していた事。姉も凡そは分かつていたと思つている。流石に、自分一人で味方を多くつけた母を切るのだ……その辺りが分からない訳もない。

どうなるかが分かつている事と、それについて自分が少しでも納得するのは別問題という事だろうか。

なんというか。姉上らしいと言えば、そうかと思つてしまう。

「流石に何の挨拶も無しに。というのも、不義理ですから」

「……」

「姉上、諸々、ありがとうございました。後はお任せしてしまう事になります……お許しただければ――」

「――のう、秀隆」

信長は、秀隆の言葉を遮るように、口を開いた。

こちらを振り向いたその赤い瞳は、一直線に秀隆を射抜いている。燃えている。その瞳の奥には、昔見た時から変わらない、何かが確かに燃えている。

今、秀隆にはそれが何か、なんとなく分かる気がした。

それは、きつと意思だ。触れたもの全てを焦がすような、そんな意志だ。

「やめんか、母上を切るの」

そんな意志を以て……彼女は、酷く当然の様に、そんな事を、秀隆に、言うのだ。

先人

冗談にしても笑えませんかよ。

と、口にしようかとも、一瞬思った。だが……やめた。姉がそんな趣味の悪い冗談を言う等、ないだろう。となれば、間違いなく本気でそう言っているのだろう。

にしても。秀隆だって、怒るよりまず困惑してしまう。こんなにさっぱりと言われたら。

「……分かってて言ってるっしやる」

「うむ。お主がまあ、諸々考えて、考えて、考える事をやめずにたどり着いた答えであろう事は、なんとなくな。でもやめんか？」

「本気ですか。いやはや、姉上には、いつも度肝を抜かれる……やめると思ってる？」

流石に秀隆とて、それが本気というのであれば、下がれない。今までの労苦を惜しむつもりもないが……しかし、母の野望を止められたのは、あの時、自分だけだった。それを果たせなかった未熟を、罪を、ここで投げ捨てるなど。

姉の目を、正面から見返す。

ここで目を逸らしては、母の首を狩るなど夢のまた夢。強い意志を持たねばならぬ、と己に言い聞かせて、燃え盛る焰の奥を、寧ろ覗き込むように。

その焰に目が焼かれようとも、最早構うまい、と。

「母上は、俺がさつきと処す。反乱企んでるやつを潰すのなんざ当主としての仕事だ。お前がやるべき事じゃないだろ」

「しかし母を止められなかった責任があるのは私です」

「んなもん、いきなり生みの親切れつつたって無理だろ普通は。俺だって、まだそこまではいけんし。それにお前、死ぬんだろ？」

「十中八九は」

「じゃあ止めるわ。もったいない」

姉は、耳などをほじりながら、そう口にした。

真剣に話しているとは到底思えない態度だが。しかし。姉の目は、

未だ焰を消していない。気を抜くことはしない。

「もつたいない、ですか」

「まあな。お前はずうつと、ずうつと、考えておる。普通だったらなんも考えず『仕方ない事だから』で済ませる事まで、まあよう考えよる。母上の事だつてそうだ」

「……考えず、何もせずに母を切るなど、土台無理な事ですし。考えなしでいられる程にこの浮世、甘くはないでしょうに」

寧ろ言い訳に逃げて母を切るなど、秀隆には到底出来るものではない。仕方ない、等と流されて切れる程、母との縁は軟ではない。一つ一つ、自分で納得できる理由を積み重ねていかねば剣など振れぬ。

そも、考えなしでやっていける程、この浮世が甘くないのは……秀隆は、嫌と言うほどに知っている。

ゲッター線の使者にそそのかされて。

自分の不調を隠したりもして。

そもそも、母に自分が裏切り者だと発覚しないようにする為にも。

秀隆は、ともかく嫌と言う程に頭を使って来た。否、そうでなくてはあつという間に破滅していたかもしれない。そうじゃないと今までやってこれなかった。油断して、のんびりできる時など、兄と姉が居た時くらいだ。

「——そこだ」

「はあ」

「お前はそういうがな？ 家の命で頭を満たし、その命令に終始して、その事について何も考えぬ……そういう者の方が、この世の中多い」

「そのような事は、ないでしょう」

「お前はな、天下に遍くある『人』という物に希望を持ち過ぎだ。そんなに周りの人間って色々と考えておらん。おらんおらん」

——だから、俺にとつて、お前は貴重な人材なんだ。

姉は、一つ溜息を吐いた。

なんだか、その目に、少しあきらめにも似た光が見えたような気がした。

「それが何でか、お前には分からんのだろうなあ……」

「ええ、まあ、全くもって分かりませぬが」

「単純だ。そっちの方が、とんでもなく楽だからだよ」

そしてその諦めの光と、今にも反吐を出しそうなそんな表情は、秀隆にとつては驚きを伴った。正直な話、怒りや悲しみの表情であれば、見た事はあった。それに、犬の糞でも踏んだかのような渋い顔だつて見た事はある

だが明確に『嫌悪』といえる表情を見たのは、今回が初めてだったかもしれない。

「自分の頭で必死に考えるのつて、疲れるだろう？」

「……ええ、まあ。それは、そうですね」

「生きるのに必死だと、考える事なんてしたくない。命令だから、周りの奴がそうしているから、誰かが言っていたから……そんな曖昧な理由に乗って、自分なりの答えすら出さぬ奴が、まあ多い事よ」

母上に付き従つてる奴らも、凡そそんな奴らばかりだろう、と信長は言う。

「正直、菩提寺で仏の道なんぞ学び始めた時は、ちよいと不安にすらなつたわ。仏の教えだからと考える事をやめるやつなんざごまんといる」

「……」

「だがなあ……お前はずっと、仏の教えを自分でかみ砕いて、その上で、自分の答えを出そうと必死に足掻いている。それが、どれだけ大きな違いか」

……そんな事を言われたのは、初めてだった。

考える事だけで、ここまで褒められるなんて。絵の腕以外を姉に褒めてもらったのは実は初めてかもしれない。それに……

姉が考えている事を無理して理解しようとしたことはない。だから、こうして彼女の考えをつらつらと聞くのも、意外と少ない気がした。

「——これ、見たろ」

「は、地球儀、でしたか。ええ、日本の小さな事、そして、世界の広い事は先ほどしっかりとこの目で」

「そうだよ……お前のやってる事なんざ、世界から見れば豆粒みたいな事だ」

「豆粒とは、また随分な」

「俺が俺の仕事をすれば、お前はそんな豆粒みたいな事の為に死ぬ必要もない。貴重な人材の死をわざわざ見過ごせつてのがおかしい話だろう」

——それは、確かにそうだ。

信長は、この家の当主だ。

彼女が反乱を鎮圧しようと号令をかければ、織田家全体が彼女の言葉通りに動く。如何に母が戦力をかき集めようと、不利なのは彼女なのに変わりはない。真つ当に戦えば姉が真つ当に勝つのは当然の帰結ではあるだろう。

しかし。

「——確かに、姉上から見れば、私が母上を殺すのに拘るのは、下らぬ事なのでしよう」

「まあ、俺から見れば確かにな」

「ですがね、姉上。私は腐っても武士の家系に生を受けた男……恵まれた側なのです」

秀隆は、それでも、と言うのだ。

「確かに世界から見れば私が行おうとしている事等、小さい事でしょう……ですが、そんな小さい事一つ成せずして、何が武士の子でしょうか」

「……それは」

「ましてや、身内同士の愛憎など、如何様な民草とて、抱える問題……ましてや、ここまで広い世界に、どれだけ溢れている事か」

世界が広いからこそ。

どこまでも広がっているからこそ。

世界には無数にも等しい人が居て。その人々の中には、秀隆と同じように悩み苦しむ者など無数にいる。秀隆以上に苦しい立場で、その悩みに向き合っている者もいるだろう。こんなにも世界が広いのであれば……と。

秀隆は寧ろ、覚悟がより強く決まったような気がした。

「なれば、そこで躓くのは、民草よりも恵まれた我が身には許されぬ事でしょうに」

「そんな理屈が何処にある」

「私の中に」

秀隆は、仏の道を学び、多くを取り込んだ。衆生がずっと自分と同じように悩んでいる事を知った。多くの者が悩み、そして己なりの答えを出している事も、知った。それは秀隆に一つ、積み重ねる力を与えた。

完璧な回答は存在しない。己なりの答えを出すしかない。されど、完璧な回答など存在しないならば、自らの意思で積み重ねたその果てに得た答えも、決して間違いではないのだと。

「——多くの者が答えを出したことが、私にとって力となったのなら。私も答えを出して後に続く者の力にならねばなりません」

「んな義理もなんもないだろうに。聖人にでもなる積りか？」

「まさか。私は俗人以外にはなり得ませんよ」

これは母を切る為に積み重ねた、多くの理由の一つでしかない。切る言い訳を探して見つけたようにしか見えないそれは……しかし、秀隆にとっては、よく考え、そして自らの意思で積み上げた確かな『理由』の一つだ。

「それで？ 後は何がありますか？ 私を止める理由。其の悉くを打ち落として見せましょうぞ」

「……ま、お前がよく考えている、と言っていたのは俺自身か。考えて覚悟を決めたのであればそりゃあ、生中な言い方じゃ言い訳も出来んなあ」

「そりゃあそうですよ。恩人を切るのですから、泰山の如くに積み重ねました」

それらは最早幾つ積み上げたか。一息に思い返す事は秀隆当人も出来ない程だ。

だがその一つ一つを思い返す事は、直ぐにも出来る。考え抜かずして出した答えは、その中には一つもないからだ。

「……まったく、もったいない。お前に、世界の景色を見せて、絵を描かせたかったんだがなあ。ああ、くそ」

「はは、そんな事だろうと思いました。まあ、生き残ったらご一緒させていただきます」

「生き残る気あるか？」

「……さっきまでは、ありませんでしたけど。今は、少しだけ出来ましたよ」

とはいえ。

最早、死んでも構わぬと思っていた命。こうして生き残れと求められたのは意外にも初めてだったりする。勝家とて、秀隆が生き残るとは思っていないだろう。

そもそも当人が死んで当然と思っているのだから。

だからずっと生き残った後の事は考えてなかったが……しかし、世界の景色を見て絵を描けという言葉には、少し、欲が沸いた。

母を切った後、自分の見た事もない景色を見て、絵を描くというのは、悪くないかもしれない。最近は何画ばかりを描いていたのだから。

「そうか」

「ええ。では……生き残ったなら、またお会いしましょう。姉上」

「うむ。そうだな。生き残ったら、色んな所へ連れて行ってやろう」

狂情

人間というのは、ここまで感覚を尖らせられるのだと、今、初めて知った。

これよりは、ただ一撃のみにて反乱の流れを断ち切る大任。それを成し遂げるといふ強い意識で、相当に気を張っている所為なのか。

肌は、空気の流れすら敏感に感じ取って、ほんの僅かな床の軋みの音が、心なしか大きく聞こえる気すらする。

「――」

腰の刀が、今、普段以上に重く感じるのは、きっとその所為だろう。これだけ集中できているなら、一瞬の隙すら見逃さず、刀を振れる気がする。

秀隆が進んだ先、土田御前が集めた家臣がそこに集い……信長に対し、反旗を翻す、その時を待っている。

とはいえ、真つ先に戦いを仕掛ける訳ではない。準備の準備が整つての、顔合わせの段階だ。それでも……ここを過ぎれば、母上一人を切ったとて、反旗の流れを止める事は出来ないだろうと思う。

ここしかないのだ。

言葉で止められる段階は過ぎた。それでも、彼女の息子として、これ以上の悪逆を母にさせないために。兄を叛逆の神輿にさせぬために。そして、姉への叛逆を確実に潰すためにもここで……

切る理由を、積み重ねてきた。それがどんな物かを、数える事は出来ようが、しかし今は……ただ一つ。そこより生じた必殺の覚悟を、鈍らせる事なく、尖らせるのだ。母が兄を当主に据えようと、覚悟を決めたように。

「ふうふう……ふう」

何度も、頭の中で咀嚼する。母の喉首を搔つ切るその一瞬の景色を、想像し。幾度とて繰り返し……手順を、頭の中に刻み込む。

母を切った後、自分が討たれようと、その場には勝家が居る。きつと、反旗の芽を抑え込み、母以外の犠牲を出さずに終えてくれるだろう。であれば、自分が考えるのはただ一点、母を切るその瞬間のみ。

そこだけを考えればいい様に、事前いろいろな考えを巡らせたのだから、ここで華を咲かせてくれないと、死んでも死にきれない。

「流石に、運動等が得意でもない母上に避けられるとも思わないが……まあ念には念を入れておこう。万が一首を絶てねば苦しませるばかりだ」

と、口に出しておきながら、閉口する。

ここで聞き取られたら全ての計画がご破算だ。考え事にふけり過ぎて周辺の確認を怠り過ぎている。浮足立ってる。

秀隆自身、集中しているつもりではあったのだが。それでも大舞台の直前なのだから心が揺れもするのだろう。

もう一度気を引き締め直さないといけない。そう思っていたところ……

「よう、喜六郎」

「っ!」

その声に急いでくるりと後ろに振り返る。

そこに立っていた人物の姿に目を見開いた。

「あ、兄上……」

「どうした？ 怖い顔して。なんか悩み事か？」

兄、信勝が、此方に向けて歩いてきているのである。

なぜ、と一瞬思ったが……しかし、自分が今、ここにいること自体が答えではないかと思った。いよいよ母が決起を促すその時なのだから、主役がいなければそもそも成り立たない。故に、母上が呼び寄せたのだろう。

しかし、焦っている様子もない。姉に反旗を翻す、等という暴挙については、まだ知らされていない模様だ。

であれば、ここで下手に動揺してぼろを出すのが一番まずい。秀隆としては、最後の最後まで信勝には何も知らずに過ごしてもらいたい。そうでなくては……母の不意を完璧に突く事ができない。

「怖い顔など。いつも通りの仏頂面でございます」

「ふーん。そうかあ」

「兄上こそ、どうしてここに」

とはいえ、万が一、別の用事だった場合、不穏な態度を取っているのは、寧ろ違和感を抱かせてしまう可能性もある。

秀隆のその質問に、信勝は笑って答えた。

「お前に会いに来たんだよ」

「——私に？」

「そうそう」

「どうやら、その万が一の可能性だったようで。」

一つ、息を吐いた。兄はまだ何も知らされていないようだ。であれば、ここは適当に話して煙に巻くのが一番だろうと判断する。

しかし、事ここに至って兄にまだ何も言わない……というのはいさかやと不自然というか。母上は何を考えているのか。

「しかし、あいにくと私はこの後、用事でして……ええ」

「知ってる」

——その時、信勝の口が、カパア、と裂けたように笑みを浮かべたのが、見えた。

「え？」

「母上を切りに行くんだろ？」

「——っ!？」

驚いて、意識を信勝に向けた、その瞬間だった。

何者かに、急に羽交い絞めにされる。何事か、と思う暇もなくそのまま抱えあげられて信勝の前にまで連れてこられた。

秀隆よりも大きなその体……そして屈強な腕。

秀隆には、見覚えがあった。

「か、勝家殿?! これは一体?!」

「申し訳ありません秀隆様……信勝様のご命令です」

「兄上の……!？」

「——きろくろー、こつち見ろ」

しかし、そこに集中している暇もなく、ぐい、と頬を両の掌で包み込まれて無理矢理に正面を向かされてしまう。そこには……兄の、端正な顔が見えた。

だが。

「っ……！」

「お前は昔つかからそうだよなあ」

宝石の如く赤い、美しい目は……まるで泥沼かのように濁り、蕩けてしまっていた。覗き込めば、その奥まで飲み込まれてしまうような。そんな、明らかに異常な目で、彼はいびつな笑顔を象っている。笑っているはずなのに。見開かれた目も、三日月の如く弧を描く口も、だらんと下がった眉も、その全てが組みあわさって、背筋を冷やす。

「無茶ばかりするんだ。弟のくせに」

「な、何の話です……兄上」

「権六から全部聞いた。母上を切って、姉上への謀反が起こる前に潰す、だっけか？ その為に一人で母上の傍にいらいろいろ準備してたんだって？」

「ぐっ……！」

後ろの勝家を睨みつけようと思ったが、しかし。そこを見計らったかのように、頬を優しく掌で撫ぜられて、力が抜けてしまう。

頬に触れる信勝の掌は、あまりにも優しく、そしてつららを想起させる程に、冷え切っていた。まるで、この世の者ではないかのように。頬を撫ぜる度に、秀隆の抵抗する力をそぎ取っていく。

「全く、いいか喜六郎。お前はな、弟なんだ。弟はそんな大それた事なんかしなくていいんだよ。こういうのは兄貴の僕の仕事なんだ」

「そ………そのようなー。これは、母上を切れなかった私の……！」

「だーかーらー、お前は僕の弟なんだ。そんな母上を切る、なんてつらい事、やらなくていいんだよ。お前は黙って、僕の後ろにでも隠れておけばいい。姉上でもいいぞー」

ささやく言葉は、その冷えた手とは正反対に。甘やかで、優しい。しかし、ささやかれている秀隆に有無を言わせぬ、異様な迫力がある。抵抗するな、僕の言うことを聞け。お前は何もしなくていいんだ、と彼の頭に刷り込むように。

「それにしても、母上もとんでもないこと考えるよなー。姉上を排して、僕を祭り上げようなんて。全く、それについてこようとする奴ら

も奴らだ。全く、能無しの馬鹿しか居ないのかなあこの家。姉上の邪魔にしかならない」

「——そ、そうです。ですから、私が……!」

「だめだめ。頭を刈っただけじゃ腐った手足は残る。姉上の足を引つ張る奴らは居なくならないから。根こそぎ……やらないとなあ」

ぐにやり、開いていた目が細められて、弧を描く。

何を言っているのか。しかし今は、考える前に感覚が叫んでいた。嫌な事が起きる。秀隆には、想像すらできない。否、したくもない程に、嫌な事が起きる。そんな予感を。

咄嗟に勝家の腕から抜けようともう一度暴れるが、しかし、油断一つも勝家はしていない。抜け出せない。勝家との腕力の差は歴然だ。しかし、それでも今ばかりは、それに納得してはいけない、と思う。「——喜六郎。もしお前が母上を切っても、こういうことはまた起きる」

「そのようなことは……っ!」

「だから、周りも腐らせる原因は綺麗さっぱり居なくならないと。姉上が目指す天下に不要な奴らは……僕と一緒に連れていく。できる限り、多くな」

「……っ!」

「僕が姉上の敵をぜえんぶ炙り出すんだ。僕についた奴らは姉上の道に要らない愚か者。僕みたいな無能を祭り上げようなんて考える僕以上の無能共なんだ。そいつら諸共僕らが消えれば、姉上は何の憂いもなく邁進できるから」

「はあ……初めて、姉上のお役に立てる」

——血の気の引いた、音が聞こえた。

兄は、頬を赤らめて、初心な生娘の様な恍惚とした表情を浮かべている。

マズい。そう思った時には、信勝は既に勝家と秀隆の隣を抜けて……秀隆が向かおうとしていたその先に。母と、裏切り者達の会合の場に足を向けているのだ。

それが何を意味しているか、分からない秀隆ではない。

とつきに、腰の刀に目を向ける。何とか抜き放つ事ができれば、勝家を切り、信勝を止める事も叶う。今しかない。まず、一瞬、力を抜いて、諦めたように見せかけてから、一気に動く。出来るはずだと、自分に言い聞かせ……

そう、動こうとして……

「——そ、こ、ま、で」

ぎゅ、と手を握られた。向かった、と思っていたのが、何時の間にか秀隆の隣で彼の腕を握り、こつちを覗き込んでいる。にやあ、と悪戯が成功した小僧の様に、もっと笑みを深めていた。

「悪い子だなあ、喜六郎……でも、お前はそういうやつだ。真面目だからなあ。最後まで諦めたりしないよなあ。何でもお見通しだぞ、僕には」

「兄上ッ！ お考え直してください、兄上が、そのようなことを……っ！」

「変に修行なんかして。無理に母上を切ろうとして。反旗の計画を止めるためにとても頑張っていた……でも、もういいぞ？ あとは、兄上に任せておけ」

そのまま、信勝の顔が近づいてくる。

その目の底は、見えない。

泥沼どころではない、渦巻き、粘る、闇の底のような瞳がこちらを見つめている。それは生温い暖かさを孕んだ狂気であり、そして……

間違えようもなく、家族への『愛』に満ちていた。

「お前は、弟なんだから」

そう言って、こつん、と額と額を合わせ。

「——権六、喜六郎を外へ。中に入れるな？ そいつの諦めの悪さは、見てわかっただろう？ 気を引き締めてかかれよ」

「……ははっ」

「まって、まってください、兄上……っ！」

今度こそ、信勝は母の元へと歩き出す。

秀隆は、その歩みを止められない。勝家の手によって、引き離され

ていく。暴れる、暴れる。ひたすらに暴れる。しかし、びくともしない。勝家がどれだけの力を込めて、秀隆を止めているか……あまりにも無慈悲な手際である。

勝家の顔は見えない。しかし、それでも秀隆は後ろに見えるであろう男を睨めつけながら叫ぶ。

「離せっ……勝家!! 貴様ツ! 己の主君をむぎむぎ見殺しにする気か!?!」

「申し訳ありません、申し訳ありません……っ!」

「ぐっ……このっ……ええいつ! 離せ! 離せえツ! 兄上、兄上……っ!」

兄上。

ただ、秀隆の兄を呼ぶ悲鳴が、城の中に空しく響くばかりであった。

屈服

「……秀隆様も、最早一人の強き武士であるな」

勝家にとつて、織田秀隆という人物は、眩しく成長を遂げている若武者であつた。

正直な話をすれば。主としてではなく、同僚としてであれば、最も気が合うのは彼ではないかと思つている。真面目で、責任感もある。そして、武士として教養も武術も身に着けるだけの、気概もある。

そして……今、秀隆は勝家と共に、織田家の一大事をその手で止めようとしている。それも、自分の責を、自らの手で取るために。

「家を思い、家族を思い、そして自らの手で歩く。うむ。若い者の成長というのはいつでも眩しいものだなあ」

彼の幼い頃の事を思えば、最早そこまで育つたのは、尊敬の念すら抱く程であると、勝家は思う。彼が、土田御前に救われる前……最も酷い時期の彼は、家臣から散々な謂れ用であつたのを覚えている。

『憑き物に狂わされた鬼子』

大雑把に言えば、そのような評判ばかりであつた。

家臣だけではなく、下働きの物共ですらそんな心無い言葉を吐いているのだから、当時の評判は地に落ちていたといつても過言ではない。

勝家はその様な評判に踊らされ、主君の子を詰る様な真似はしなかつた。とはいえ、自分はそうでも、周りからそういうものが続出したのは間違いない。

そんな彼を……救つた、土田御前。恩人であり、母を。

『これ以上。母を悪鬼の道に落とすわけには参りません……お力をお貸し願えませんか』

彼は、切ることを、自らの手で決めたのだ。

簡単な事……で、ある訳がないだろう。

いったいどれだけの葛藤が、秀隆の中であつたか。本人ではない勝家は分からない。それでも、生中な覚悟でないことだけは、分かっている。

獅子身中の虫となり。

現当主たる信長に後を託し。

そして母を切るために、精神統一すら行う。

必ずや、己の生みの親を討ち、謀反の機運を絶つ。それだけの気概を抱ける武士が、この家に、否、天下にどれほどいるだろうか、という話だ。とはいえ、生き残るつもりが毛頭ないところは些かと将器に疵があるというしかないが。

「全く。我々将は、先ず生き残る算段を立てねばならないというに」
その辺りは、やはり経験の浅さからくるものだろう。

如何に敵陣の最中にての暗殺だとしても、生き残る目は幾らでもある。それこそ、自分がいるならば、その場に集う者共を蹴散らして、その場から逃げる程度は叶うだろう、と勝家は自負している。

その辺りは、上手い事、その場を切り抜けてから話せばいいだろう、と勝家は思っている。秀隆は、自分の主君である信勝の弟。もしみすみす死なせた等と言ったら、お叱りでは到底済まないだろうし。

同じ織田家に仕える者同士、助けようと思うのも当然ある。

「やて……」

最近は、城周りの賊の討伐、周辺国との小競り合いばかり。些かに剛剣を持て余していた所である。自分の剣を十分に震える時だ。

若者に倣つて、改めて自分も己の剣を見つめ直すのも悪くないだろう。腰を上げながら肩など回し……

「——おい」

「ん？ ……おや、信勝様」

噂をすれば、という訳でもないが。

秀隆の兄で、勝家の主君……織田信勝が、目線の先に立っていた。思い出す。そういえば自分で様子を見に行く等と、口にしていたのを。

どうやら本当に様子を見に来たらしく、こちらにのしのし近寄ってきているのが見える。

「秀隆様の様子を見にいらつしやったのですか？ 秀隆様は先ほど向こうに……」

「何を隠してる?」

しかし。

勝家が何かを口にする前にぬう、と信勝が顔を近づけてくる。

虚を突かれ、一瞬ぎよつとなつてしまう。話を聞いていたのか、と。とはいえ、話している内容を考えて、聞いていたとしても肝心肝要な部分に分かる事はないだろう。

となれば。あまりこういう口車が得意でもない自分でも、ごまかせらるだろう、と。

「ああ、秀隆様と話していた件ですな? ははは、アレは最近秀隆様に下った任の——」

「そういうのはいいんだよ。権六」

しかし。口にする言葉を狩るかのように、勝家の言葉に信勝は強く言葉を差し込んでくる。こちらを見る瞳は、少し、暗いようにも見える。

「そういうのと言われましても……」

「母上だな?」

何かを口にする前に、さらにもう一步。

思わずして、たじろいでしまう。こちらの目をじっと見て口にする言葉には、間違いなく確信の色が混ざっていた。

思わずして一步下がってしまう。

その下がった一瞬。

ストン、と全ての表情が、落ちた。

だが……勝家が、その直後にもう一步、下がったのは。その無表情が原因ではない。

まるで能面の如く表情が変わった、というのに。

「——っ!?!」

「秀隆が変な顔してた。覚悟決めたような顔してたんだよ。あんな顔してるのは僕は見たことがない。アイツの事はよく知ってるけど、それでも見たことがない顔だ。アイツがあんな顔をするなんて限られてる僕でも姉上でもないなら……母上だ。そうだろう?」

勝家の目を覗き込むその目だけが。赤の色がごぼりと濁ったのだ。

赤に、どす黒い墨の一滴が混ざるように。こちらを見ているように、信勝は今、何処を見ているのか、さっぱりと分からない程に。

全ての光を飲み込むような、どす黒い紅から、目をそらしたいのに。目をそらせば、自分の腹に小刀の一本でも突き刺さっていきそうな。そんな悪寒が、背筋に走っている。

異様だ。ここは敵地でも、戦場の真ん中でもない。見慣れた城の一部分に過ぎないというのに。ましてや、相手は自分の君主。武芸が得意という訳でもないはずの男だ。それでも尚、勝家は下がらされている。

本能がおぞましい何かを目の前の少年から感じてしまっているのだ。

「権六。言え。喜六郎は何を企んでる？ 母上をどうするつもりだ？」

「たっ！ 企んでるなど」

「あいつは弟だ。僕の弟だ。弟の癖にしなくてもいい苦勞をしようとするんだ。何もしなくていいって言ったのに。僕が何とかしてやるって言ったのに。アイツは変に真面目だから、自分で何とかしようとするんだ。しょうがない奴なんだ」

信勝は、何も知らないはずだ。何も知らないのに、ここまで疑いの目を向けるなど、無礼と取られても仕方ないはずだろうに、恐ろしいのは躊躇わないことだ。

戦場において最後の一步の踏み込みを躊躇う者は、その一瞬の思考の隙を突かれ、あっさり死に死ぬ。猪武者は死にやすいが、しかし。最後の一步を踏み出せないものは、その舞台にすら出られない。

しかし信勝はそうではない。猪武者ですら、敵の最も厚い所に何も考えず突っ込みはしないだろう。

信勝は……今、本来最も分厚い中心に、まるで唐突に表れ、そして踏み込んでくるのである。亡霊の如く。

あり得ない事が、全く不可解に起きる。人は理解できない者を恐れるというが、勝家の目の前には理解しえぬ存在そのものが立っている。

た。

「ああ——でもそうか。もう、消えても構わない、みたいな目をしてたし。死ぬ覚悟でもしてるのかなあ……母上を相手に死ぬ覚悟って……？」

ゆらりゆらりと揺れながら、信勝は、一步一步、暗闇の中にある筈の見えない事実には寄り寄るように近づいていくのだ。

「——ああ、そっかそっかあ」
そして。

辿り着いたことを示すかのように。能面の如く、全く動かず固まっていた信勝の表情は、どろりと溶けて、笑顔へと流れ、目はギラギラと輝きだす。

勝家の目の前で、信勝はそつと、答えに触れたのだ。

「喜六郎は、母上と刺し違えるつもりなんだなあ？」

「ぐう……っ!？」

「……」

勝家は、信勝に屈した。

恐ろしかったのだ。

蛇の如く、真相に近寄ってくる彼が、恐ろしかったのだ。

そして。全てを察して……『姉にとって邪魔な輩をまとめて始末出来る』と笑った信勝の、その狂気が恐ろしかったのだ。

「——勝家エ……っ！　そこを退けッ！」

「できませんぬ」

「ならば……押し通らせてもらおう！」

目の前で、烈火の如く怒り狂う秀隆を見ても尚、心を落ち着かせられるのは。信勝の命に従う事が、楽だったから。彼に逆らうのが、恐ろしかったから。こちらにも、己の刀を抜き放つ。

簡単な話だ。

この後、信勝様は、『反旗を翻すのはまだ早い。織田家の中の反乱分

子を出来るだけ集めてから反旗を翻すべきだ』と集まった諸将を煽る。

そうして、織田家の獅子身中の虫をすべてかき集め、まとめて信長に始末させる算段を立てる。それまで、彼を抑えればいい。

「参られよ……！」

「応ッ!!」

これが終わった後。自分がどうなるのか。

そこから、必死になって目をそらしながら。

慟哭

馬を飛ばした。

馬がつぶれても、それでも走った。

一刻も早く知らせねばならない。手遅れになる。傷ついた片腕から血を滴らせながらも只管に、走った。

秀隆は、勝家には勝てなかった。当然だ。武術の腕において秀隆は勝家には未だ勝てない。アレは、武術というより、暴風が近いとは思うが。大柄な体と、その為に設えられた大振りな剣から繰り出されるのは、まさに災害の様な一撃だった。

そもそも立ち向かう時点で、時間を稼がれているというのに、その挙句に退けられたというのだから、未熟ここに極まれる。

「早く、姉上の下に……っ！」

信勝が、反旗の音頭を取る等と、天地がひっくり返ってもあり得ない事した。

それも……自分諸共、姉に反乱分子を肅清させる為に。まとめて消える、とはそういう事だ。自分が反旗を翻す要因だと、分かっているのだ。

だから自分があえて首謀者となったのだ。

確実に、自分たち諸共、不穏分子を消し去るために。

このままでは、兄が、死ぬ。

母も切れなかった。兄も止められなかった。

無念と、焦りと、恐怖で、心がぐるぐると渦巻く。

人生で初めてだった。姉に、縋ろうと思ったのは。

「姉上……姉上なら……っ！」

しかし、もはや姉以外、秀隆に頼れる人物はいなかった。織田家の現当主たる彼女でなければ、こんな大掛かりな一件など、止めようもない。急がねばならない。

秀隆は、ともかく走り抜けた。片手だけではなく、足も潰れて血まみれになると、それでもかまわず駆け抜けた。

——秀隆が、信長の居城へ辿り着いたのは、翌日の明け方の事だっ

た。

ふらつきながら、緊急で取次を頼めば、番兵も、尋常ではない秀隆の様子を見て取って、素直に信長の元へと秀隆を通した。

痛みで耳鳴りもして来ている。誰かに話しかけられても、ほぼ聞きとる事すら困難。

それでもせめて姉には伝えねばならない。事が起きれば、最早、兄を打ち取らねば収束はしない。そうなる前に……急がねばならない。そもそも、兄が姉に反旗を翻す等、初めから想定してすらいない。母の思惑があらうとも、兄は決して下手な事をしないとこの前提があった。だが……もはや前提は覆ったのである。

「……失礼、いたしますっ！ 姉上っ！」

戸を開く。

何も言わないでの訪問に加え、この血まみれの体だ。秀隆も、流石に驚かれるだろうとは思った。それでも、緊急の要件だ。無礼は承知。如何様な処罰も後で受けよう。そう思っていたのだ。だが……

信長はくるりと振り向いたが。秀隆の惨状を見ても、一つ溜息をつくばかりで、驚いた様子を一つも見せていない。

「おう。秀隆か。こっぴどくやられたなあおい」

「申し訳、ごさいません……仕損じました……！」

「あー、何となく分かつてるから言わんでよい。つたく、権六にやらせたなあ奴……まあ良いか。こいつ抑えられるのなんぎそうはおらんからのう」

むしろ、眉を顰めたのは秀隆の方だった。

どうして勝家に自分が敗れたことを、信長が知っているのか。何故、と口にしようとしてしかし……酷く、嫌な予感が頭を掠めた。

兄は、決して無能な男ではない。それを秀隆は一番よく知っている。

このような大それた事をするのに、何も言わずに事を起こす様な事はしないだろう……であれば。

「……あ、姉上……まさか」

「信勝から既に知らされておるわ。冗談かとも思うたが……お主の様

子を見て、確信を持った。本当にそんな無謀をするとは。俺が信勝の行動を読み切れなんだのは、初めてか」

やはり。兄はこの事を姉に、始める前に知らせていたのだろう。

しかし、であれば。何故、なぜ姉はこのように泰然自若としているのか。

「お、お分かりであれば姉上！ 急いで兄上をお止めせねばなりません！ 兄上を止められなければ……」

「止めん」

「……はっ？」

「止めん。信勝は、その覚悟で俺に文を寄こした。俺も、覚悟を決めさせられた。アレの覚悟を無駄にはせん……褒めようとは、欠片も思わんがな」

そういつて、信長は踵を返し、文机に向き直る。仕事でもしようと思っているのか。頭にカツとしたモノが昇る。声を荒らげそうになる。怒りのまま、姉に食って掛かりそうになる。

しかし、叫ぼうと、感情を荒らげようと、自分が向き合ってきた問題がどうにか出来たことがないのは、秀隆自身が一番よく知っている。

この窮地。絶対に思考を停止させ、感情的になつてはいけない。姉に、利を以て説かねばならない。ここで兄を止めねばいけない、と思わせるような言葉を。

「……姉、上」

「なんだ」

——しかし。

口から、言葉が出ない。

秀隆とて、信長が信勝の事をどうとも思っていない訳ではない……むしろその真逆であることは、よく知っている。であれば。何故信長は、それをよしとしたのか。

覚悟を決めさせられた、と言っていた。それは、秀隆と同じように、信勝という大切な家族を切り捨てる覚悟を決めたという事だろう。

それを否、と言える立場に、秀隆は居ない。何故なら、彼自身が母

を切ろうとしていた事実は、覆りようがない。

兄と姉の間にあるものを、秀隆はすべて理解出来てる訳ではない。故に、迂闊な言葉を吐く事も当然できない。

「っ……」

「どうした。申してみよ」

では、実利的な面ではどうだろう。

これも……厳しいだろう。

計画されている段階ならともかく、最早全ては整って、後はその堰を切るだけの段階。その旗印を兄が自ら買って出た。それがどのような意図で行われているのか……問題として皆が言うのはそこではない、『兄が反旗を自らその手に持った』という事実だ。

当主として、最早庇える段階に無い。

事が起きれば止められないだろう。

考えれば考えるほど、詰んでいる。

秀隆には、兄を助けるように頼むための言葉が、何も無い。

「——何もいう事がないのであれば、下がって治療を受けよ。重症ではないか」

「……」

しかし。しかし。

それでも引き下がれない。

おかしな話ではないか。姉を思って、自ら滅びの道を選ぶなど。母を止めて、この反旗を止めるのは、自分の責任であったのに。

ここで兄の言うとおりに下がってしまうのはあまりにも、無様ではないか。

感情が荒れ狂う。もはや、理性で訴えることは、叶わない。でも、それでも。必死になって、心の奥から、絞り出すように。

「——助けて、ください……姉上。兄上を」

もはや、何の理屈もない、感傷に塗れた、懇願の言葉を。

「当主として、見過ごせないことも。わかっております」

「……」

「兄上が如何なるお覚悟をしているのか。私には理解しかねます。そ

んな私が何か言うのは、烏澁がましい……と思います」

「……うむ、そうだな」

「それでも！ 兄上を……その様に死なせるなど。姉上の手にかけるなど……させたくはないのです、私はっ……これは、私のわがままです。個人の感情です。それでもっ！」

あまりにも、酷ではないか。

あんなにも幼い頃、姉上、姉上と慕っていた頃を知っている。姉の絵を描けばとても喜んでいた表情を知っている。同じ城で仕事が出るとはしゃいでいた声を知っている。

兄は、姉が大好きなのだ。純粹に、慕っているのだ。

兄が最も愛する人に、姉に、その首を切らせるなど。あまりにも。

「お願いします、姉上……兄上を、今、今、お止めください……お願いします……！」

「——秀隆よ」

しかし。その言葉を、信長は冷静に……しかし、冷徹とは呼べない程度に。

いつそ、ぬるいと呼べるくらいの声で、その言葉を断ち切った。

顔を上げた秀隆の目に入ってきたのは……少し、困ったような顔をした信長の顔。一つ溜息を挟み、彼女は口を開く。

「信勝……勘十郎はな。俺の敵を減らすため、と言って反旗を起こしよった。実際、理由はそれがほとんどを占めておるだろう……しかし」

「……しかし」

「こうも書いておったよ。『喜六郎の奴に母を切らせるのは、あまりに酷ではないか』と」

目を見開く。そして、目の前景色がぐらつき、ぼやけていく気がする。

それは……それは。自分が思っていた事と、まるで同じ事ではないかと。

「……お主は、母にせめてこれ以上の悪事をさせまいとした。それは紛う事なき、母への愛情だ。そして、俺と信勝を思つての事でもあつ

たのだろうよ」

「そ、それは……！」

「それと同じくらい。信勝は、お主を思い、俺を思い、事を起こしたの
だろうな」

「……っ」

——これが、愛の本質だ。

理解したか。という一言で、秀隆は最早立っていられなくなった。
体から力が抜ける。悪夢のようだった。母は、兄の事を思うからこそ
事を起こし。そしてその事を、母の為に止めようとした自分は……兄
の、姉弟を思う心に敗れ、そして姉に諭されている。

誰も彼も、家族を愛しているだけだ。だというのに、こんなにもす
れ違い、そして誰も救われようがない。こんな空しい話があるか。ど
うしてこんなにも家族を思っているのに、全てが破滅へと向かうの
か。

呆然とする秀隆に、しかし信長は、淡々と、言葉を紡ぐ。

「次は、兄を切る覚悟をしておけ……まあ、無理強いはせん。したくな
いのであれば、賊でも狩っておればよい。その程度は、よいだろう」
「……あゝあゝ」

そのまま、地面に蹲る。震えが止まらなくなった。

小さく、小さく……幼い頃のように、体を小さく丸めて。その震え
を抑えようとするが、もう、止まらない。

「うゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ……」

泣き叫んだ。

体の奥底からあふれる感情に振り回されて。喉の奥底からの叫び
声、姉の部屋にわんわんと響き渡る。

もう届かない。姉も、兄も、母も。もはや、自分の遠く届かない所
まで行ってしまった。どんなに子供のようにわがままを言っても、止
まってくれる訳もない。

誰も彼も、己の思いを以て、殺しあうばかりだ——

覚醒

ひゅーっ、ひゅーっ。掠れたような音が、かすかに耳に響く。

それが人間の声だと思えなかった。だけど、それは秀隆の喉から確かに漏れている声だった。ぎぎぎ、と体がきしむ音が聞こえる気がした。

姉の居城から出てきてから。何をしていたか。思い出すこともできない。どこまで歩いてきたかもわからない。何も考えなかった。泣き叫びながら、ずつとふらふらと何処までも歩いて行つた。途中から、声が枯れて何も言えなくなった。

「――」

意識が朦朧とする中でも、一步、一步、歩みを進める。どこかに向かっている訳ではない。ただ、止まってしまったらいけないような気がした。必死に歩いて、必死に向かっているのだ。辿り着くこともできない所に向けて。

ぐわん、ぐわんと割れそうな音が鳴り響く頭の中で、どうしても思い返す事があった。

『織田信長。第六天の魔王……そして織田信勝、かの魔王を目覚めさせし存在。その物語の今は、始まりにすぎん』

『貴様の母が生み出したこのうねりを、果たしてお前一人で止められるのか。楽しみに見させてもらう』

あの物の怪の言葉。

流れ。時代のうねり。

兄が、姉のためにと全ての膿を道ずれにするため、自滅へと続く反旗を翻し……姉は反旗を翻す者共全てをまとめて、討ち果たす。

魔王等というものを目指す理由は、いったいどれだけのモノだろう。

自分の姉弟を……家族を自分の手で打ち取る事は、その理由にはなり得ないだろうか。

『後はお任せします。姉上』

信勝は、ここで死に。

『是非も無し、か』

信長は、何時か炎の中で息絶える。

それは憎みあっている故ではない。

互いへの思いより生まれたこのうねりを、信長は愛という物の『本質』と呼んだ。であるなら、互いの事を思いやる事が、一体どれだけの悲劇を生むというのか。

想像もしたくない。

母を思いやる事。姉弟を思いあう事。それは、衆生誰でも抱く感情だ。それがこの様な地獄を生むのならば。この天下は、文字通り修羅の巷ではないか。

母が、兄が、姉が。このような事になるのは、自明の理だったとしても、言うのか。

自分を救ってくれた、大恩ある三人が、互いに相争い潰し行くなど。そのような事が。

秀隆には、それを許容するだけの、器量も何もない。母一人を切る覚悟をするのにすらも、時間と多くの準備が必要であったというのに。

だからこうして、出来るだけ遠くに逃げてきているのだ。必死になつて。現実と向き合いたくもなくて。

「……………あ……………」

しかし、それも限界だった。ずっと歩き続け、何処かもわからない所まで来た結果はこのザマ。血まみれだった足は最早、爪は砕け、足の指はどこも裂けて血まみれ。履物はとつくに使い物にならないような状態になっている。

痛みすら最早感じない程だというのに、しかし……………それでも、勝手に足の動きが止まってしまった。

地面に無様に転げ……………しかし、それでも秀隆は、這うように進む。止まりたくない。今止まったら。自分は現実に追いつかれてしまう気がしたから。ざり、と地面の小石に肌がこすれ、余計に血が溢れ出しても、もう一步、もう一步と。ともかく、先へ。

「ぐ……………おおつ……………ぎつ……………ぐう……………」

痛みも、荒い呼吸も、苦しみは、それ以上に辛い現実から目を背けさせてくれる。何ともありがたい事だとすら秀隆は思っていた。だから、まだ、まだ止まらない。さらに先へと進み――

『――目を背けるか。それも人類の一面だ』

「……………お……まえ……………」

しかし、彼が必死にその行く先に……………立ち塞がる者がいるのに、彼はふと気が付いた。

それは、まるで陽炎のように揺らめきながら、立ち上るようにその姿を少しずつ、現し始めている。鋭い爪を持つ、三本足。屈強な体……………それは紛う事なき、あの怪物だった。

――災厄を告げる化生が、そこに立っていた。

まるで、現実から逃げる事を許さぬかのように、彼は余裕をもって笑顔を浮かべながらどつしりと立っていた。

秀隆の体に、力が入ってくる。活力が戻る。しかしそれは……………どす黒い、ひどい見当違いな殺意によって。

「わ、たしを……………わらいに、来たというのか」

『そう見えるか?』

「おまえ、がつげた、ことばどおりになった……………兄も、姉も……………皆、あらそう、ばかりだ」

『それが歴史の流れだ』

「ふざけるな……………!!」

誰の所為で、何の意味で、引き起こされたのか。秀隆がそれを理解していないのなら、そもそもこんな所で這いつくばって等しい。それでも。感情が、荒れ狂う感情が、冷静な判断させなかった。

目の前の怪物の言葉が、この因果を引き寄せたのだと、見当違いな怒りは、どうしようもない程に荒れ狂う感情から零れ落ちた淀みそのものだ。

八つ当たりなどしている場合でもない。現実逃避をするのならば、少しでも……………何かをするべきだ。そんなことは、秀隆だってわかっている。

だが……………それを喜んで受け入れて、問題なく兄と姉の戦いに向き合

う事なんて出来るわけがないのだ。

「わらえ……この、ザマだよ。私、ひとりでは……このうねりを、止める事、最早叶わない……未熟な、この、私を！ 笑えばいいだろう！」
皮肉にも。

そんな八つ当たりじみた燃え上がる感情が、秀隆の言葉に力を取り戻させている。地面に伏せた体を、上半身だけでも起き上がらせ、睨むだけの活力を与えている。

だが……この化生は、その様子にニマリ、と笑いを浮かべて見せた。

『——お前ひとりでも、変えられるとも』

「……なにっ？」

『お前は、ゲッター線の旗印だ。貴様が旗を掲げれば、その気になれば世界一つすら変えることも出来る』

蜥蜴の化生は、そういつて大きく腕を広げた。

その背後、天空にて、翠の輝きが一層、その勢いを増した気がしている。その光が秀隆を包むと共に……体に、活力が戻ってくるような気がする。

……否、実際に活力が戻ってきている。先ほどより、しっかりと地面に手を付ける。足の痛みが、少し引いてきている。呼吸が楽になってきている。

秀隆は、目を見開いた。ゲッター線という物を感じた事は、今まで一度しかなかった。アレは自分を侵略するような悍まじさと、悪意を自分に感じさせる、悍ましい力であったがしかし……今、この力は、自分に活力を与え、あまつさえ立ち上がらせようとすらしているように思える。

「なんだ、これは……」

『ゲッター線は貴様に力を与えよう』

「——俺一人で、このうねりを止められるというのか！ それだけの力があるというのか」

『そうだ。ゲッター線の力は、無限にも等しい』

「ならばそうだと示してみろ！ 俺に……ゲッター線の真実とやらを、見せろ！」

——それは、かつて、目の前の存在に告げられた言葉をなぞるが如く。

ゲッターの力を求めるならば、お前はゲッター線の真実を知ることになる……そう、目の前の存在は告げていた。

今、秀隆は、ゲッター線の力を確かめるために、自ら真実を求めている。かつて告げられた言葉通りに、である。

『ならば見せよう……ゲッター線の真実。お前は、悠久にも思えるゲッターの歴史をその身で知る事になる。さあ——』

天を指さす蜥蜴の化身。その鋭い指先に従って、その先を見つめる。

そこにあるのは……天上にある、巨軀。その瞳。無機質なような瞳から、しかし今……秀隆は、明確な、意思を感じるような気がしていた。

初めて、その存在という物と、目が合った気がした。

その奥に……秀隆は人影を見た。

その巨大な存在の中、その人影は顔すら見えなかったがしかし、秀隆は、見つめられているのが、分かった。

「う、おおおおおっ!」

そこに。自分が、連れていかれる。

否……違う。自分の意識だけが体から引きはがされて、そこへと吸い込まれていくかのような。そんな感覚がしている。

遙か向こう。ゲッターエンペラーのいる、その先へと。

——降り注ぐゲッター線が、地上を跋扈する者共を駆逐していく姿を見ている。

太古、ゲッター線は、宇宙から地上に降り注いで、旧き地上の支配者であった竜を駆逐し、そして猿を現在のヒトの姿へと変えたのだ。

それがゲッター線の意思なのかの如く、ヒトは、嘗ての支配者であった存在から地上の支配者の座を奪い返し、短いときの中で、それ

以上の？栄を極めた。

ヨーロッパ。アジア。オセアニア。アメリカ。多くの大地に人間は栄えた。それは、日ノ本も例外ではない。

『——チエエエエエエンジ！ ゲッターアアアア！ ウワンンツツ！』

その遙か未来の日ノ本で。

一つの絡繰が産声を上げた。

それは文字通り、ゲッターの意思をその身に宿した、無敵にも等しい巨人だった。三つに分かれ、赤に、白に、黄に、三つに変形して、天を、地を、海を、自由自在に駆け抜ける無敵の存在。

圧倒させられる。

それを繰るのは……若き三人の武者。

どんな傷を負っても気丈に戦う豪快で人情深い男達。

狂気と知性でゲッター線という物に迫る男。

そして、類稀なる克己心でゲッター線にすら屈しない男。

太古より蘇った地球の覇者たる竜の軍団と。

圧倒的な化学力を誇る百鬼の帝国と。

かつて地球に存在していた文明の超兵器と。

未来から襲い来るゲッター線を滅ぼす一団と。

形を変えて。さらに強く進化し。そして次の敵へと挑む。彼らは無限に戦い続ける。

引き裂くツ！ 貫くツ！ 引き千切るツ！ 砕くツ！ 焼き尽く

すツ！ 破壊するツ！ 破壊するツ！ 破壊するツ！

敵対するモノと戦い、戦い、戦い抜いて……彼らは永遠に進化し、さらなる新たな形へと育っていく。進化を、進化を続けるツ！

そして——辿り着いたその先は。

ビッグバンをも超えるエネルギーを発する、強大なるゲッターの姿。

そう、それこそゲッターエンペラー！ 星をも破壊する機械の悪魔

！ 遙か先の未来にて永劫の戦いを繰り広げるゲッター線は、未だ進化の果てなど見えない！

——そう、ゲッター線は、無限に進化する。

様々な進化の形を模索する。多くに形を変えて。何時か、使命を果たすための進化へと至るために……彼らは、無限の戦いの果てに、様々なものを観測する。過去、未来、何処までも……そして。何時かの事。

彼らは、観測した。

ゲッター線の満ちない宇宙。

『——ダメですッ！ ゲッター線指数、想定値まで達しません！』

『攻撃が通用しません！ バリアーでもない……未知数の防御が開発されています！』

『この世界には、我々の法則が通用しません！』

『で、敵艦接近……！ ダメだッ、『白い巨人』も接近してきます！』
彼らにとっては信じられない光景。その未知へと彼らは尖兵として一部のゲッター艦隊を差し向け。しかしながら、信じられない光景を目撃する事となった。

ゲッター線の出力が、想像以上に上がらない。

攻撃が全く通用しない。

そして……自分たちの法則とは違う、別の法則がこの宇宙には広がっている。

彼らが居た『ゲッター線の満ちる宇宙』において、彼らはまさに無敵だった。しかし。観測した別宇宙……否、『別世界』において、ゲッター線は確かに強力なれど、絶対強者とはなり得なかった。

敗れたのだ！ 無敵の進化を遂げた筈のゲッター線が！

それは、ゲッター線の満ちる宇宙には存在しなかった、別世界の法則。

『神秘』というたった一つにして、あまりにも大きな法則の壁に……否、『別世界』という存在そのものを、ゲッター線の力では超えられなかったのだ。

……別世界へ送り込む故からか。ゲッター艦隊の全てを送り込むことも出来ない。戦力の逐次投入は、余計に戦力を消耗するばかりだ。

しかし、この法則を克服し、この宇宙での進化を遂げれば、さらに目指す進化へと近づけるやもしれない。故に……彼らは、ある策を講じた。

ゲッター線が、先ずかの世界にしつかりと根を下ろすためのビーコン。旗印。それを探すことにした。現地の人間を、協力者としてこちらに引き込み……そこを起点に、ゲッター線をこの世界に満たす。

ゲッター線は、その可能性を……人々が相争う戦国の世の、一人の子供に見た。

目を覚ます。

体をゆつくりと起こす。腕の傷も、ボロボロになった足も、全てが綺麗に、治っている。だが驚かない。ゲッター線であれば、この程度は造作もないだろう。

「……」

『見たか』

「ああ。見たとも」

『であれば、今こそ空の彼方より、我らの同胞を導く時だ。この世界に、ゲッター線を満たせば、全てを変えることも叶う……分かるだろう』

「そうだな。ゲッター線の無限の進化は、それを果たすに十分だろう」
信勝も、信長も、土田御前も。三人の諍いなど、まるで当然の如く止める事も叶うだろう。それがゲッター線だ。全てを飲み込み、さらに進化する。一つの形へと。

「進化か……」

秀隆には、見える。

一つの形へととなり、そしてその先へと進む人類の姿。
ゲッター艦隊の一つに変わる、この世界の変異が。

いつの間にか、目の前には紙と、筆が一式そろっていた。ひたり、と右肩に帝王断ゴール男の手が置かれた。促されているのだろうかという事

は、直ぐに分かった。

それに従うように、右手に筆を取った。

『形を成すのだ。一つの形を。この世界におけるゲッター線の形を。この世界に形を成せば我々も、神秘に風穴を開ける事も叶うだろう』

――

『さあ、描き上げるのだ。我らゲッター線を。この世界へと下すカギを！』

「お断りだ」

『――何？』

だが。

それは従った故ではない。

秀隆は、先を見たのだ。ゲッター線の満ちる宇宙を。ゲッター線の力で全てを書き換え、終わらせる。それは容易いことだろう。

しかし、それは彼の望む形ではない。

永劫に戦い続ける生命。

全てを飲み込み、進化し続ける形。

それこそがゲッターの本質。

だが秀隆は、それを望みたくも無い。争いを止める為に、さらなる争いと悍ましい進化を遂げる存在を引き入れるなど、本末転倒ではないか、と。

「――貴様らの魂胆は分かった。この世界で敗れ去ったゲッターの力を私に今一度かき集めて、この地へと貴様らを下ろす……ビーコン、だったか？ そうするのだろうか？」

『……』

「そうすればゲッターの力は、私の僅かな問題など解決するだろう……だとしても！」

紙に筆を、振り下ろす。

まるで亡者の如く、救いを求める手を。滅びた亡者共の腕を。絡繰りの腕が、天へと向けて伸びているように、描く。無数に。

その中心に……描くのは。自分だ。

些か面はゆい部分はある。しかしそれでも、出来るだけ……仏画の

仏を意識するようにして描くのだ。自分が、彼らの救い主であるかのように。

「させぬよ。貴様らの思うとおりには……！」

『——ほう？』

「進化をするのもいいだろう。だが、その手綱は俺が握る。貴様らには渡さん！」

自分に向けて伸びる腕。それは、絡みつくように。されど、届かぬように。光に寄り付く蛾の如くに。そんな者共に、慈悲の笑みをくれてやるように、秀隆は悠然と天空に座するのである。

そして……最後、腰に備えた刀を抜き放ち……腹へと、突き刺した。

「——ぐっ」

『何ッ!?』

「……くくく、突き刺して尚、死ぬ気配すらしないか。なるほど、私はいよいよ貴様ら側になったわけだな。だが、それでいい!!」

引き抜いた刀から、滴る血は……錆臭さと共に、何処か、油のような匂いもしている。その血を、指先に垂らして、最後。絵に描かれた自分自身の瞳に塗りこんだ。達磨の目を入れるが如く。赤い瞳を描き入れた。

どくん、と絵から鼓動が聞こえた気がした。

「貴様らの宇宙において、俺は塵にすらならぬ存在だろう。だが……この世界において私を旗とするのであれば、今、貴様らの上は、私だっ！ 貴様らを率いて世界を変えるのは、この私だ！ そのように形を成す!!」

体に力が満ちていく。

それは、あの時。刺客を相手にした時の感覚……しかし、あの時以上の感覚だ。そして侵食していく、というよりは……なじんでいく、という方が正しいだろう。

今や、ゲッター線は、誠に形を成したのだ。

秀隆の描いた絵の如く……秀隆に向けて救いを求める、地獄の亡者の如くに。この世界に於いての形へと。

秀隆は、天上を睨む。そこにゲッターエンペラーは居る。こちらを

見つめている。怒っているのか、それとも……察することは出来ずとも、それでも秀隆は改めて、その両目をにらみ返した。

「人間を、舐めるなよ……ゲッター線！ 貴様らに私は負けぬ！ お前たちを率いて私がこの世界の、全てを変えるのだ！」

始動 失踪

信勝と、信長。

二人の織田家の姉弟の陣營の対立はあまりにも明確なれど……未だ、事は起きず。

即座に戦いを起こすかと思われていた信勝ではあるが、しかし。彼はある意味貪欲であった。より多くの戦力をかき集めながらも、姉とは表立って対立する事をしなかった。

故に、周囲の想像とは真逆。信勝は、未だ信長との決戦の火ぶたを切るどころか、むしろ大つぴらに彼女との友好を深める素振りすら見せるほどだ。

——信勝は、実に貪欲だった。

土田御前が集めた『不穏分子』だけでは満足しなかった。彼は、自分……織田信勝が当主である事を望む人間を徹底的に洗い出した。それは、将来の信長が抱える疵になりかねないのだ。今の内に処分しておくに越したことはない。

故に、更なる人材を集める、と称し自分の道ずれを多く用意し始めた。まともに戦わせるつもりなんぞ元から毛頭ないし、自分が策に嵌めて、姉に始末していただくつもりですらあった。

まあ姉を相手にすればまともに戦っても先ず間違いなく自分達を打ち破ってもらえるだろうが、念には念を入れておくに越したことはない。こういう時は、姉に無駄な手間を取らせないのが弟としての役割だろう。

——しかし、それとは別に、大きな不安が、一つ。

「権六、まだ喜六郎の行方は分からないのか!!」

「申し訳ございませぬ……何分、誰にも知らせる事も出来ず、少ない人手で探さざるを得ず芳しい成果は……」

「ええい、このでくの坊め。下がっていいー!」

信勝が、秀隆を母との会合の場から追い払ったその次の日から、彼

の姿が見当たらない事である。初めは権六が……と思ひ込んだ信勝は、彼の首を刎ねようとすらしめたのだがしかし、信長の城にまでたどり着いた事を、幾人の武将が証言していたことから、間違つて権六が始末してしまつた、という線は消えた。

であれば、一体彼は何処へ行つたのか……姉の元を立ち去つた後は、一向に行方が知れない秀隆を、信勝は勝家に命じて探し続けた。だが、未だ芳しい報告は上がつてきていない。

もつと人員を割きたい所ではあつたが、しかし反旗を翻す、という大それた計画を立てている身の上で、流石に大つぴらに弟を探すのに人員も割けず、しかし探さないといい選択肢はない以上……その結果として勝家にしか事を頼めないという事態になつた。

「喜六郎、一体どこに行つたんだ……」

「信勝様、秀隆様の安否が気になるのは分かりますが」

「うるさい。喜六郎が居なくなつたらどう事になるかわかつていないのか」

秀隆は、土田御前の戦力の一翼として——獅子身中の虫として、だが——周りの諸將たちにも大きく顔を認識されていた。対信長戦ともなれば、勝家に次ぐ先鋒とすら目されていた彼が失踪したとなれば……こちら側はそれをどう見るのか。

「間違いなく姉上側が裏切り者として処断した……なんて言い出す奴が出てくる」

「……それは」

「もし僕たちの側の無能共がそれを信じてのぼせ上つてみる。僕じゃもう止められないんだ。あの人が無責任に集めた奴らだ、我慢なんて利くわけがない」

「ずるずると開戦、等ということになれば……」

「もう計画もくそも無い」

信勝は、決して無能ではない。秀隆という存在の価値を理解している。大前提として秀隆への親愛の情はあるにしても、それに目が眩むような決してない。目が眩むとすれば姉である信長相手くらいだろう。

故に……秀隆の行方を探すのは、決して間違いではない。それでも全てを傾けるわけにもいかないのは分かっている故に、本当に際所で探している。信勝の思う最高を注いでいるのにそれでも手ごたえ一つ無いことが……余計に彼をいら立たせていた。

「だから……喜六郎を探さないとダメだつていうのに……この無能が！ 喜六郎をさっさと探さないとどうなると思つて！ 命かけて探せ！」

「は、はっ！ 申し訳ありません！」

正直に言えば、信勝は自らの足で探したいくらいなのだ。それを抑えて勝家に任せている。最早、信勝の腸は煮え滾る程だ。

「これでもし、喜六郎が大けがでもしててみる……権六、生中な処罰じゃすまないぞ」

「ははーっ！ 必ずや秀隆様を探し出します！」

眼前に跪く勝家に、したうち一つしながら信勝は、窓から外を見つめる。満月浮かぶ夜空を八つ当たり代わりに睨めつけ、ため息を吐く。

弟の安否と、計画のトン挫の可能性に、心を辛くもさせながら。

夜半の自室で。

「……」

信勝は、自分が姉のように、誰も想像できないような事が出来る人間だと思つていない。自分は凡庸な人間だと思つている。誰でもやれる事しか自分は出来ない。地味な事しか自分は出来ない、そう思っている。

こうして政務に取り組む事に、心を落ち着かせるの等、その事をよく表している、と信勝は思っている。

単純な政務、単純な作業。そういうのに『落ち着き』……即ち、安心感を覚えてしまつているのは、それが分相応だとわかっているからだ。姉はこういつた政務に『退屈』をずっと覚えていた。それは、こ

の程度の事は、姉にとっては片手間に済ませられる事ではないからだ。

もつと広く、もつと大きく。天下一つを手玉に取る様な策を。そういったものを練っている時、姉は実に楽しそうに笑っている。

「――喜六郎は」

そんな三人姉弟の中で。喜六郎は、どうだっただろうか、と信勝は考える。

別に姉の様に特別な展望を持っていた訳ではない。だが、秀隆には絵の才覚と、自分や姉以上の腕つぶしがあった。

自分とはまるで似ていない。姉の事を、『ごく普通の』姉として扱っていたのは、喜六郎くらいだろうと思う。

姉と対等な立場でも、展望を持つている訳でもないのに。でも、信勝がそれに苛立ちを覚えたことは一度もなかった。

喜六郎は、姉を馬鹿にしていたわけではない。

彼が見ていたのはあくまで姉当人だ。姉の才能も、夢見る未来も、まるで見ていなかった。彼女がどんなものが好きで、どんな絵が好きで……ともかく、姉個人しか見ていなかったのが秀隆という男だった。

「だからアイツには、何度姉上が凄いんだって言っても『そうですねえ』くらいしか反応しなかったよなあ」

……周りの人間と違う、という点では、姉以上だったかもしれない。他人の思想という物をまるで重視しない。幼い頃は個人だけをずっと見て生きていた気がする。武士として生きるようになって、ようやく多少は相手の才覚とか、どんな事を考えるのかも意識するようになった、程度か。

それでも、基本的には姉の才覚を気にしたことは全くない。

姉の方が優れているから自分より相応しい、とかそういう事を言ったことは一度もなかった。信勝が当主には信長の方がふさわしい、と言っていたから、であればやる気がない人がやるよりは、程度の気持ちだった。

姉弟とは、姉弟として……出来る限り、そう振舞っていた。

とはいえ、公私を混同するような事はあまりなかったが。

「……」

信勝にとって、喜六郎は大切な弟だ。

幼い頃からずっと一緒にいて、自分と姉を、『きょうだい』としてずっと慕って来た。その距離感は、信勝にとっては得難いものだ。

武家の家の嫡男と、長女。才能の無い兄と、才覚にあふれた姉。男子として家を継がせる程に才覚にあふれた信長と、家を任せられない程度の能力しかない信勝。

比べられて、比べられて、そして決して並び立つことだけは許されない。そんな二人をただの『きょうだい』に戻してくれる存在が、喜六郎だった。

信勝は、喜六郎が描いてくれた姉の絵を姉自身に自慢して『なんだこいつ……』的な顔をされる事で、昔の距離を思い出すこともあった。家族思いの弟。

それが、母を切るという覚悟を決めるのに、どれだけの苦悩を経たか。

信勝は、それを必要ないものだと思った。姉の価値にも気づかない無能が、弟の苦悩の原因になっているなど、そんなの許したくなかった。

であれば、姉のお役に立つついでに。弟を助けられたら。それは信勝にとってとても喜ばしい事だ。兄は弟を守るものだから。当然の事だ。

『わたしは……どうしたら……』

あの日、この世界に絶望したような顔を見た時。

弟という物は脆いものだと、信勝は思った。

だから、守ろうと思った。母を切った後、喜六郎がどうなるのか。それを想像もしたくなかったから。しかし……

「何処に行ったってんだよ」

その結果として、喜六郎は、消えた。

信勝は、それがどうしてかは分からない。でも、喜六郎には生き残ってほしいから、今でもこうして探している。

自分は居なくなるから。姉を支えてくれる弟を。

「——ここにおりますよ、兄上」

「っ!？」

その時だった。真横から聞こえた落ち着いた声に、直ぐに顔を振り向かせた。そこに……いる。

ボロボロになった羽織と、そして……赤い布を首に巻き付けて。夜天に輝く満月を背後に背負いながら。

犬歯を見せつけるように、獰猛な笑みと、渦を巻くように揺らめく瞳に光を浮かべながら……秀隆が、立っていた。

訪問

それが、一瞬。弟かどうか……信勝は自信が持てなかった。

大人しい方だった。いつだって表情をはつきり表に出す、そんな人間ではなかった。しかしながら、目の前の男は、違う。

ヒトを圧倒するような、ギラギラとした、自信と熱意にあふれた表情をしていた。表情に脂が乗っている。活力が、口の端からあふれ出して来ているような気すらしていた。

「喜六郎、か？」

「全く、幼名で呼ぶのはおやめください、とあれほど申していますのに……まあいいですけども。入ってよろしいでしょうか。お話があり、お伺いしました」

「あ、ああ……わかった」

「では、失礼して」

一言で表すならばいつも『力強かった』と言えればいいだろう。笑う口の端から覗く、ぬめった輝きを見せつける歯も、こちらを見つめる目の力強さも、真正面から、目の前の人間を丸のみにするような圧力となって、それを肌を感じざるを得ない。

骨格が変わったわけでもない。だというのに、以前よりも一回り程、体つきが大きくなったようにすら感じてしまう。

されども、まるで別人かと勘違いするかのようなその迫力に、信勝は、どうしても眉を顰めざるを得ず……しかしながら。話がある、とこののであれば、それを拒む事はしない。別人ではないのだから。

「よ……っと」

……異様なのは、その雰囲気だけではない。

彼が羽織っている上着の、腹のあたり。そこが、どす黒い赤に染まっている。まるでそこから溢れだしたものが、そこを染め上げたかのように。

何もかもが、以前の喜六郎とは違う……少し身構えながらも、とりあえず、彼の座った目の前に、自分も腰を下ろした。

「……それで、なんだ。話って」

「そう難しい事ではありませんよ。一つ、ご挨拶に伺っただけです……これと共に」

そういつて、先ず秀隆が信勝の目の前に差し出したのは、一枚絵。そこに描かれていたのは……実に、艶やかで、しかしながら、格好良い女性の姿。

片目を隠すほどの長い髪と不敵な表情、肌に張り付くような奇妙な服と、そして大きく広がる派手で外連味に溢れた……蓑、とは大きく違う、ばさりと広がった大布。

そして、周りに燃え立つ、焰。

信勝はこの人物を見たことがない。だが……この絵の構図は、脳裏に嘗ての光景を思い出させた。

「これって、姉上……か？」

そう。焰の中心で、不敵な笑みを浮かべ、そして座すその姿は、正にかつて、秀隆が描いた信長の一枚。信勝が、秀隆に頼んで描かせたあの一枚。忘れる訳がない。大きく変わっているがしかし、本質は変わっていないような気がする

「ええ。久方ぶりに描き上げました所、私の思った以上の会心の出来になりましたので。せっかくなので兄上に、と」

「そ、そうか」

そう口にする秀隆を、信勝は改めて見つめ直す。

これを描くために失踪していたのか。と、口にしようと思ったが、しかし、それをすんでの所で堪える。そんな訳がないのは、流石に分かっているだろうと。

今の秀隆に、信勝は得体の知れなさを感じている。昔の、絵を楽しんでいた頃の秀隆のようで、しかしその時とは明確に違う、この異様な雰囲気。

それを聞き出したかった。

「……なあ、喜六郎」

「はい」

「今まで、何処で、何をしてたんだ？」

「少しばかり、準備をば、しておりました」

「準備？」

「ええ。準備でございます。やりたい事が出来ましたので。その下準備を……話というのはその事でございませうれば、手間が省けましたな」

はっはっはっはっ。

秀隆の笑い声が、堂々と部屋の中に響き渡る。

あまりにも快活で、そしてあっけらかんとしていて。先日までの様子とはまるで違う。

母を切ろうとしていた時の、鬼気迫る表情とはまるで違う……肩の荷を下ろして、軽くなったその軽さを、楽しんでいるかのような。そんな気軽さがある。

「……」

「おっと、これは失礼。喧しかったですかな？ いやはや、ここまで大口開けてわらったのも、割となかったもので。慣れませんなあ」

「……下準備って、何のための下準備なんだ」

「ああいえ。ちよつとした独立の準備でございますよ」

——そんな気軽さで言われたものだから、一瞬聞き間違えたのかと思っただ。

「えっ、ど、独立？」

「はい。あ、とはいえ、姉上に反旗を翻すつもりは全くございませんよ。そこはご安心いただければ。私もそこまで恩知らずではありません」

「あ、は？ え？ あ、そ、そう、なのか……？」

一瞬、信じられない事を言われたような気がしたのだが、さらにその直後に言われた事で、心がぐらつぐらに揺らぐ。独立、という言葉が、今、信勝が置かれている現状では欠片も洒落にならない響きをもっているのを、目の前の男が理解していない訳がない。

それを、まるで気軽に口にするのだから、信勝だとして一瞬弟の正気を疑いそうにもなるが……しかし、それをまるで気にしている様子もない。

「ええ。独立とは読んで字の如く。我が身一つで、戦国の世に立つて

みたく思いました」

「そ、そうか。えつと……姉上に、報告とかは？」

「ああ、それはこれからするつもりです。流石にしないまま出奔というのも、些かに不義理ですから」

とはいえ、出奔という言葉を気軽に口にしてしているのも中々の話だ。家に仕え、そして当主の為に忠義を捧げるのが武士の本業、誉であれば、出奔という言葉には、相当に重い意味がのしかかってくる。

「あ、姉上に不満があるのか？」

「そのような。私にとっては自慢の姉上です。むしろ、お仕えしてその覇業をお支え出来るなら、それは私にとっては幸せですとも」

「じ……じゃあ、なんで出ていくなんて!!」

事ここに至って、ようやく信勝も気持ち追いついて来た。

急に出奔する、等と。無責任にもほどがあるのではないか、と感情が爆発した。その感情のままに、ついになりに立ててしまったが、しかし秀隆は飄々とした態度を崩したりもしないまま。

目の前の秀隆の様子が、あまりにも落ち着行き過ぎているのが、信勝にとっては違和感でしかないのだ。失踪なんてして、出奔なんて言い出して。あまりにも無責任な事を言っているというのに。申し訳なさも浮かべない。

信勝の知っている真面目さは、何処かへ行ってしまった様に。

「しかし、やりたい事が出来てしまったのでしかたないのですよ。いや、本当に」

信勝の剣幕など気にも留めず。彼は信勝から目を逸らさず、ニヤリと笑いすら返す。

「なんだよっ！ そのやりたい事ってー！」

「——この世界というのはね、兄上、どうにも……不条理なものですなあ」

気にも留めていない……というよりは。焦っている幼子を見ているように、暖かく見守っているようだ。だからなのか、彼は、信勝の目から、目を逸らさない。ずっとずっと信勝を見つめている。

「皆が誰かを自分なりに愛して、しかしながらその結果争いは止まら

ぬ」

「……何の話だ」

「今の話です。人の愛という物の、今の形の話をしておるのです。ここ最近、私はソレを嫌というほど思い知りましてねえ。いやあ、まこと、この世は、地獄、修羅の巷!!」

「だから、それがお前のやりたい事に、関係してるっていうのか!」
「大いに!」 兄上が、姉上と争い、母上が姉上を殺そうとし……姉上が兄上の頼みで当人の命を諦める! そんなものを私が許すつもりはない!」

互いに言葉を交わし、信勝は怒りと戸惑いで言葉を吐き出す。しかしながら……目の前の秀隆は、そんな劍幕に全く揺らぐどころか。笑顔すら浮かべて、此方を見つめ。

「だから——殺さなくていいようにしようかと思えます、はい」
「っ」

そこで気が付いた。

自分を見つめ直すその瞳の奥底に、翡翠の光が揺れている。まるで湖面の揺れに光が形を如何様にも変えているかのように。

けれども。瞳の奥に差し込む様な翡翠色の輝きは何処にもなく。

そして揺れる、というよりも。まるで、それは、蠢いているかのような。

まるでその形は……二つ角の大鬼を、形どったような——

ギロリ

その何かに、睨まれた、気がして。

一瞬、一歩、下がりそうになって。

「……殺さなくて、良いように?」

「ええええ。後は私にお任せいただければ。織田家も、兄上も、姉上も、母上も、勝家殿も皆、皆、皆、私が悪いようには致しませぬ。それだけを、お伝えしよう」と

そこに付け込むかのようにならず、と一歩前に進み出る秀隆に……信

勝は、なんとか引かなかつた。秀隆の目を見返して、口を開いた。「出来るもんか。僕の弟の癖に、そんな事。僕に任せておけばいいって言っただろ」

「確かにあの時は無理だったかもしれませんが……今は、酷く体の調子が良くて。やれる気がするのですよ。未熟者の、弟でも」

互いに鼻を突き合わせる様な距離で。

呼吸が聞こえるような距離で。

信勝の様子は、寧ろ秀隆にとって想像通りだったのか。彼はむしろ、その笑みをより深くそして、より迫力のあるものに。

威嚇するかのように歯を見せて、瞳の内は開き切り。信勝を見ている。

威圧する、というよりは……心の内から、感情が溢れだしている様な。そんな。

「大体、お前をこのまま返すわけないだろう。人を呼んでやる」

「それは困りますなあ。姉上の前に引きずり出されてお説教など、とてもとても」

「うるさい。黙って兄貴に従え、喜六郎」

「そうは参りません——今宵は、これにてっ!!」

直後、秀隆が視界から消える。否、後ろに向かって思い切り飛び下がったのだ。その動きに信勝の目では追いつけていないのだ。

驚いた。胡坐をかいたあの姿勢から、ほとんど大きな動きを見せる事もなく、しかも後ろに向かって跳躍し……もう既に部屋の外に堂々と仁王立ちしている。人間の動きではない。猿の化け物かと思紛うほどだ

しかし、驚いて口を開いている暇はない。急いで追いかけた信勝はその先で……見た。

庭の木の枯れ枝、そこに片足でひよいと立つ秀隆の姿を。

「な——」

あははははははは あははははははははっ

両手を大きく広げて、天を仰いだ秀隆の哄笑が、満月の元に鳴り響く。

「それでは兄上、何れ私の夢の舞台にて！ その時は見せましょう、私の夢の果てを！」

そして、もう一度。ぴよい、と軽く……高く、高く跳躍し、塀の向こうへと秀隆は消えていく。

狐に化かされているのか、と思い、とつさに指先を、かみちぎった。血の味と、痛みが確かに信勝の頭に響く。

夢でも、幻でもない。

何かが、水面下で動き始めている。

喜六郎が何かを起こそうとしている。

ぎり、と歯を食いしばってから、踵を返す。急がねばならない。勝家を使者として向かわせてから……姉の、信長の元へと。

秀隆の異変。解決できるとすれば、信長以外に、信勝には思い浮かばなかった。

会談

様々な軋轢があるのは、信勝とて分かっていた。

しかしながら、それでも尚、彼の来訪から一晩も、姉との会話の機会を待たねばならなかったのは、信勝にとつては凄まじい苛立ちを覚えざるを得なかったのだ。

繰り返すが、二人の立場を考えれば、これでも早かった方だろう。信勝の速攻の動きと、信長の即断即決があつてこそその電撃的な会談である。

当然、双方の陣営から見れば、すわ何事かという話だ。

特に信勝側からしてみれば、開戦の合図かと勘違いされかねない程の。

しかし此度の会談は、そんな雷の如き速度であつても、信勝にとつてはそれでも遅いと言わざると得ない事だったのだ。真に私的な話であつても……信勝にとつては家の一大事にも匹敵する程の出来事だったから。

「――失礼いたします！ 姉上！」
故に。

姉の部屋、そこへと向かう足取りは荒く、兎も角急ぐ気持ちに任せたものになり。無礼と諺られても文句をいう事は出来ない事を承知で、それでも彼は部屋へと乗り込んだのである。

そんな信勝に、くるりと胡坐のまま振り向いたその顔は、への字口。一見しても、あまり機嫌がよさそうには思えない。

反旗を翻そうという側の頭と、現体制の当主。それがこうして当主の自室で顔を突き合わせる。それが、いわば敵対している者同士の腹の探り合いとも取られかねない行為であるのである。そこに、一見して喧嘩腰と取られかねない程の剣幕の信勝が乗り込んだ。

そんな表情をされても仕方ない、むしろ当然だとは思ふ。

「火急の要件故、無礼とはわかっていますが……申し訳ありません」

「貴様が、俺に対して、無礼と分かっているながら、か」
だが。

それでも——と、信勝は躊躇わずに踏み込んだ。

「なるほど。それ程の事態という事だな。良い、話してみる、信勝」

「はっ、ありがとうございます！ 先ず——」

信勝は、迂遠な表現など使わず、率直に起きた事を告げた。

行方不明の秀隆が突如として、自分の元へ戻ってきたこと。その秀隆が……異常な様子だったこと。そして彼が告げた、『舞台』や『夢の果て』等の、不穏な言葉の数々。

出来る限り率直に、自分の見たままを。

信長は、信勝が出来るだけ正確に伝えようとするその言葉を、黙つて、聞いていた。

への字口を、少しずつ。正しながら。

「……なるほどのう。人間の動きではなかった、か」

「はい。以前の秀隆とは、全く別人の動きでした」

「幻を見たわけではないと？」

「僕しか見てませんでしたけど……ですが、アレは、幻なんかじゃありません。本物の秀隆でした」

「ふむ……」

そして最後には、真剣な顔になって信勝の話聞き終えた後……信長は、ゆっくりと立ち上がって信勝に背を向けた。

「姉上。秀隆の様子、尋常なものではありません……」

「行方を捜すのに、力を貸せ、と？」

「……利が、無い訳でもありません。ですけど、それ以上に、心配なんです。喜六郎の様子が。全然、今までの喜六郎と、あまりにも違つて」この様な事を、姉に頼んだ事は、信勝にはない。

自分の様な男が姉に頼み事、等という大それた真似を出来るわけがない。ずっとそう思つて生きてきた。ずっとだ。

だが最早そのような私情を優先するべきではない、と思つた。初めての事だ。弟の為に信勝は、姉の目の前に立つて、姉に言葉を尽くして、頼んでいる。信勝にとってあの秀隆の変わりようは、それ程の衝撃だった。

穏やかな雰囲気、頑張つて絵を描いていた何時もの姿から、ああ

して何者をも飲み込むような迫力を身にまとい、そして軽々と枯れ枝の上まで跳ね、そして容易にその上に立つ異常な身体能力を見せる。あの変わりようは異常だ。何者かに取り憑かれた、と言われても決しておかしい話だとは思わないだろう。

「姉上……」

「ふむ」

しばしの間、無言の時間が続く。

現状、自分の言が聞き入れられる等、先ず無理な話だという事は分かっている。

反乱の一件。姉に報告していることもあって、気を張っている所だというのに、それに加えて秀隆の事など……自分でどうにかしろ、と言われても全く不思議ではない。普通に考えれば、そういう事だ。

だがそれでも今回の一件。だから、放っておく。それでは、駄目な気がする。このまま放っておけば……何か、取り返しをつかない事になると、そう思ったのだ。

「……そんな不安そうな顔をするな。探さないとは言っておらんだろう」

「えっ?」

「お主が思っておるよりも、この一件は実に面倒な事になっている。秀隆がそちら側の人間であるとか、そういう事だけではない。まあ、理由はある」

「それって……」

「秀隆の行方は探すという事だ。とはいえあまり人員は裂けんがな」

——あまりにあっさりだった。

信勝としては、正直断られる可能性もあると思っていた。いかに弟とはいえ、秀隆が一家臣である事は間違いなく。当主の立場もある。出奔する等と言った、たった一人の家臣を探すのに、どうしてそう簡単に首を振れるだろうか。

それが、こんなにあっさりとは。

「あ、ありがとうございます! 姉上!」

「……とりあえず今は下がれ。探すにしても、今からという訳にもい

かんだろうしな」

良かった。

手に籠っていた力が、すうっと抜けていくのが分かる。自分だけでは、今の秀隆を連れ戻す自信がなかった。

だが、姉が居るなら百人力どころか、万人、文字通り一軍が味方に付いたかのような力がある。とてつもなく心強い。

姉上を味方につけると気が大きくなるのは、些かと小物臭い気がしないでもないけれども、等と、自分でも思うが。

「全く……喜六郎の奴、変に驚かせて……でも、もうこれで大きな顔はさせないぞ」

「……」

「直ぐに連れ戻してやるから、覚悟しろよ！」

意気揚々と出て行った信勝を見送ってから、信長は一つ溜息をついた。

それから……自室の窓に、視線を向け直した。

「んで、どういう気分だ。自分自身の話を目の前でされて」

「想定通りではあったので別に。とはいえ、異常だとか言われるのは些か以上に悲しくはありますが。私、そんなおかしな事になってますかねえ」

開いた窓より、ぬるり、足から入ってくるその影は……誰であろう、弟とここで話していた件の人物、秀隆である。ずっと屋根の上で、話が終わるのを待っていたのだろう。

彼が、ここに何時からいたか、と言えば。

「なつとるな。ちよいと前までは若武者、今は落ち武者の亡霊ではないか」

「ちよおつと心外すぎますが……」

「それに、俺の自室に、一切何者にも気取らせず入り込むとか、まあ随分だぞ。警備って何か知っておるか？」

「それは警備の皆様がすっかりとしていないのが問題かと」
初めから。

信勝がここに現れる直前。秀隆は、突如としてこの部屋に入り込んできた。それも、風を入れるために開けていた窓に、いつの間にか腰かけてながら、信長に語り掛けたのだ。

今から兄上が来るので、きちんと話を聞いてあげてください、と。自分で説明するよりも、信勝にそのままを説明させた方が手っ取り早いと思っただのか。それとも別の思惑があったのか。ともかく、目の前の弟は、カラカラ笑いながら、改めて部屋の中に降り立った。

「いやはや、それにしても姉弟仲良い事は、良き哉、良き哉」

「茶化すな。お主、一体何に魅入られた」

「――」

その様子に、信長は一切動じない。信勝に言われた通りの姿であるからか？ それもあるが根本的な部分は違う。信長には、ある一つの心当たりがあった。

秀隆の今の目は、そこに宿る翠の輝きは……信長には、見覚えがある。

彼は昔から、時折空を睨んで周りが見えなくなる時がある。

その時、彼は空模様ではなく全く別のモノを睨んでいたらしいのは、信長も薄々ではあるが気づいてはいた。

今の彼の目に宿っている、翠の輝きは……その時のモノだ。

天の彼方を睨みつける、その時、ちら、と秀隆の目に一瞬、輝いていたその光だ。

「……誤魔化せませんなあ。くくくくくつ」

「否定はせんのか。魅入られているというのは」

「ええ。いつもそれくらい心の構えでいなければ飲み込まれますから。考える事、心を強く保つ事、自覚することは増えました」

それは到底、魅入られた者の口ぶりではない。

本当に魅入られた者は、それを口にしないものだ。自分が何をしているのか、わからない者すら多い。それこそ、自らの思考を停止させる。

しかし……秀隆は、どうやらそうではないようだ。

信勝の言う通り。その目には確かに『理性』という物があつた。翠の光と共存するように揺らめく、確かな理性の輝きが。

「姉上。私はね、別に姉上たちと敵対するつもりもないのですよ。それは誠にそうです」

「出奔して独立する弟がそのような異様な雰囲気を漂わせながら『夢の果て』とか言い出さねば、信じてやってもいいのだがな？」

「くくっ、これは手厳しい。しかし、争う必要もない相手と、どうやって戦えと」

「……何をしようとしている？」

「変革を。我が身に宿った……否、我が身そのものとなった、この力によつて」

その光を宿したままに。

熱に浮かされたようでもなく。何かに背を追われ焦るようでもなく。現実から目を逸らして理想ばかりに目を焦がしているようでもなく。

信長の目を、真正面から真つすぐに、見つめて。

「身の丈に余る力ではありません。しかしながら、そうでもしなければ変えられぬものもありますので」

「自分で言うか。身の丈に合わぬと。であればやめておけよ」

「いやです」

厄介だと思う。こういう手合いが一番。

自分の身の丈に合わぬ、というが。力など皆初めはそんなものだ。その力をどうやって使いこなすかは、先ずそれが『自分の身の丈に合っていない』と自覚する所から始める

その点、目の前の弟は、自分に宿る力を正確に測りきっているように見える。

身の丈に合わぬ、得体の知れぬモノ。されど、それでも目的の為にためらいなく踏み込んで使う。

「私はね、姉上。許せないのですよ」

「何をだ？」

「時代が」

「時代だと？」

「ええ。誰かへの思い……それは、忠義であり、家族愛であり、この世全体への憂いでもある。その結果として、一体どれだけの人が、これから死ぬというのか。これから時代はさらに加速する」

そして——何よりも。

「そのきっかけは、貴女だ。姉上」

「——俺だと？」

「そう。私はソレを望まない。だから——決めたのです」
信長には、何となくわかるのだ。

今日の前で、地球儀をそつと撫でる男。この男が……

「この、世界を。人という種を。私は変えるのだと、ね」
自分より、数段『先』の未来を見ている事が。

機兵

ぎぎぎ　ぎぎぎ　ぎ　ぎぎぎ

暗闇の中に、耳障りな軋みの音が響く。

それも、一つだけではない。色々な所から、ぎぎぎ、という音が響いている。彼らに不満はないが、この騒音だけがたった一つ、玉に瑕だな、とは思っている。

暗闇の中を徘徊するモノ共の正体をしっている彼からすれば、それも多少は仕方ないかとは思いたい……それにしても煩いと思うのを、止められないくらいには、この音は耳に障る。

目の前に広げてある自分、織田秀隆の最高傑作になる一枚を描き上げるには、彼らの助けは必要不可欠なのだからと、慣れようとはしている。

秀隆は、今、誰も味方は居ない。織田家からたつた着の身着のままに一人飛び出して来たのだから当然と言えば当然ではあるのだが。

その味方の『代わり』を務めるのが、周辺の存在だ。

ゲッター線、と呼ばれるモノの試運転代わりに彼自ら用意したそれらは、想定していた通りの水準を何とか満たしている。本来はきちんとして『三人』そろわねば力を発揮できないらしいのだが、そんな化け物じみた性能を発揮されても逆に困るので、秀隆にとってはこれで問題はない。

それにしても、もうちよつと音とかその辺りが何とかならないのかとは、繰り返し繰り返し思うが。

『――戻ってからというもの、筆が進むな』
さして。

そんな秀隆にとって、味方、とは呼べないが、話し相手位なら、未だに一人いる。

背後に浮かび上がるのは……蜥蜴男。否、正しくは、ハチュウ人類の帝王、ゴール。ゲッター線からの使者は、その口元の笑みを耐えさせないままに、ゆらりと秀隆の背後にゆっくりと立った。

『順調そうではないか』

「絵で手を抜くような真似はせん」

『くつくつくつくつ、そうか。であれば、これの完成は楽しみにして良いのだな』

「まあ、流石に墨のみで描いたからな。元のそれとは迫力も何もかも違うものになるだろうが、私に力を馴染ませる楔としては上等なものになるだろう」

本来、この世界にゲッター線を満たす、その旗印として秀隆を立てる為に、ゴールはここに降りてきた。

しかしながら、秀隆がゲッター線の意味に反し、この世界に於いてのゲッターの主導権を握ってしまった。その時点で目論見は失敗、彼は二度と姿を現さなくても、不思議ではなかった。のだが。

ゴールは、秀隆に『貴様の『進化』の形を歓迎する』とだけ言っていて、まだ彼の傍にいながら色々と喋り相手になって消える、という事を繰り返していた。

ゲッター線にとって、秀隆が自分の意思で改めてゲッター線を『掌握』した事は驚くべきことではあったが、しかし忌むべきことではない、とのことで。

それも、彼らにとっては喜ぶべき進化、なのだという。

『今でも十分体に馴染んではいる。焦らずとも好いのだぞ?』

「私がのんびりやるつもりなら、それでも良いのだがな。あまり時間はない。先ず織田家との決着を早々につけ、日ノ本を平らげなければならぬ」

『それから世界か』

「ああ……姉上の中の『魔王』は、まだ目覚めていないのだろうか?」

『奴が弟を殺した時、間違いなくその時が、目覚めの時だ』

「であれば兄上が殺されるまでが、タイムリミット……だったか? それだ。そこまでに体に力を馴染ませなければな」

最悪、この世界に於けるゲッター線の主導権争いも辞さないという覚悟を決めて、あの啖呵を切ったところだったというのに……ゲッター線の懐、というのは、彼には凶り切れぬ程に深く、底が見えない。

とはいえ、その幸運を見逃す秀隆ではなく、彼はこうして、隠れな

がらも着々と準備を整えている。進化を司り、そして創造の力すら秘めた、生きたエネルギー……ゲッター線という物をその手で操る、その感覚を掴むためにも。

「本来のゲッター線の力はこんなものではない」

『ああ。お前が操っているのは、この世界で敗れた者共、いわばゲッター線の残骸』

「それでこれなのだ。今のままでは不安にも思う」

『貴様の進化を卑下するな。我らの宇宙とて、生身でゲッター線を操れるまでに至ったものはそうはいない』

「何人かは居るのだろう。全く化け物しかいないのだな、そちらには」
秀隆にとつて、ゲッター線の理解と、より深くそれと繋がる事は急務だ。だというのに下手をすれば飲み込まれかねないその力に、日々、精神をすり減らしている部分はあるがしかし。どうにもこれが楽しいと思ってしまうあたり、最早精神も、背中のハチュウ人類と同じ所に行ってしまったているとは自覚している。

それに、それくらいの精神でなければ、彼が目指すその先には当然辿り着きようもないだろう。

『貴様が目指すのは、その化け物共のいるところか？』

「……そうだな」

多くを、見たのだ。

ゲッター線と共に永劫に戦う者。ゲッターという存在を解き明かそうとする者。ゲッターに抗い戦い続ける者。ゲッターに取り込まれて一つになる者。凄まじい、ゲッターに関わった者達の運命。

彼らは、皆、強かった。今の秀隆など足元にも及ばぬほどに。肉体も、心も。

彼らの様にならねば、先ずゲッター線を御すことなど土台無理だろう、と。そして。その上で。

「——とはいえ、化け物では、私にとっては足りない」

彼は、それを超えると口にして見せた。

『ほう……』

「私がこれから相手にしようというのは未来において『魔王』と呼称さ

れる程の名君の卯だ。不可侵の寺を目的の為に焼ける様な、神仏衆生の仇を相手に、たかが化生一匹が太刀打ちできようか」

『——くくくつ、頼もしい事を言う。実に進化に貪欲ではないか』
「貴様らに毒されたのやもしれないな」

彼が先ず、目指すのは……『第六天魔王』の運命を打ち砕く事。

兄を殺し、日ノ本に天下布武を示す、織田信長の物語。そしてその先に行く、物語。別たれた日ノ本を一つに束ねる日輪の如き黄金太閤へ、そして日ノ本の戦乱の時代を終らせる征夷大將軍たる東照大権現にて結ぶ、戦国の物語。

——そもそも、その、始まりの一点から潰す。

「貴様らには感謝しているよ。こうして毒してくれたことを、な」

『感謝などされる事ではない。貴様が進化し、そして己意思で時代一つを平らげようとしている事。それは、ゲッターにとって歓喜すべき『強い意志』、『先へ進む意思』だ。ゲッター線は、決して歩みを止めぬ人間をこそ歓迎する』

「そうか……うむ、そうだな。歩みは、止められん。歩みを止める暇はない、やるべきことはその先にも山積みだ」

しかし。彼にとつては、それすら、己の夢の果てに向かう一歩にしか過ぎない。姉と兄を抑えて、さらにその先へ——天下を一つにする事で、先ず秀隆の野望への足掛かりはようやく出来上ると言えるのだ。

「それら全てを成し遂げるには……文字通り、世界を救い魔王をも越える、『救世主^{メシア}』にでもならねばならんか」

『——ゲッター線を司る者が、救世主とは。最も程遠い存在ではないか』

「ゲッターは力だ。それをどう使うかは、我々次第という話だ」

ゲッター線は、悪である。そう捉える者もいるだろう。

しかし、神を越えるか、悪魔をも滅ぼすか。力をどう使うかは、結局のところ自分で選ぶしかない。

自らが磨いた武術を、恩人の母に向ける事を選択したように、いつも正しく振るえる訳でもないだろうが……それでも、正しく振るうよ

うに、気を付けるようには出来るだろう、と秀隆は考える。

ゲッター線は意志ある力。されど、それに取り込まれぬように努め、そして抗う事も人間には出来る。ならば、ゲッターの力を用いて『善』を成すことも、出来るだろう。

「——む？」

『どうした』

「いや……どうやら、哨戒に出していた『2』タイプが発見されたようだ。向こうは恐れをなして逃げて行ったらしいが。これでそろそろこちらの居場所も割れるか」

——まあそれも、きちんとゲッターの制御が出来てからだ、とは思うが。

「こうなればこちらも急いで準備を進めねばならんか。全く、結局は完成は間に合いそうにないか」

『勝ち目はあるか？』

「どうだろうな……私自身で繰れる力には限度がある。それを踏まえて、まあこちらの戦力は三種それぞれ三体ずつが良いところだが、さて」

立ち上がり、周囲を見渡せば……暗闇から、姿を現す影が。

現れたそれらの影は……どれもこれも、人並みの大きさだが、人間ではない。大柄で剛力使いと見える者、細く両腕が異形な形をしている者、背中にマントらしいものを広げる者、おおよそ三種類に分かれている。

その何れも……体の何れかが欠けて内部の機械部品が露出している、『不完全』な印象を受ける者ばかりだ。

「私のゲッター軍団の初陣、如何様なものになるか、とくと御覧じろ」

ぎぎぎ　ぎぎぎ　ぎぎぎぎぎ

秀隆の言葉に応えるように。機械の兵隊達が唸り声を上げる。

彼らの姿を見て……ゴールは、ただただ、不気味な笑みを浮かべるばかりだ。

化生

——木々の合間、木洩れ日を見上げながら、大きなため息を吐いた。一軍を率いて、領内に巢食う悪漢共を成敗したようにはとても思えない。そんな陰惨な面を周りに晒している。その自覚は、信勝にもあつた。当然ながら。

周りの兵たちが、何処か不安げなのも、分かっていた。大将がこんなザマなのだからそうなるのも当然だと思つた。

「——信勝様」

「うるさい。分かつてる。分かつてるから、ため息の一つでそんな——」

「いいえ、そろそろご休憩なされた方が……賊共を打ち払ってから、ここまで歩き詰めでございます。兵の疲労も溜まってきているでしょう」

ちら、と隣の大男——勝家に視線を向ける。

彼の視線に一切の悪意らしきものは感じられない。真つすぐな目だ。もう一つ、ため息を吐きそうになって、しかしすんでの所で堪える。

任務に忠実なこの男が、主人に嫌味を言うだとかそんな真似が出来るわけがない。

心の乱れが、思考する余裕を奪い、ひいては周りを見るだけの余裕をも奪っている、と改めて自覚した。

「……分かつた。良きに計らえ」

「承知——皆の者！ 一旦足を休めるぞ！」

取り敢えず、一旦心を落ち着かせるために一つ息を吐いて……それから、勝家に任せる事にした。自分よりも出来る人材がいるのなら、それに任せるのが一番いい、と。というより、今の信勝に、他の事を考えるだけの余裕がない。

そもそも話。

賊を倒した、と言つても当然ながら勝てる勝負をしたただけだ。食い詰めに食い詰めて追い詰められた罪人とは、装備の質に、人材の質も

何もかもが違う。更にこちらには一騎当千の武将が一人。

自分が何か余計な言葉を差し挟まずとも。雑に片付けられた任務だ。

というより、自分がそんな様だったから。この程度の事しか出来なかった、というしかないだろう。

「信勝様……」

「——ああ、畜生」

結局。

進展していない状況に舌打ちをするしかない。

秀隆を探し始めてから、全く捕まえられぬこの状況。無常に過ぎる時間に、当初の余裕など、既に何処かへと過ぎ去ってしまっていた。

探したのだ。

『まだ秀隆の奴めは、領内にいる。兎も角領内の中を絞って探せ——もし領の外へ逃げ出して居れば、どうせ捕まえられんしの』

姉、信長の言う通りに。

姉上が言うのなら、きつとそうだと信勝は思った。だから他に何も考える事も無く、只管に探した。何も考えずに探した。領内を駆けずり回って探した。

自分の持てる手段を持って、探した、つもりだったのだ。

何処にも。何処にも。何処にも。

いない。影も形も見つかからない。領民も。尾張織田家の家臣も。果てには先ほど討ったような賊にすら話を聞いた。二、三人に話を聞いてしまいにしたわけでもない。領地の端の住民、三河から流れて来た商人にまで話を聞いた。のだが。

まるで。誰も彼も口をそろえて『その様な男は見えていない』というばかり。なにか別の人物を見間違えた、だとかそれすらない。まるで、霧の如くだった。

あの日、自分の元からあつという間に消えて見せたように。

今度はこの世からも全くもって消えて見せた、と言わんばかりに。自分の手で手探りしようにも、そのとつかかりすら今は見つけられない。

勝家も、放った細作も、哨戒の兵も、全くもって何か成果を持ち帰ってはこない。その度に怒鳴りつけもしたが。しかし。

ここまで全く手ごたえが無いとなると。

姉上の予測が、間違っていたのだろうか、とすら思ってきてしまう程に。

いいや、と。それでも信勝は自分の弱気な心を否定した。姉上の言う事が間違っている訳がないと強く否定した。自分の努力が足りないのだと、否定した。

であれば、自分の手際があまりにも悪いせいだ。自分が無能なせいで、信長の足を引っ張っているのだ。そう信勝は考えざるを得なかった。

それを思うと。信勝は今、目の前にある森の木の本に、頭を叩きつけたくもなつて来ている。全くもって。こんな体の上に乗っているだけの頭なんて、砕き割ってやればいいと思ってしまう。

こんな自分だから、無能共と一緒に消えようと思ったのに。

それを忘れて、姉上のお言葉に従えば、見つけられると思っていた。姉上のお力を借りても尚、自分の無能ぶりは補いきれない。それをどうして忘れていたのか。

そんな有様で、喜六郎を探し出せるのか。

「……」

「信勝様、そう気負わずに」

「気負わずに、だと？」

その不安が。自分の無能さ加減が。出来の悪さが。

信勝を今、明確に苛立たせて――

「そんな訳に行くか。僕の無能のせいで……どれだけ」

「しかし、焦ったところで、秀隆様が見つかる訳でもありませんし」

「――っ!!」

一瞬。

目の前が真っ赤に染まって。気が付けば、信勝の手は、刀を取って、その切っ先を勝家の眼前へと突き付けていた。

構えている訳ではない。ただ抜いて、突き付けただけ。剣術としてはお粗末極まりないし。本気で刺そうとしても、容易に勝家ならば止められるだろう。

そんなひどいへっぴり腰の刀が向かってくるのを、勝家は、目の前に跪いたまま、まるで避けようとしなかった。

「——っ！」

「落ち着いて下され、信勝様」

気を遣われているのは、直ぐに分かってしまう。普段の勝家ならば、自分に余計な事なんて言わず、大人しく待っている——だが今、自分を見ているのは、普段の見かけの割に肝っ玉の小さい木偶の坊ではなく。織田家最強格の猛将、柴田勝家だ。

大将の動揺は部下にも伝わる。それを分かっている。ならば、それをどうにかする為に怒りのはけ口の一つでも用意して見せた。

「……」

「見つける前に、潰れるのは本望ではありませんすまい」

「そんなの……言われなくても、分かっている」

その気遣いは、分かる。だが、だからと言って焦る思いを止められる訳ではない。

……喜六郎の変容を、姉以外の誰かに話せている訳ではない。姉にも話す事は出来たがしかし。実際に見ていないのに、あの『感覚』を理解しろというのは、難しいという事は自分でも分かっている。

この胸の内の、『理由のない焦燥感』を理解できているのは、信勝只一人なのであって。彼が、自分の手を離れて遠くに行ってしまうような、そんな不安を持っているのも、自分一人なのだ。

あの日。目の奥に感じた光は、まだあの瞳の奥で揺らめき、息づいているのだろうか。いや寧ろ……更に大きく、膨らみ、育ち、彼の中から孵化しようとする——

「——っ！」

嫌な想像が、頭を過って、頭を振った。

兎も角、信勝の焦燥感は見つからない時が長くなるたびに、膨らんでいく。喜六郎を一刻も早く捕えなければ、何か恐ろしい事が起きる気がする。人一人をあそこまで変えてしまう様な、何かを、感じている。

「……分かった。取り敢えず、今は無事に帰還する事を優先する。それでいいだろうが」

「お聞き入れ下さったこと、ありがたく」

勝家の言う通り、無為に焦っても仕方ない。とはいえ。この焦りを忘れることなど到底できない。のんびりとしていて、取り返しのない所まで行ってしまったら。後悔等してもしきれない。

せめて、せめて何でもいいから。切っ掛けを手に入れたい——どうすれば良いのか、と思考の沼に自ら身を沈めようとした——その時だった。

「——だから、嘘じゃねえよ！ 今、しよんべんしに行つたときに見たんだよ！」

「嘘とかじゃなくて、分からんって言つてんだ！ なんだよ、腕から槍の生えた化け物つて。聞いた事もねえ」

「だから、そのままなんだつて！ 馬鹿でけえハサミと槍を持った……ともかく、人間じゃねえ！ アレは、人間じゃなかった！」

その声からは、思考の沼に取り込まれそうだった信勝の視線を引く程には、緊張感と、恐怖を如実にその内から滲み出て来ていて——振り向いて。

怯えている男の指さした先には、深い深い、森の緑が見える。そこで、彼は『何か』を見たのだという。

ここで、信勝が、下らぬ与太話と切り捨てて、無視するのではなく『話を聞く』という選択肢を取つたのは。

ある種の直感……という訳ではなく。

今現状、どんな情報であっても、信勝は欲していたのだ。

何か異常な物を見た、というそんなでたらめな言葉にも、僅かでも真剣味を感じられたのなら、彼は縋りたくなつていて——

「——あ」

その時だった。

森の奥に、何か、銀色の輝きを見た気がした。

その直後——飛来した何かが、自分が今、向き合っていた木に、突き立ったのだ。振り返れば、羽が所々破けた、質の悪そうな矢が一本。呼吸が一瞬、浅く、早いものに変わって——

「——敵襲ッ!!」

空間に響く声に、思わずしてハツとする。

それに反応したのは、勝家の方が早かった。刀を抜き放ち、大声で全体に警戒を促し自らも、木々の向こうに向けて、切っ先を向けた。打ち払った賊とはまた別の一党か。森の奥で未だ見えぬが……しかし、聞こえてくる雄叫びを聞く限り、間違いなく、此方に近づいてきている。敵意を持つて。

矢の一本で怯えて、逃げ腰になつている場合ではない。急いで武器を取ろうと思つたが……しかし。

「信勝様、お下がりを。ここは拙者が」

「わ……分かった、まかせ——」

勝家がいれば十分な上、先ず間違いなく、これからの戦場に信勝が居ても足手まといになるだけ。しかも、大将である自分が打ち取られる訳には行かない。

それを分かつているからこそ、直ぐにでも下がろうと一步を下げ——しかし、その直後に聞こえた声に足を止めた。

『——ぎゃあああああっ!!』

悲鳴。

雄叫びに代わり、木々の向こうから——否、いつそ先ほどの雄叫びよりもはつきりと聞こえてきたのは、耳をつんざくような、高い高い悲鳴。

此方に振り返った勝家と目があう。

「……信勝様」

「任せる、そう、言ったぞ。僕は」

「——はっ！ 全員、武器を持って！ 儂に続いて前進!!」

反応早し。此方の意図をくみ取って即座に勝家が一步前へと進み、

二呼吸程遅れて、兵士たちも慌てて立ち上がる。それに合わせ、信勝も兵達に囲まれながらも、ゆつくりと歩みを進め始めた。

木々を払いのけ、一步一步先へ進む。襲い掛かってくる様子も無し。何かあったのは確定。そして問題は……一体何かあったのか。まるで、『化け物でも見たか』のような悲鳴を上げた後に。

何が起きたか分からない。故にこそ勝家を先行させた。最も対応が出来ると判断したからこそ——

「——っ!？」

しかし。

突如として、先頭を進んでいた勝家が足を止める。勝家が足を止めるほどの事態——そう考えて、自然、自分の足も竦む。

足を止めた代わり。自然と、視線が動いていく。

勝家が動きを止めて、じい、と見据えて——否、睨みつけている、木々の向こうへと。

そこには、こちらに向かっていただろう盗賊達が倒れていた。

死んでいるのか——いいや、違う。腰を抜かして、声も無く震えている。その視線もまた、勝家と同じ方向を見ている。

ぎりい、と誰かが、刀を握りしめた音が聞こえる。ガリガリと、歯をこすり合わせて、軋むような音が出るのを感じている。それは自分の出している音だった事に、今更ながら

ぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ

そこに——立っているモノを、見つけたから。

ソレは。こちらを見ていた。

人の様な大きさをしていても。

その形を見れば、それが人間ではない事は、直ぐに分かった。

片腕は——まるで、巨大な、巨大な槍の穂先を、そのままくっつけたような。信じられない形をしている。槍だけではない。もう片方には——まるで鋏にも似た、二股の腕が収まっていて。そして、その両方の腕が。鈍い、銀色に輝いている。

両足は。細い。根元から足先まで、尖ったような印象を受ける。曲線は一切見えない。直線で構成されていた。とがっているのは——

頭もか。人の頭蓋の形をしていない。まるで兜をかぶっているかのような形をしていた。

人ならざる化生——というより、そもそも、生き物の様にすら見えない。

金属が、擦れた時の様な嫌な音と共に、いちいちぴたり、と止まって、動き出す。その動きは、決して生物がしているいい動きではない。

違和感しかない。

生きているのなら、まだ分かる。

しかしそれは、生きているように見えない。なのに、生きている様に動いている——それは、人間大に肥大化して、勝手に動き出した、魂無き絡繰の様であった。

「あ……」

「あいつだつ！ さつき俺が見たつ——化け物だつ！」

その頭が、ぐるん、と回る様にこちらに向く。

異様な形相をしていた。

線が見えた。直線的な模様が。

骨ではない。その輝きは金属そのもの。金属でできた生物など、聞いた事も無い。

殆どが黒、そしてそこにほんの僅か、線になって不自然に混じる、赤と青。相反する色の内臓が、異質な不安感を見るものに与えている。

人ではないのに——その癖、瞳は、命のような輝きでギラギラと文字通り、光り輝いているのだ。翡翠の光を、纏いながら。

気圧されていた。

だが、始めて見た、という訳ではない。覚えが確かにある。肌に感じるこの圧力は、まるであの夜のような——

「——何者——」

その時。

皆が完全に、視線を奪われているその時——だが、そんな中でたった一人、勝家だけが太太刀を構え、その化生に向けて切りかかった。

信勝が思わず舌を巻く。戦う時の武力と胆力は、やはりこの男、織田家でも正に最強と言っても過言ではないのだ。

よくぞ正体不明の何者かを相手に、何時もと変わらぬ動きが出来るもの。

——ぎっ

「っ!? なんと……!?」

しかし。

信勝では到底捉えられぬ速度の剛剣一閃はしかし——空を切った。振り抜いた音こそすれ、掠った音すら聞こえない。

一瞬の間に。高く、高く跳躍していたのだ。垂直に。真つすぐ。

その怪物は、信じられない程に軽々と、天に向けて高く聳え立つ木の、その半ばを遙かに超えて高く、高く跳んでいるのだ。軽々と。

剣を振るその一瞬で、跳躍できる高さでは到底ない。自分が駆けながら、その走ってきた勢いを足して跳んでも、あの高さの半分にも届かないだろう。

ぎっ

そして——その片手に備え付けられた大槍を、木の半ばに突き刺して、木の途中に留まりながらこちらを見下ろしているのだ。身の軽さもそうだが、あの槍の鋭き事も、尋常のそれではない。

「信じられぬ、何という動き……!」

確かに、信勝にも信じられない程の動きだ。

しかし。あの輝き。そして、あの動き。

信勝には見覚えがあった。記憶に残る姿と重なるのだ。明確に、軽々と宙を舞って闇夜に消えていった弟の姿と。その動きが。

——現代の言い方で言うなら、『アンテナが立っていた』というベキか。

本来結びつかない筈の二つの出来事に、繋がりを見た。

確信とは言えなくとも。光明ならば、ほんの僅かだけど見えた気がしたのだ。

「逃がしちやまずい。アレを逃がせば——見えた光明が消えていく。故に、一つ叫ぼうとした。しかしあと一步、その声を上げようとした。そこで。」

ぎぎぎっ

此方に急に振り向いた、その首と、目があつた気がした。

翡翠の輝きが此方を捕え、ひと際、ギラリと閃く——否、やはり。秀隆の時と同じように。蠢いている、と表現するべきか。

その姿は、まるで獲物を見つけたケダモノを思い起こさせるような。

「う」

「」

射すくめられる。睨まれただけで。体の動きが止まってしまふ。もし、あの怪物が飛び掛かってきたら。

あの腕に備えられた巨大な槍なら、自分の体を、腹を、容易に貫ける。まるで子供が障子でも破る様に、ぶちりと突き破つて——真つ赤な臓物を辺りにまき散らして、自分はあつという間に殺されてしまふ。

ぶらん、と死体になつた自分が、槍の先で力なく揺れていて——

「——っ!？」

そこままで、意識を引き戻した。

今のは、只の悪い想像だ。しかし。それが現実にするのは、実に容易いであろう事は分かり切っている。

鋼の武器を設えられた腕。軽々と体を天に運ぶ足。人間とは、明らかに違う目的、『戦鬪の為』に形作られた体。

自分と比較すれば、猛獣と一匹の蟻程の差がある。暴威の桁という物が違う。

ぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ

耳障りな音を耳に流し。嫌な汗が体を伝うのが分かる。

向かつて来たら——止められる気がしない。勝家ならば唯一相手になるだろうが、他はどうだろうか。

相手から目を逸らせない。

口の中が、乾いていく。どんどん軋む様な音が、大きく、耳に響いてくるような気がして。

ぎっ——どんっ!

「なっ……!?!」

——跳ねた。

聞こえた音は一つだけだった。恐らくは、ただの一蹴り。ただし、地面に植わっていた木が、傾く程の一蹴り。先ほどの跳躍がどれ程のモノだったのか。

木に張り付いていたその姿は——森の奥へと、吹っ飛んで、消えていく。

あつという間の出来事。

自分たちの目の前から敵が姿を消した。その瞬間に——緊張の糸が切れて。

自分も。周りの何人かも、自然と、地面に腰を落としていて。

ただ一人、勝家だけが、得物を構えて、森の奥を、睨み続けていた。

反発

「——末森、か」

「はい。末森城のある方向にて、目撃情報が」

「その付近は調べさせているのか？」

「勝家や何人かの家臣を向かわせています。何かが見つかるかは……」

「見つかるだろうよ。そんなものを態々、此方に向けて、これ見よがしにチラつかせているのだからな」

呆れたように信長がそういうのも、流石に信勝には分かる気がした。

あの異様な姿の鋼の怪物が、弟とまるで関わっていない——等と。そんな間抜けな結論を誰がこの状況で出すだろうか。否、寧ろ。彼は此方に『自分の仕業だと分かる様に見せつけている』のだろうと。信長は当然のように口にした。

信勝にはそれが。些か場違いな感想になるやもしれないが……まるで『遊んでいる』ようにも見えているのだ。

「——奴は楽しんで居るよ。それは油断しているだとかそんな甘い意味じゃない。楽しんでいるからこそ、油断はならん。その意味が分からんわけはあるまい、信勝」

好きこそ物の上手なれ。

『楽しむ事』と『集中し最高の結果を出す事』は矛盾しない。遊ぶからの気持ちで楽しんで、気負わずに自分の『野望』を目指す。

まるで——子供が天真爛漫に、縦横無尽に、遊ぶかのように。

もしそんな風に野望を追えたならば。それは一体どれだけの『脅威』だろう。

天衣無縫。

自然に美しいもの——転じて完全な物を表す。必死に目指さない。楽しんで遊んで心の底から目指すからこそ。何者にも縛られない全ての力を存分に振るう事が出来るという事である。

「それを踏まえ——お主から見て、その化け物は、どれほどの物だ？」

「……」

「奴が態々、楽し気に見せびらかしてくる玩具だ。油断ならんと見ておるが？」

「……あくまで、僕の私見で、宜しければ」

玩具、という信長の皮肉染みた言い方に、信勝も少し笑えてしまう。見せびらかすだけの力は、あつたのは間違いない。

末森の方向に向けて逃走した鋼の怪物を追わせていた細作の報告によれば。馬以上の速さを以て街道を横切って行って、田んぼの上を、足を埋めずに、跳ねるように走り抜けていったのだという。

足腰の力は、最早言うまでも無く。

「それに、木の幹に易々と突き刺さる程の槍の硬さと鋭さも。業物、というしか」

「あー、細かい事はいらん。俺が聞いているのは——俺らと、そ奴との力の差だ」

しかし。

そのような詳しい話を聞きたい訳ではないらしい。であれば、と信勝は直ぐに意識を切り替える。

「……恐らく、下手に足軽をそろえてぶつけたところで、壁にもならないかと」

「文字通りの『怪物』か。はっ、厄介なモノを味方につけたものだ」

「と、とはいえその戦力をこちらに向けて来たわけではないので、あくまで相手がどの程度の物なのか、等と……本当に、只の……僕の私見でしかないですけれど」

そして、口には出さないが。

その私見は特別真実からは外れてはいないのではないかと、と信勝は思う。根拠はどこにもない、ないが。あの肌で感じた感覚が頭から離れない。

アレをただの幻覚とは到底思えなかった。

そんな事を思っているなど、信長が知る由もないが、しかし。目の前で明確に顔を顰めている彼女を見ると、自分がそう思っている事などもう全て見抜いているのではないかとそう思ってしまう。

「人など最早障子紙、か——かかかつ！ 愉快愉快」
だが。

悩む素振りを見せたのは、本当に一瞬の事で。その直後には、その表情を——笑顔へと変えた。それはまるで、思い悩んでいた事など綺麗さっぱり忘れてしまったかのように。

「——うむ、まあならば、そうもなるか」

「姉上……？」

「奴の住処を見つければ次第、今持てる全軍を持って向かう。大規模な賊の根城を見つけたとでも言えば、怪しまれもしないだろ」

「は？ あ？ えっ？」

まるで、人が変わったように。すつくと淀みなく姉は立ち上がり、窓の外など眺めながら実に淡々と、冷静に口を開いて言葉を紡ぐ。

これからどうするかを、とても滑らかに。当然。間違いなし。この方針で行く。その言葉は実に『果断』に満ち溢れ。当主として頼り甲斐のある姿と言える。

もしそれだけなら、信勝も素直に頷いていただろう。

だが。そのやり方は。余りにも全力に傾けすぎている。

「——姉上、お待ちください、そのように全軍をぶつけるなど、それは些か過剰では」

「阿呆。過剰なわけがあるか。こちらから仕掛けても襲ってこなかった辺り、その一匹は恐らく哨戒。その為に態々すべての戦力を一体出す訳がない。最低でも同等の戦力二体程は奴の傍に思っていると思え」

姉は、当主となってから弱兵と侮られる尾張兵の改善を目指し、様々な工夫を凝らして来た。今や、その練度は以前の尾張兵とは比べ物にはならない程に育っているのは間違いない。

そう、織田郡の戦力は、文字通り『国』を相手取れる程の『力』だ。それをたった一人の個人に向けるなどと。

確かに可笑しな様子であった。恐るべき怪物を味方につけているやもしれないという話は分かるのだが。だが、それだけでまるで弟を、討伐する様な。

「ま——待ってください、姉上……」

「なんだ？ 言った筈だぞ。正体不明の敵戦力と、秀隆を討つのだ。何ら不足ではないだろう？」

「不足、等ではなくて……！」

信勝にとつて。

喜六郎は、『まだ何もしていない』事に変わりはない。

たとえ怪しげなモノと通じていようとも。家を出たとしても。

直接信長に逆らうような真似をしたわけではない。領内を荒した訳でもない。周辺の国にも襲い掛かったという、報告も無い。

本当に静かなモノなのだ。尾張の領内で暴れる賊などよりも実に、実に大人しい。彼が織田家にとつての『脅威』とは、今の所なり得ない。そう信勝は思っている。

得体の知れない存在を味方につけている。それに警戒するのは、分らないでもない。だがしかし、全軍を持って、というのは正直予想の外で。しかも、まるで敵を殲滅するつもりかの様に振舞う、等と。

「——偉くなったもんだな、信勝」

「っ!？」

思わず、息を呑んだ。

睨まれている。

信長に。

「俺が間違っていると、そう言いたいのか？ 面白い、言ってみろ。何がどう違うのかを」

「あ……」

赤い瞳が、此方の目をしっかりと捉え——その鋭さに、眼球が潰されそうさ。一挙手一投足を見つめられ、観察されている。自分の全てが見つめられている——否、既に把握されている。そんな幻覚を覚えるほどだ。

初めての経験だった。姉に睨まれる事など。

秀隆と会った時とは違う。思わず、首を垂れたくなる様な、圧倒的な存在感。

自分の上位に位置する者だと、明確に示してくる。

信勝は、信長を半ば崇拜している。それは自分でも自覚している。彼女は何れ何物にも触れられぬ、王者になり得る資質があるのだと思っている。自分を担ごうとする無能共を排除しようとしたのも、姉の足を引つ張る奴らを生かしてはおけないと思っただからだ。

彼女にこのような目で見られて、口答えの言葉など、思い浮かぶはずがない。

そう、信勝当人が、思っていた。

「――あ、姉上は捕えて終わりにする、とおっしゃっていました」

だから、そんな状況でもなお口を開いた時。誰よりも驚いたのは、彼自身だった。

「状況がそれを許さなくなった」

「なぜ、ですか。喜六郎を、脅威だと?」

「そうだ。お前が言う通りの化け物を味方につけたとなれば――」

「その力は、此方に向けられておりません。領内で、あの化け物に襲われたという報告は今の所、上がっておりません」

いつも以上に、口が回る。

姉に盾突いているという事は分かっている。こんなのは、自分がやる事ではない。姉は凄い。自分如きが、そんな真似をするなど許されない。

だがそんな姉への強い思いですら、今の言葉を見過ごすことは出来なかった。

だって、秀隆が一体何をしたというのか。

「――信勝」

「織田家当主たるもの、もつと堂々とせねば。そうでしょう姉上。そんな国一つ動かすなんて、弱気通り越して狂気の沙汰ですよ。弟のたかが家出一つくらい、笑って見逃す位の器量が無ければ、乱世なんてやっていけないじゃないですか!」

別に喜六郎は一人で出ていっただけだ。

その何が悪いというのか。武家から出ていった一人の武士が、仲間を伴って諸国を旅する程度、よくある話ではないか。

とはいえ、彼の様子が異常だったから、そのまま放っておくのが嫌

だったから。姉に相談して、『連れ戻す』事に力を貸してもらったのだが。

とはいえ、あくまで個人と家族の間で済む、その程度の話なのは間違いない。そんな国の総戦力を動かす様な話じゃないのは、信勝にだってそれは分かる。

「あ、もしや僕を揶揄っておいですか？ 意地悪ですねぇ姉上。」
「……」

「お気持ちはこちらからなくても無いですが……幾らなんでも、今、ただ一人に向けて全戦力を向けるなんて、些か以上に愚行です。それくらいは分かりますよ」

姉に愚行、等と。先ず間違いなく、普段なら絶対に言わない。そんな事を姉がするなんて、あり得ないと頭に思い浮かべた事も無かつた。

だから、こうなった時何を言えば良いのかもわからなくて取り敢えず……真つすぐに言葉を言った。誤魔化す様な事はしなかった。

別に喜六郎に戻ってきてもらって。今まで通りに過ごしてもらおうのが一番いい、と思うからで。そんな呑気な、等と、誰にも言うて欲しくない。

まだ。まだ喜六郎は何もしていないから。まだ何もしていないその段階で。こちらから余りにも過剰なやり方で叩き潰すなんて。それは、あんまりではないか。たかが家出に対する罰には、あんまりにも。

「我々は四方に敵を抱えていますし、下手な事だけは——」
自分たちの守るべき弟にするような仕打ちでは、到底ないではないか、と。

「——との事らしいが？」

「いやあ、流石は兄上。アレでこそ兄上ですなあ」

「お主が『やるなら全力で』とかいうからだろ。見ろ勘十郎ってば、変

な方向に弾けよつたではないか」

「その割には嬉しそうですね、姉上」

「戯れるな。んで、どうする」

「——分かりました。お二人と、後は勝家殿と精鋭数人くらいはお通ししますかね。護衛は必要でしょうし」

「気前がいいな」

「その代わり、こつそり全軍を回しても、『此方の精鋭』が阻みますので、その辺りはご理解いただければ」

「それは『やるならバレずに上手くやれ』と言っておるのか？」

「ええまあ。兄上を悲しませたくないですし」

「……やらんわ。いくら数があつてもどうせ無理だろうし」

「全く、姉不孝な弟に育つたな、お前も」

「何を言います。こうして姉上には全て話しているのですから、信頼していますとも、ええ。ええ」

「嫌な信頼だなお前……日時は追つて伝える。決着をつけようではないか、そろそろ」

「そうですね。ご招待させていただきますでしょうか。我が舞台へと」

来敵

この足元を照らす、翠の光にも、いい加減に慣れて来たと言わせた秀隆は思

う。というより、この光が無ければ、到底周りも見えないのだし。ずっと見続けているのだから当たり前と言えれば当たり前なのだけれども。慣れて来た、というのは見えているものだけではなく……今、自分の体に血潮と同じように流れている、その輝きにも、だ。

『——分からぬものだ。態々、自らの懐に敵を呼び寄せる、等と』

「お前たちには分からぬ、か……お前たちの言う所の、無駄を楽しむ、人の業という奴が」

では。今、自分が慣れたから、こうして些か以上に無駄な真似をする準備をしているのかと言えば。全くその通りではあるのだが。

実際の所、秀隆にも分からない事はないのだ。この先、自分がやろうとしているのがどれだけ無駄な事なのか。黙って、密やかに事を終わらせてしまう事がどれだけ合理的でそうしてしまえば……間違はなく、自分の目的に最大限の邪魔となる。そんな存在を、今彼は懐に呼び寄せようとしている。

御伽話の悪役の様だ。態々自分の悪事を大つぴらに広げる。そしてその手の内を態々明かす様な真似をして、最もの脅威をこちらに呼び寄せて。まるでそれは——滅びを自らの手で誘っているかのよう

で。『分からぬ訳があるまい。我々が戦ってきたのは合理性などという物から遥か遠くにいる大馬鹿者ばかりだ……『進化する意思』だけが我々に多くの辛酸を舐めさせた』

「じゃあなぜ分からない？」

『どうしようもない迫る脅威に対し立ち向かうなら兎も角……貴様のそれは、態々滅びの脅威を引き寄せているではないか。無駄、という範疇にすら入らん』

「ああそうだ。そしてそれは……次につなげるには必要な事なのだよ」

だがしかし。

必要な事だと。彼は自分の中で定めている。だから、自分の中でも『おかしい事をしている』と思っけていても、全く揺らがない。

「まあ先ずはもてなしの準備でも始めようじゃないか。久しぶりに三姉弟がそろいのだから味気の無いお迎えというのも無礼だ」

そう言つて振り返れば、自分が浮かべている笑顔と比べて、何とも不審そうな傍観者の姿が見えて、思わず笑つてしまひそうになる。まるで、以前の自分と立場が逆転しているようではないか。

別に何か、意趣返しを何時かしてやりたい……とは思つた事は無い。秀隆自身はただ彼らに決して心で負けない様に努めていただけで。

しかし、目の前でこうもかつての自分の事を想像させるような顔で見られてしまつてはそりゃあ、さんざつぱら自分に揺さぶりやら何やらをかけてくれたのを思い出して『やり返してやった』と悪戯が成功した様な気分になつてしまふのも止む無しだと思ふ。

「なあに、そう焦るな。俺だつて滅びたいから姉上たちを呼ぶのではない」

『……では何故だ?』

「——無意味だから、だな。ここで臆せば」

可笑しな話ではあるだろう。

自分がこれから進む道の先、多くの脅威が待ち受けているのは間違いない。

喜六郎は、自分の理想が理解される——とは到底思つていない。寧ろ、これから更に敵が増える事すら当然の様にあり得るだろう。相互に理解し、互いを尊重し合う事がどれだけ難しいか。ソレを良く分かっている。

その多くの脅威と戦つたその結果として——一体どれだけの長い旅路になるのか。そんな事も、想像もできない程に、苦難に塗れた道であろう事は、流石に分からない訳が無いのである。

だが。

その先を想像できなくても、一つだけ確信できることがある。

『無意味?』

「ああ。きつと、ここで姉上と兄上から逃げだしても、最後にはあの二人の所で止まるんだよ、私は。結局はな」

恐らく、どれだけの数の敵と相対し。

歴史をひっくり返す様な強敵を相手にして。

世界を揺るがす様な大戦になったとしても。

結局は、そのどれよりも強敵で。無敵で。自分を苦戦させるのは……きつと、何時だつて兄と姉、織田信勝と織田信長。彼ら二人だ。

三千世界の何れを見回して尚。最後に自分の野望をくじいてくるのは、他の誰でもないのだろう。

「革新の魔王、魔王の道を拓く者……私は今、誰よりも彼ら二人を恐れている。だからこそ、ここで。一番初めに『決着をつける』」

『ここで決着を付ければ……後は全て上手くいく、と?』

「そうだ。そして逆に、ここで負けるようなら、逃げ出して先送りにしても負けるのに変わりはない」

理屈ではない。

自分にとつて、生涯を通して、ずっと、ずっと、ずうつと導いてきてもらった二人だ。

彼ら二人の背を見て、喜六郎は育った。偉大なる二人。彼ら以上の存在が、この先に立ちただかる等と、想像もできない。

感傷的、と言われてしまえばそれまでかもしれないが、しかし。

理屈ではない。血族にしかわからない。恐ろしい『底力』をあの人秘めている。喜六郎は、それを誰よりも恐れているのだ。

「……織田秀隆として、ゲッターを司る者として、そして未来を変革する者として。この一戦こそが天下分け目に等しい決戦。ここを抜ければ、気も少し楽になる」

だからこそ。最初に乗れ越えなければならぬ。その為の舞台、その為の戦力、そしてその為の覚悟だ。もしここで兄と姉を説得し、自らの味方と出来たなら。一体どれだけ心強いのか。説得できずとも……敗北を刻み込めれば。それは大きな意味を持つ。

『——かつての我々にとつての、ゲッターチームの様なモノか』

「そのゲッターチームに滅ぼされた側が言うところ、実に重い言葉だな」
『馬鹿を言うな。我々を滅ぼした直接の原因は百鬼よ』

その思いは……ハチユウ人類を率いた皇帝にも分からぬ訳ではなかったのだろう。彼は初めて、ニヤリとその口に笑みを浮かべて見せた。

此方はまだ滅ぼされた訳ではない、と言いつつ返したかったが、しかしそこは堪える。それは些かと、黒に過ぎる冗句だろう、と。

視線を前に戻して。暗闇に、目を取られる。

『ぶらい』、だったか。そちらにも会いたかったところではあるが……?』

向かう先は、先ほどと同じ、この通路の先。

道の先は先の見えない暗がりにつなげられているように見えて――。足を止めた。

通路を照らす明かりは、何処までも届いている。

そんな先を見通せない暗がり等無い筈なのだが。

しかしながら……そこには確かに暗闇が見える。視線が全く通らない程に濃い。光が届いていないというより、そこに光を遮る壁が聳え立っているようだった。

『……まさか、コレはツー!』

視線の先に、鋭く叫んだのは傍らの皇帝。何時になく取り乱した様子に、一瞬目を見開いたが。

それ以上に驚いたのは……その闇が、鳴動し、蠢いた事。

間違はなく生きている。

その中に爛々と光る濁った黄色の眼が、幾つも幾つも幾つも幾つも……開いては、四方を見回し、そして此方の姿を捉える。

『まさか……ここまで……ゲッターとあれば見境なしか』

「知っているのか?」

『貴様もゲッターを見て来たのであれば分かるであろう。永劫にゲッター線にへばりついて生きる『寄生虫』共だ!』

うごめき、不定形のまま、闇の如く擬態していたそれは……こちらに気づかれたことに気が付いて、一つに集まって、固まって、何かの

形を成そうとしていく。

だがそれは、人が陣形を成すとの違う、鳥が群れを形作るのとは違う、蟲が一つに集うのとも明確に違う。まるで、泥が大穴の中で一つに混ざり合おうとしているような、そんな動きを……

「ああ、そうか。ゲッターと永劫にも近い時間を争うモノ……いたな、そんなバケモノも」

秀隆は知っている。

ゲッター線の歩んできた道を見て来た。否、体験してきたのだ。

ゲッターという物を呑み込むための必要だった。あの無限にも等しい時間を。

その中で見つめた、一つの世界。ゲッターエンペラーが『戦い続ける』勢力の一つ。それがゲッター線という『力』に取り付く悍ましき地球外生命体。あらゆるゲッター線に取り付き、他の知性体を利用しつくす、『ゲッター』を利用しようと企む悪辣な生命体。

だがこの世界にはいない、異なる世界に存在する生命の筈だった、ののだが。

『とはいえ、やはり総戦力を呼び寄せられる訳ではないようだ……手勢はこれだけ、ほんの僅かに過ぎない。一旦引いて、此方の全戦力で叩くのだ。そうすれば——』

「——必要ない」

『……何?』

去れども。

ゲッター線が、こうして本来あり得ぬ程遠い壁を越えて辿り着いたのだ。最早、秀隆にとってここに誰が居ようともさして不思議な事ではない。

問題は、その存在が決して歓迎すべき稀人ではなく、全人類の天敵、否、全ての生命の怨敵とでも呼称すべき災害であるところではあるのだが。

それでも。

その圧倒的な暴力を前にして……秀隆は、尚も微笑んでみせる。寧ろ、今ここに彼らが辿り着いた奇跡を。不運ではなく、秀隆は幸

運である、と取って今、笑ったのだ。

「先ほど、私にとつての最大の脅威は姉上や兄上だと言ったな？」

『……言ったが？』

「逆に言えば、それ以外は、何ら脅威足りえない。それを今ここで……示そう」

一歩。前に踏み出す。

息を呑む音が、かすかに聞こえた気がした。

確かに無謀に見えるやもしれない。文字通り、日ノ本どころか、この広い世界、それ以上の宙の全てを呑み込む程の悪意の塊のような相手だ。たった一人で立ち向かおう、とどうして思えるのか。そう言われても不思議ではないだろう。

ああ、だが。秀隆はそう言われたならば、こう返す。

たかが世界を呑み込む程度の存在に恐れを抱いて。本気で世界を変える気などあるのか。

「——おいで」

一歩。

じいつ、と自分が見られているのが分かる。闇の中から、ではなく、闇そのものが、自分を取り囲む様に見つめている。

敵意を孕み、睨むようにか。それとも、悪意に塗れ、あざ笑うようにか。

何れにせよ構わない。さらに一歩……一歩、一歩、一歩。無造作に、寧ろ両手を広げて歓迎するかのように。距離を詰める。

空気が淀んでいる。生臭い香りがする。うじゆる、と何かが湧き出す音がする。歪んだ命が、噴き出す音が。それは一つの形へと、集つて、捻じれて、纏まって。そして。

『■■■■■■ーッ!!』

ぐじゅりっ

「」

体に、何かが突き立つ感触。瞬く間の一撃。僅かに驚いて、声が出せなかった。見るのと相對するのは大きく違う。

黒い不定形の化生は、此方が更なる一歩を生み出すその間に、牙を

を抜いて欲しいのだよ」

丁度いい。

自分が手に入れたこの炉心、色々試してはいたが……誰かへの明確な『攻撃』へと利用するのは、実は意外としていなかったのだ、と。そりゃあ敵対する相手も居なかったのだから、当然と言えば当然だが。ゲッター線に明確に敵対する存在も、こうして出てきたのだし。試す機会だろう。

「なアに、私に炉心が馴染むまでの相手をして貰うだけだ。君たちを相手取れば、私もそれなりに『ゲッター』の力を使いこなせているだろうと、思うのだよ。くくく」

こうして。

ゲッター線を得た事で。自分の目の前に現れた存在は、いわばゲッター線というモノが背負う『業』のようなものである。

ゲッター線は生きて、そして自ら成長する『力』である。他に類を見ない異質な性質を持つゲッター線は、多くのモノを魅了し、引き付け、そして争いを引き起こす。

その果てに、ゲッターは『あそこ』まで行きつくのだから、魅了されるのも無理からぬ話ではあるが。

まあ、要するに秀隆にとつて『この程度』は想定内ののである。ゲッターが本来こじ開けられぬ『壁』を越えてここへ来たのだから、それを追い求めて、別の招かれざるモノたちが来れるのも、さして不思議な事ではない。

ゲッター線の力は、『時』の壁すら超える。

『縦』が可能なら『横』も不可能ではないだろう。しかし……何れにせよ越えられる物の数も限られるようではあるのだが。

「何故逃げる？ 食い放題なのだぞ？ 余り怯えてくれるなよ。君たちはゲッターに寄生する存在なのだから、持ちつ持たれつで行こうじゃあないか」

「■■■■ツ……!? ■■■■ーツ!! ■■■■ツ!!」

好都合だ。

これから進むゲッターの道の先。この程度は、いくらだって沸いて

来るだろう。それならば。今から体験の一つでもしておいて、損はないだろう。

『……あまり遊ぶなよ』

「知っているか？ 武術というのは、『手合わせ』という戯れこそが一番の修練になるのだよ。遊びもするさ」

自分は、今ある全てを手に入れたばかり。ゲッターの力を受けて生まれ変わったばかりの自分は最早赤子の様である、と秀隆は認識している。

力を与えられればいきなり全てを圧倒できる全能の存在に成れる。そうなれば誰も苦勞しない。結局の処、与えられたモノをちゃんと自分の『扱える』モノにしなければ、何も持たざる者にすら劣るだろう。赤子の如く。遊んでもらうその中で感覚を掴みたい所であった……というか。こちらが赤子の如く好き勝手に遊ぶつもりではあるが。

ふと。

半ば無意識の内に『相手を玩具として認識している』事を、秀隆はその時になって自覚して……その笑みをより深い物に変えた。

「いかなあ……良くない良くない。気を引き締めないと……全くゲッターというのはこれだから業が深い」

先ほど、自分の中で確認したばかりだというのに、これだ。

余りにも刺激的過ぎる。間違った全能感に支配されかねない。全てを理解したような気になってしま……そうではない。ゲッターに触れたからと言って、その人物が本当に全能になる訳が無い、と再度己の胸に刻み付け。

ゲッターに恭順するならともかく。

ゲッターを支配するならそれではいけないのだ。

本来のゲッター線と比べれば、比較に値しない程に弱々しいものでも。たかが人一人には余る膨大な力である。コレを己の手で十全に扱えるようになった時。その時こそ、秀隆が思う夢を実現できる時。

「もう少しじゃないか」

思う。

招待

「——手筈は整った。さっさと行くぞ」

呼ばれて。姉の自室に再び馳せ参じて、目の前に座ろうとしたら姉が立ち上がって急に、ただ一言だけそう言った。何の話も無かった。取り敢えず、末森の辺りで、何か目撃情報が無いか、探してみようとか、信勝が考え始めた、その直後の話であった。

そもそも何処へ、という言葉も無かった。

そのまま、首根っこ掴まれていきなり連れ出されて何を言う暇も無かった。文句を言うなんてそもそもあり得ないが、流石に面食らう勢いだ。

「あ、あのっ！ 姉上、これはっ!？」

「黙ってついてこい！」

夜の闇の中に連れ出され、馬に乘せられ、そして勝家と何人かの足軽を連れて、いざ出陣である。何を聞いても答えてもらえず、力づくで強行させられた。

態々たいまつを燃やしての強夜行。馬の駆ける音が、闇に吸い込まれるようにして響いている中、誰も何も言わない。というより、言えないほどの速度で、一団は城から出て、そして今も駆け抜けている。

先頭に行く姉の表情も雰囲気も、いつになく険しく、そして、腰には自分の刀を佩いて、着替えたのは戦用の装束、陣羽織。傍らには大太刀を携えて、鎧も、兜まで被つての完全武装の勝家を引き連れての出陣である。

何処かへ討ち入るつもりなのかという重武装。足軽にも諸々荷物を持たせているあたり本気加減は何えるのだが……一体、何処へ行くかがさっぱりわからない。

何をするにしても中途半端。

何か火急の知らせをするには人数が多く、物々しすぎる、何処かへ向かう援軍にしては少ない。かといって、もし万が一、ただ散歩する為だとしたら勝家を連れてくるのは邪魔でしかない。

当然。

この闇夜の中、自分の長髪が靡く程の速さで馬を飛ばしている信長を見て。

散歩、等と思えるほど、信勝も呑気ではなく。何も考えられないままに、馬を走らせて必死になって付いていくしかない。

しかし……走っている最中でも、何となくだが周辺の地形は見えないでもない。

彼には、今、向かっている場所の景色に、見覚えがあった。

「ここって……」

信勝は、ここ最近、ここら辺をずっと調べていたのだ。

例の怪物が見つかった場所……恐らく、だが秀隆が潜伏しているのではないか、と思われる場所——末森。

信長は、文字通り一直線にそちらに向けて馬を走らせているのだ。それも、末森にある居城や、それに連なる施設に向かっている、という訳でもなく……

道から外れた、人の手の入っていない青々と茂る木々に向けて、馬を走らせて行つて。ある地点で、唐突に馬を留めた。それに合わせて、勝家も、信勝も馬の動きを止めて。そして、馬を下りて、木々の目の前に皆揃つて、立った。

姉が、見つめる先を、揃つて見つめながら。

「——ほれ、迎えが来ておる」

木々の間。森の入り口のようにも見えるそこに——

赤い、影が一人で立っていた。

声を漏らしそうになったところで、自分の手で口をふさぎ、咄嗟に堪える事が出来た。

月明かりに照らされて、浮かび上がるその姿は——赤と、白に彩られた姿をしている。

鬼かと思紛うばかりの立派な二つ角、太く、逞しい手足。体も変に痩せている印象も無いしっかりとしたもの。背中には……外套とも違う、真っ赤な一枚布がひらめいている。

しかしその体、胴体だけは……白でも赤でもない。得体の知れない『中身』が？き出しになつていた。

ぎぎぎぎ

赤いその化生は、ゆつくりと、ぎこちなく頭を下げ——お辞儀を一つ。

生物とは思えない様な、角ばった動き。僅かな呻き、ひいという甲高い声。しかしその赤いモノは、自分見て上がった足軽共の悲鳴など気にする様子もなく。それから闇の方へと振り返り、一步、一步と歩き出した。

信長に視線を向ければ、ただ無言で頷く事だけで返し、何も言葉にせずに後に続くように馬を歩ませ始める。誘いに乗る、という事のよう。先んじたその背に、信勝は勿論、勝家は粛々と、彼の率いる兵達は嫌々ながらも、続く。

木々の間に立ち入れれば、そこは直ぐに月の光も届きにくい暗がりの中である。見失わぬように前を見つめれば、先頭を行く姉が見え——しかし、目の前の彼よりもなお、その先に居る赤い影の方がよく目に入るのは、何故だろうか。

松明の光が届かぬ暗がりの中で尚。ぼんやりと浮かび上がる、羽の様なもの備えた後ろ姿。

それは体から洩れだす、翡翠の輝きの所為か？

「……」

迎え、と姉は言っていた。

一体何者からの迎えで、この先に誰が居るのか——最早ここまで来て、別人の可能性は考えても仕方ない。

喜六郎が、態々ここまで。

本当に、前に行った通り。招待をしたのであればなんと豪胆なやり方か。

連れ戻そうとしている自分たちの事を知っていてなお、自分の懐に、態々招き入れるというその行動は——最早愚かと言ってもいい程だ。しかも、こんな案内人まで態々準備する念の入れよう。

もし自分たちがその場で襲い掛かったらどうするつもりなのか。

そこを訝しみながらも……心の何処かで、信勝は安心してしまつた。

姉は弟の事を脅威だとかいろいろ言っていたが。しかしながら。蓋を開けてみればこのざまだ。態々、自分にとっての脅威を、悠長に案内等させるなど。

そもそも姉上と敵対するつもりがあるなら、そもそも姉上を近寄らせない。姉上はどんな状況からとて、勝利を手繰り寄せられるお人。それを喜六郎が知らない訳はない。

こんな事をする時点でやっぱり、喜六郎はこつちと戦う積りなんて無いのだろう。兄だから、分かるのだと、こつそりと信勝は鼻を鳴らした。

「——何を油断しておる、周りを見ろ」
「えっ」

——という自信満々の想像をしていた所を急にへし折ったのは、冷や水を浴びせかけられ鷹の様な姉の呆れた声。

言われて、取り敢えず周りを見回してみても……しかし、周りには木々が広がっているばかりで何か目立つようなものは無く。しかし。木々ではなく、その木々の奥を覗みつけている、勝家の姿が見えた。その視線の先を追って行ってみると。そこに、自分が見えなかつたそれが居た。

目だ。
こちらを覗きこむ、目だ。

その目の形、そして輝きは。先ほど現れた『案内人』や、先日現れた大槍の化け物を思い起こさせる。

木々の合間から、此方を見ている。

「どうやら、多くはないが、居るらしいな。ほれ」
「……」

更に。更に更に更に。

瞳は、周りを見渡せば、幾つも見えてくる。一体、二体、三体……姿こそ見えないものの、暗がりにも光る眼だけは、こうして意識してみると見つけやすい。

見られている。四方から——低い位置から、常識では考えられない程に高い位置、居る場所は違えど、その目が見ているのは、何れも此方なのは間違いない。一応、監視網は敷いている、という事か。

それを理解してか——空気が軋んで来ている事に、今ようやく気が付いた。

一触即発か？ 火薬庫で火でも付けているのか？ 目の前に刃を突き付けられているのか？ そう言いたくなるような、明確な緊張感。

「あ、姉上……」

「遊びに来たわけではない——お主も、その辺りを自覚しておけ」

……そう言われても何も返せぬままに。信勝は、一步一步、先へと進んでいく。

誘われるままに、只管に、行くしかないのだ。何も、考えられぬままに——今はただ暗がりの奥へと。

「こんな所があつたなんて……」

暗がりは既に、『慣れれば見えるかもしれない程度』から『一寸先も見えぬ程度』に、深まってきている。どうしても林の中では漏れ出す月明かりも、最早この中に一片たりとも入り込む余地なし。松明に明かりを灯していなければ、歩く事すら難しかったかもしれないだろう。

それも当然。ここは地の底へと続く大穴——洞穴の半ば。

赤い案内人がゆらりゆらりと揺れながら案内して見せたのが、ここだった。自然に出来たものなのか、それとも少しづつ掘って作られた人工的なモノなのかは分からないが……ともかく、深い。

気が滅入りそうになるくらい景色が変わらない。

「ど、何処まで続いているんでしょうね。姉上？」

「……」

何か姉の声を聴きたくて、話しかけてみるが。何も帰ってはこな

い。ため息を吐いた。想像していた通りになってしまつて。気が滅入りそうになっているのは……この空気の重さもあるだろう。

この洞穴に入つてから、というもの。信長と勝家の表情は、固い。信長は一言も話さないどころか、洞穴で転げそうになつた兵の一人を何も言わず睨みつけたし、勝家など今にも腰に携えた太刀を抜き放ちそうな『庄』を感じて、その周りに誰も立っていない。

兎も角、目の前の案内人よりも、味方の筈の二人に気圧されてしまつて、信勝も兵達も何処か落ち着かない。

加えて言うならば。信勝は、喜六郎の変貌ぶりを肌で知っている。それを知っている信勝は、こうして変貌した弟の元へ向かうのに、多少の警戒が必要なのかもしれない、というのは想像していない訳ではない。だが、この二人の『庄』に気圧されそうになっている。想定していた『この程度』を遥かに超えているのだ。

「……うう」

「くそ……この……なんでこんなに寒いんだよ……」

「帰らせてえ……」

一応、何かの助けになるかと付いてきている兵隊たちに視線を向けてみるが。こちらと同じようなもので。松明の明かりに照らされて、姉と勝家に怯えたような視線を向けていたり、落ち着かなそうに周りを見回しているばかりだ。

松明の明かりは四方へ散らばり、ふらふらと影が揺れて。それが、殊更に恐怖を煽るのである。自分に付き従っているはずの影が、まるで独立して生きているようで、何処かから急に襲い掛かつてくるようなそんな幻影を——見てしまう。

おかしな話だ。

ただ、奥へ奥へと案内されているだけの筈なのに。まるで、処刑場へ赴く直前の罪人の群れの様になっているではないか。これでは。気もそぞろになつて、当人ら以外は誰も彼もが震えが止まらない。

「——おい、そのの」

「はっ、はひいっ!?!」

「はあ、何を怯えておる貴様。もう松明は消せ。要らん」
「えっ?」

故に——誰も気が付かなかったのだ。

「ど、どういう事で……?」

「周りが見えておらんのかお主。ほれ」

違うのだ。

松明の揺れが、こんな洞窟の中でそう起きるか? 違うのだ。影の形が変わって見えたのは別の明かりが松明とは別の所から照らしていたから!!

ひい、と誰かがまたぞろ……そして、先ほどよりも、はっきりとした悲鳴を漏らしたのを、信勝は聞いた。そして自分も悲鳴を上げたくなってしまうた。それほどだった。

洞窟の壁に反射する、翡翠の光……まるで、洞窟の何処か、自分たちの分からぬ何処からか滲みだしているそれが、足元が見えるほどに、自分たちを取り囲んでいたのだ。

美しい光だった。まるで、宝玉の如き光だった。しかしながら、否、美しいからこそ。それらは到底人知が及ぶ類の光ではない事を、分からされる。日の光でも、焰の光でもない、如何なる物から発せられるかもわからない、そんな光だ。そして……脈動している様に、揺らいでいる光だ。

何処からくるのか理解できないモノだ。

それを肌で感じ取ったからこそ、自分含めた凡人共は、恐れた。この光を。

自分が他と違ふとすれば……それでもなお、喜六郎は自分たちに何か、不意打ち染みた真似はしなないと思うから。今は、今は安全だと、思えるからか。故に、悲鳴だけは我慢することが出来た。

「ふん、気遣いの積りか?」

とはいえ、それを見て尚、怯えどころか鼻息一つで終わらせる信長、未だ刀に手をかけて緊張の糸を切れさせず、緩めもしない勝家も相当だ。

「……信長様」

「分かっておる。近づいて来たからだだろうな、明かりを灯したのは」
——否。

二人とも。それ以上に、気になるモノがあつたからこそそんなものが気にもならなかつたのか。見つめる先にある——出口らしき、ひと際に強い、翡翠の明かりが。

それは、奥から漏れ出した明かりの筈なのに。

ごくぐり、と唾を飲み込んだ。間違いなく、この先は……こことは桁が違う。

一步一步、確実に、距離を詰めて、近寄っていく。この先に、誰がいるのか。

それを……分かっていない信勝ではないし。信長だつて勝家だつて。分かつていた。だから止まらなかつた。真つすぐに。只管先を行く、赤い背中を追つて。

その、先へと——

そこは、広い広い空間だつた。

洞窟の中だというのに。妙に整えられて——あくまでここに至る道中の岩肌に比べてなのだが——大名屋敷一つであればすつぽりと収まる程の大きさはあるだろうか。

広大な空間だ。普通なその大きさに気を取られるかもしれないが……しかし。

それ以上に。

道中とは明らかに違う、まばゆい程の翠の光が、この広大な地下洞窟の空洞全体を満たしているのに、目が向かう。

一目見ただけでは、到底ここが『この世』とは思えぬような、異質な景色だ。

蛍の様に漂っていたかと思えば、四方の壁を照らしながら足元から噴き出しているようにも見えて。だが天上から降り注いでいる気もする。

少なくとも、この光が満ちていない場所は、何処にもない。

「分かっているさ。姉上も兄上も来てくれたのだから。気合も入れる。大丈夫、一応の守りだって付けただろう？ 心配性だなあ」

そして、その光の集うその中心で——その祝福を全身で浴びるかの如く。男は此方を、友人と喋るように、待っている。

その周りには、誰も居ない。たった一人だというのに。

陽だまりの縁側で待っていたかのように。朗らかに笑って。

「——お待ちしておりましたよ。兄上、姉上」

紅い首巻を靡かせながら。

喜六郎が、座って待っていた。

大望

酷く。のんびりとしていた。

ここ暫く、ずっと自分たちを振り回していた自覚がないかのよう
に。それこそ……まるで自分が絵を頼むために来た時のように。履
いている小袴をちよいちよい、と治す仕草などまるで緊張感の欠片も
無い。

そのくせ——その目ばかりは、ぐるぐるキラキラとして、清川の、楽
し気に渦巻く底なしの渦の如くだ。

「——喜六郎」

それが、気に入らなかった。

こちらがどれだけ心配したというのか——どれだけ気にしていた
というのか。分かっていない様にしか見えない、寧ろ、そんな事を気
にしない程に、楽しそうにしか見えないから。故に。

信勝は、信長を差し置いてでも、一歩前に出た。

「ははは。兄上、どうなされたのですが、そのように顔を顰めて。久し
ぶりに姉弟揃って話すのですから、もつと！ にこやかにですな」
「出来る訳ないだろ」

少し、語気を強めたのは、態とだった。当然と言えば当然だ。

自分がどんな気持ちで姉上に意見したと思っている。結構怖かつ
たのだぞ。そもそも自分が姉上に逆らうなんて許される事じゃない
のに。それでも、頑張ったのだ。それを知らないでそんな笑っていら
れるなんて。

そんな、何処か小さい……というか、こまい、恨みを込めての八つ
当たりじみた言葉を吐いている。

とはいえ。恨みだけではなく。正直ほつとして、気が抜けてしまっ
て。喋る余裕を取り戻せたから、口から憎まれ口が零れてしまった、
というのもある。詰まっていたものが溢れだしてくるように。

「こっちは腰抜かしそうになったんだぞ！ 勝手に出ていくって、
戻って来たと思っただら様子が可笑しくなって、変な奴らを連れ歩くよ
うになって。なんだよ、あの白いの！」

「何と言われても。此方の……まあ、分かりやすく言えば『味方』ですかね」

「んな事は分かつてるんだよ！」

「でしようね」

「お前なあ?!」

「あははは。すみませんすみません、冗談ですよ」

だからか。もうちよつと、弟を詰めて、真剣な話をするつもりだったのに。どうにも締まらない。まるで、何時もの様に話してしまふ。

自分も、喜六郎も。もしここに菓子と茶でもあつたなら。二人して、何時ものように絵の相談でもしそうなくらいに——しかし、それでも。喜六郎との距離は余りにも遠い。

錯覚なのだ。

今は、そうは出来ない。彼を此方へと、織田家の元へと戻さなければ、結局は。でも別に難しい事じゃない。誰の禍根を買った訳でもない、今なら。

もう長くはないけれど。その間だけでも、弟と静かに過ごせれば――

「――喜六郎」

「はい」

「帰ってこい、変な奴らと付き合うのもやめて」

そして、勢いで、そう続けた。言いたい事を言った。

別に。信勝は喜六郎と争いたかつたわけじゃないから。

弟が変貌したのが心配だっただけで。姉に相談したのだから、喜六郎が可笑しくなったのを自分でどうにか出来るとは思わなかつたから。

その結果、事態がとんでもなく大きくなりかけたけれども……それだつて、結局は大きな事にならず、こうして姉と一緒に、喜六郎の前に立っているのだから。だからそうならなかつたことを、これ以上は考えない。

だから、言う事は変わらない。

兄として。弟に。

そのつもりで、言いたい事を言った。それ以外にはない。寧ろ、それしか言っちゃいけないと思った。余計な事は言わなかった。

そうじゃないと、自分の本気の言葉は届かないと思ったから。

「……それだけですか？」

「それだけってなんだよ。それ以外に必要なか？」

信勝にとつては、それがここに来た理由の全てで。実に真剣に言っているつもりだったのだけれども。

喜六郎は……それを聞いて、何とも言えない。苦笑、と辛うじて呼べるような、そんな笑い方をした。どんな表情だお前それ、と信勝が言いたくなるような面だった。

「——はあ。いやはや、事ここに至って、それとは。やはりここでお二人を招いたのは間違いではありませんでしたなあ。姉上」

「こういう所は好ましいと思うが、俺。ここまで突き抜けてると逆に大物だよこいつは」

「姉上からそのような言葉が出るのも驚きですが。ま、やっぱりそうですよね。このお二人が揃ったら厄介極まりないですよね」

はあ、とため息を吐く喜六郎だが、ため息を吐きたいのは此方である。自分の言葉に否とも応とも言っていないで、勝手に姉上と話しているのだから、少しくらいこつちに何か喋れ。

とか、色々言おうとした信勝に対し……喜六郎は、掌を突き出して、その機先を制すようにしてから口を開いた。苦笑から、半ば呆れのよくなそれに、浮かべた色をゆるりと変えながらも。

「分かってますよ。戻るか戻らないか、の話でしょう。というかそもそも兄上、私、こんな状況なんですよ？ 本当に、よく言えましたよね、そんな事」

「こんな状況って。お前、まだ何にもしてない癖に、口先だけで色々言ったって、誤魔化されないぞ」

「……全く、私って、徹底的に情けない弟扱いなんですな」
それはそうだ。

信勝にとつて、喜六郎はいつだって自分の下の弟で。それ以外の何者でもない。

「いいでしょう。取り敢えず改めて、状況を私の口から説明させていただきます。構いませんか？　姉上」

「——良いぞ」

「はい。では——兄上」

だが、それを聞いて、寧ろ喜六郎は、不機嫌そうになっていくばかりだ。不機嫌、というよりは……困っている、という方が近い。頭をガリガリと掻きながら、此方を見つめるその表情は、まるで人の親の如くだ。

なんでそんな顔で見られなけりやいけないのか、と寧ろ不満は、此方が露にしたかったほどなのだが。そんな此方の事情など知らないだろう喜六郎は、話し始めるまで、少しばかり間を開けた。

「兄上。そもそも、この状況で私がそう簡単に戻れると思いますか？」
「当たり前だろ。お前はただ家から出て行って、妙な奴らとつるんでいるだけだ。出奔したのは、そりゃあ、色々マズいかもしれないけど」
「いや出奔だけですか？　私、ただ出奔されただけだと思われてる？　いやー、おかしいな前に会った時、色々言っただけどなあ……？」
それは、覚えている。

色々と言っていた言葉も、一言一句。だがそれが今、何の関係があるというのだ。

「——ではまず、前提から。私は家から出ていったのは……どうしてだと思えますか？」

「知るか。僕に分かる訳ないだろ。姉上じゃないんだから」

「……まあ、でしょうな。兄上ならそう言うか。では、質問を変えましょうか。では私がどうして織田家に戻れると思ったんですか？」

「戻れる戻れないじゃない。戻すんだ。お前を」

彼は、自分の、弟だ。

織田家の家族だ。ずっと一緒に過ごしてきた大切な弟だ。自分と姉の近くに彼が居ないのはおかしいから。だから、連れ戻す。

信勝にとって、戻す理由なんてそんな大層な物じゃなくていい。『弟だから』で十分。

無能共を納得させる『いい訳』なんて幾らでも用意できるから。別

に難しい事なんかじゃないし。

「……戻りません、戻れませんよ」

喜六郎は。しかし、その答えに——睨みつけるかのように目を見開き、否と返す。

瞳の奥から、突き刺す様な視線に、一瞬言葉に詰まりそうになつて。それでも……何とか、口を開いた。

「なん、でだ」

「だつて。このまま、なんて可笑しいじゃないですか。我々は、決して特別でも何でもない、ただの人で。普通に愛すればいいだけの話なのに。このままいけば、兄上は姉上の手で——」

その先を、喜六郎は、口にしない。ガツガツと、片足で地団太を踏んで、酷く苛立っている様に見える。しかし、額に手を当てて、天井を仰ぐ姿は、まるでどうすれば良いか、途方に暮れているようにも見えた。

しかし、唐突にその動きは止まって……だらり、と顔に当てられていた手が下りる。

下りた手の奥から覗いた顔は、歯をむき出しにして、大口を開けて、秀隆は笑顔を浮かべ。

「ええだから、だから変えないといけない。我々の様な事が、当然のように、当たり前のように起こっているんですよ？ この広い広い世界で……おかししいじゃあないですか」

「な、何の話をしてるんだよ」

「理由の話ですよ。誰かの愛で誰かが死ぬ。そんな世界は、間違つてる」

ざわり、と肌が泡立つ。

静かで、低い……けれど、燃えるような感情によつて、震える声だった。

「変えなければならぬ。姉上も、兄上も、母上も……日ノ本の民も、外の世界の如何なる人も。誰かを純粋に愛して、愛される。そうなるように」

言つていた。そう言えば。様子の可笑しくなつた喜六郎が自分の

元へ来た時も、似たような事を、楽しげに言っていた。自分が、母を。姉が、自分を。殺さなくていいようにする。そうする。と。変える。

彼は、何度もそう言っていた。それは、軽々しく口にされた言葉だったのか？

——事ここに至り、信勝は、始めてその言葉を、改めて考えた。殺さなくていいようにする、とはどういう意味だ？

多くの家臣を説得するとか。姉の事を母に認めさせるとか。自分が道ずれに家臣を殺そうとしているのを阻止するとか。その何れとも違う別の考えを持っているのだとか。

そういう事だと思っていた。その為に家を出たと、そう思っていたのだ。

そんな事をやらなくていい、と止めたその直後だったから。余計にムキになったというのは、確かにある。だが。

それ以上に、出来をしない事を無理矢理為そうとして…… 大変な事になるのではないかという心配は、あつた。自ら滅びるような道だつて躊躇なく選んで。その結果、もう本当に『家族の問題』では済まない所まで行ってしまうのではないか。

そう思つて、ここまで来ていた。

だがしかし——前提から、違つていたとすれば？

喜六郎が言っている『変える』というのは、一体、何の話なのだ？

信勝は、分からない。まるで——隣の姉の野望を聞いている時のような、そんな感覚だった。信勝には、思い至らない。

「……変える」

「そうですよ」

「何をだ？」

「——そうですね。例えば……兄上」

不意に、こちらと喜六郎の視線がかち合う。

まるで吸い込まれそうな渦の如き瞳。だというのに、何処までも透き通つて見える、不思議なその瞳。気が狂っているように見えて、でもやはり、何時もの秀隆の瞳の様にも見えている。

何方なのか、察する事が難しい。

しかしながら、『曲がる』という事をしない目だという事だけは、分かった。

「……なんだよ」

「人は『飢え』に耐えかねれば一揆を起こす。当たり前です。飢えて死ぬのはいやでしょうからね。では、それをどうすれば解決できるでしょう?」

意外な事に。

そんな彼が問うてきたのは、なんとも平凡な問いだった。

一揆を防ぐのは、土地を収める大名家として当然の行いだ。それを『どうすればいいでしょうか』等と言えるわけがない。

「色々あるだろ、例えば……あんまり、搾り取り過ぎないとか」

「ふむふむ成程。うむ、実に分かりやすく、そして正しい。流石は兄上」

馬鹿にしているのか。と言おうと思ったがしかし。その言葉は、此方から欠片も視線を逸らさない秀隆の姿に、黙殺されてしまう。

此方をずっと覗き込む秀隆の視線は……ずっと、真剣そのもので。寧ろ、下手な事を言えばこちらが、恥をかきそう。そんな予感がする。

しかし。

「では、私の回答を——『飢え無い様にする』」

「……それは、回答じゃなくて、結果じゃないか」

「いいえ? 兄上。人間が『飢え無く』なる」

「食物を必要としなくなれば、良いのではないかと思うのですよ」

飛んできたのは、そんな予感を遥かに超える……否、下回る、まるで子供のような答えだった。押揃っているのか。こっちは真剣に答えたというのに。色々な苛立ちが口を突いて出ようとしてくる。

「お前な、ふざけているのか。人は腹が減ったら——」

「飢えて死ぬ。それは当然。しかし……それは、今の『人』の形に過ぎません」

だが。

彼の笑顔に、その先の言葉は封殺された。

「人の形を、変えれば宜しい」

「……何を言ってるんだお前」

「例えば、木や果実は、飯を食わずとも、雨と日があれば大きく育つ。人もそのようにすればいいではないですか」

「そ、そんな事、出来るわけ——」

「だから、そのように人を『変える』のですよ。例えば、ね」

喜六郎は、此方を見ている。

じつと見ている。一步も目を逸らさない。

だからこそ……彼の言葉に、少しゾツとした。

そんな事出来る訳ない、だとか。そんな言い訳をしているのではなく。秀隆は人を『そうする』と言っている。本気で言っている。出来ると言っているのだ。

人とというモノを、姿形が同じだけの、全く別の何かに変えてしまふという事を。喜六郎は、今、口にした。

「……か、変える、って」

「信じられないかもしれないかもしれませんがねえ。いえ、信じてもらわなくてもいいです。私が実際に成せばいいだけの話ですから」

「人を、変えれば、いい話ですから」

目の前で、喜六郎は——織田秀隆は、また笑って見せた。

ただ。先ほどよりも。

裂けるように。

獣のように。

怒っているように。

口を大きく開いて。顔中をしわくちやにした。

ぐるぐると渦巻く信勝の背筋が、冷えるほど。

とても綺麗で、凶暴な。満面の笑顔だった。今すぐにもこちらに笑いながらかみついてきそうな。そんな笑い方だった。

心の底から浮かんできた、とてもはつきりとした笑い方だった。

「人の在り方を」

燃えるようで。輝くようで。そして、呪われているようで。その笑

顔を見て、秀隆が与太話をしている、等と思えるような者はいない。あの笑顔に、何かを奪われる様な気がした。足元から、何かが這い回ってきて、体の中身を、少しずつ吸い出されていつている。自分の中から、大切な何かを引きずり出されて行つて。

薄っぺらい、張り付けたような笑顔などではない。自分の思いを滾らせ、そして湧き上がってきたものを、此方に叩きつけるような。

そんな、弟の『熱』をそのまま形にしたような表情。

ここで。信勝は、始めて分かった。

「そして人という種そのものを……私が気に入らない全てを、ぶつ潰して、壊して、変える。その為の力。その為の今、ですよ」

喜六郎は——否、秀隆はここで『勝負』をしに来たのだ。

謀反をしに来たのではない。

裏切りを働こうなんてしていない。

そもそもそんな小さな話をしていない。

信勝には、今の言葉を聞いて。それでも尚。秀隆がどんな事をしようとしているか、いまいち、分からない。

ただ——自分では到底分からない程に、大きな、大きな、大きな勝負を仕掛けようとしている事だけは、分かった。今、自分と、姉の前で。

自分の中の、『当たり前』が崩れてしまう、そんな大きな。大きな勝負を。

「人を『進化』させる。愛ゆえの苦しみも、悲しみも、痛みも、皆全てが、何もかも自らの手で振り切つて、互いを愛し、希望を以て、生きる。そんな無限の可能性の果てにある輝かしい命に——!!」

のぼせ上がっている。そんな訳がない。今、秀隆はどれだけ必死な顔をしているのだろうか。

何か、大きなモノを、背負っている。

自分とはまるで、大ききの違う何かを、今、弟は軽々とその背に背負っている。

大地よりも尚、巨大で、巨大で、大きさが想像もできない程の何か。

今、弟の背中から覗いている。此方を。見ている、目が合っている。見える、見えてしまった——!!

真っ赤な。真っ赤な影だ。

洞窟一杯広がる様な、大きな影だ。翠の光を纏った、巨大な影だ。紅葉の様な形の頭をした人型が、秀隆の後ろから、此方を覗き込んでいる。

陽炎の様に儂げに揺らいでいるのに、しかし目が離せない。寧ろ、此方が気圧されてしまう。影から立ち上る光が、この洞窟全体に満たされていく。

ただの幻覚か。一瞬、そう思った。自分が秀隆に気圧されたから見た、幻覚。

しかし……違う気がした。あの赤い影は、秀隆の後ろから……まるで、秀隆の体に絡みつくように、その姿を、絡ませていつているではないか。まるで、影そのものが生きていくかのように。

「う」

睨みつけられている。赤い影に。何も考えられないまま、此方にまで、赤い影は伸びてきて……取り囲まれて。

目から、耳から、口から。自分の奥底をへと入り込んでくる。

自分の体の奥から、手足の先まで。まんべんなく根を張ろうとしてくる。

ずるずるずるずるずるずるずる

そんな音が聞こえて来る。

自分の中に、何か自分で無いものが入り込んでくる。足が震えてくる。自分が、自分でなくなっていく。

分かった。先程、自分の中の何かを引きずり出そうとしていたのは、これだ。あの時から、自分に纏わりついていたので。

もう無理だ。あの影の目の前に、立っていられない——

「ふん。『人』を作り変える、か。秀隆」

——けど、そんな中で。

「お前、神のような事を言うではないか。たかが人風情が」

同じくらい。熱い。そして、揺るがない。涼やかな声を、聞いた。

降臨

「ふん。『人』を作り変える、か。秀隆」

恐怖とは、人間を容易に動けなくしてしまう。

両手、両足の指の先に至るまで。どうしようもない震えに支配されて、動けなくなってしまう。それは——怖い、助けて欲しい、殺されてしまう、本能が上げる悲鳴に押しつぶされて、心が負けていたから。

「お前、神のような事を言うではないか。たかが人風情が」
ただ立っていた。

秀隆から押し寄せてくる赤と翠の影、その奔流の中に立つて尚。まるで川の中の岩の如く、動かないのだ。

その流れを自らが引き裂くが如く。

背筋を伸ばして、胸を張って。けれど、緊張しているようには見えない。片方の腰に置いた手、だらりと下げた手、まるで散歩の途中、どこか遠くの景色を見つめている時の様で。そよ風の中で、のんびり髪を靡かせていても別に違和感のない姿だった。

自然体。いつも通りに見えて、しかしながら……それでも、金剛の如く不壊、真剣なのはその瞳を見ればわかる。秀隆と視線を合わせ、逸らさない、瞳を見れば。

秀隆がどろりとした清い沼ならば。その目は、燃え盛る灼熱地獄の如く、ギラギラと眩しい程輝いている。

そんな目を見た事は無かった……と言えは？になる。だが、ここまで燃え盛っていたのは信勝とて、始めて見た。自分の中の何かを燃やしているかのような。

体全身が、ぞわり、粟立った。

それは恐怖からではない。今、彼女の全身から溢れ出している彼女の『存在感』に魅せられたから。今までも、姉は当主に相応しい。圧倒的な才覚を秘めている、と思っていたがしかし。

その全貌を見たのは、コレは初めてかもしれなかった。

あらゆるモノに従わず。逆にあらゆる者の目を灼き、彼女以外の輝

きなんて見えない程にさせてしまう。魔性の魅力。狂気に駆り立てる程の。

一つ間違えれば、全てを破滅させてしまう様な。

今、それが——人を『魅せる』信長の姿が秀隆の影の恐怖から、信勝を解き放った。

「人風情とは——思っても居ない事を」

「貴様だけだ。俺が言うのはな」

「おやおや手厳しい。何ともまあ、手厳しい事で」

姉には。信長には——秀隆の背負うモノが見えているのだろう。赤いあの影が。到底敵わないと思わされた、あの影が。自分に見えて、姉にアレが見えていない訳が無い——それでも、一步、前に踏み出した。

一步どころではない。さらに、二歩、三歩と。

睨み返しながら、更なる数歩を踏み出して見せたのだ。

その姿は、あんまりにも揺らがなかった。あんまりにも頼もしかった。そして、あんまりにも偉大だった。

「人に苦しみを残した紳仏と一緒にしてほしくは無いですなあ。私は、その更に先へと至る。古き支配者の残した『宿題』を、私が片付けるのですよ」

「だとしても」

秀隆は。とんでもないモノを背負ってここに立っている。

信長は。背負ったソレを見つめても尚、まるで怯まない。

「それは『人』が己で成し遂げる事。お前一人で魅せるものではないぞ、秀隆」

一瞬、靡く髪が、赤に染まった気がした。

自分に纏わりつく赤とも違う、しかしながら決して負けない程の赤。

赤い髪がきらりと煌めいたその一瞬。その姿に——ダブる、像が見えた。それは、嘗て秀隆が自分に届けたあの絵のそのままに。

腰よりも伸びた赤い髪。

全身を覆う鎧には織田家の家紋、織田木瓜。

我が身を頂点と疑わず、不敵に笑うその姿。

ただの一大名等と。誰が彼女を見て思うだろうか。

それは、この渾沌とした、戦乱の天下を総べるに足る、大いなる『魔王』の姿だった。

「——くかかかかかっ!!」

秀隆は——より一層、笑った。

「成程、やはり貴女だ！ 私が越えねばならぬのは！ 人の進化を『教えて』阻むのは貴女ぐらいしか考えられない！ 我が姉、織田信長！」「やかましい。良いから黙って見ておれ。お前がそんな必死にならずとも、待つておればそれなりにはなるわ。人も」

「それではあまりにも遅すぎると言っているのですよオ、姉上エー！」

今の姉を見て。いったい誰がそんな『挑戦的』に笑えるのか。それほど威風を纏う姉に対し。しかし秀隆はまるで退かない。寧ろ、向こうもさらに一步を踏み出しそうな程に昂っている。

今、この場で。対等に張り合っているのは——二人だけだ。あの間に一体、他の誰が割り込めるだろうか。

歯ぎしりを一つ。

悔しかった。

自分はここで立っているしかない。秀隆の目の前に立ってやることも出来なければ、姉の傍にいる事だって出来ない。たった二人の大切な姉弟が向き合っているというのに。誰よりも自分はあそこにいなければならぬのに。

自分は何も出来ず、ただ後ろから見つめる傍観者でいる事しか出来ない。信じられない位に今、信勝は無力で。そんな自分を、今こそ、無能と何度も何度も罵りたかった。

だけど。

「そんな事をしている暇なんて……ないだろ」

自分は確かに無能だ。だけど……せめて、少しは真面目な無能でありたかった。ここで何もせずただ嘆いているなら、自分は呪う程に嫌いなあの本物の無能共と同じ、生きている事も許されない糞に成り下がる。それだけは、それだけは、御免だった。

せめて姉の迷惑にならない様に。足を引つ張る無能と共に沈むことを考えた。弟が苦しくない様に、彼が苦しむ原因を全て、取り除いてやろうと思った。大切な二人を思つて行動した分、自分はいつらよりもほんの少しだけ、真面だ。

そうありたかつた。信勝にとつてそうできた事は、せめてもの『誇り』だつた。だからここで……それに泥を塗る様な真似だけはしたくなかつた。

「っ!!」

渦のように、様々な感情が一つへと集約されていく。

そしてその思いが、遂に信勝の足を動かした。一步踏み出して……後ろへと走る。今の弟と真正面から向き合えるのが姉だけならば、その邪魔をさせない事が、自分のやるべき事だろう、と。

咄嗟だつた。

自分と同じように、全く動けていなかった勝家の元へと駆け寄つた。

「——権六っ!!」

「あ……あ、のぶ、かつさま」

「しっかりしろ! 兵の指揮は僕がする! お前は、お前は姉上を守れ!!」

声にもならない、絶叫になりそうな思いを、必死に言葉に変えた。

あの間に踏み込めない事が余りにも無念で。それでも、何もしない事だけは出来なかつたから。自分で出来ないなら。彼は、最後の可能性に賭けた。

今、この場で、最も強い者を、最も『強い』者の護衛につけるのは、自分の考えうる限りの最適解だと思つたから。

だから、非力なこの腕で、兜の上からでも、勝家の頬を張つた。

「——行け!」

「……ははあっ!」

一瞬の事だつた。

呆けていたのか、?まっていたのか。何れにしても、動きを止めていた勝家は、その咤に応えて、地面を蹴つた。岩肌がその一蹴りで

ひび割れる程の踏み込み。そしてそれが生む轟音と震えが、他の兵士たちの目を覚ます。

しかし、彼らが慌てて槍を構えるその前に、既に勝家は信長と秀隆の間に入り込み、己を盾にしながら、引き抜いた大太刀を正眼にて構える。

「秀隆様……！」

「様は要らん。私は敵だぞ、柴田勝家殿」

「……いえ、敢えて、秀隆様、と！」

「全く真面目な事。良いだろう。好きに呼べ！」

鬼柴田。最早こうして覚悟を決めた彼が目の前に立ったのだから、そう容易くは突破もされまい。取り敢えず、一息。

その背を見て——信勝は、一瞬、信長が笑ったように見えた。

だが、それも一瞬の事。

「勘十郎め、余計な真似を——良い……良いぞ、信勝！」

「は、はいっ！」

「この『戦』より目を逸らすな！　そこに居ろ！　どうせ死ぬつもりなのなら、死ぬ気で目に焼き付けてから冥府に行け！」

びりびりと、肌には挿す様な大声は、信勝の下っ腹にまで響いてくる。

姉が大きく笑ったりする声は聞いた事がある。だけど……ここままで、大きな声を出されたのは初めての事で。思わず、体が硬直してしまふ。

けれど。まだやれる事があるなら。

「は、はいっ！」

応えた。

決して目を逸らさぬと決めた。姉がそこまで言うのだから。

目を逸らすつもりも元から無いけれど。だってこれは、もう元から勝ち戦だ。確かに秀隆も、あの後ろに立つ影も、きつと普通ではない。だけども。

『姉上なら、何とかしてくれる』

そんな根拠も何もないような思い。

秀隆も。あの後ろの影もきつと何とかしてくれて——きつと、何も

かもが上手くいく幸福な結末に導いてくれる、という信頼がある。

だって、姉上が本気なのだから。

あの日、僕に柿を取ってくれたように。

失敗なんてありえない。すると上って、勝ちをもぎ取って投げ
てくれる。姉上は凄いのだから――

「――姉上、何を申すのです。戦う等と。やめませぬか？」

そう、思っていた。

「何？」

「私は戦うつもり等ございません。ただ、分かって欲しいだけだとい
うのに」

姉上がこれ以上無きまで気炎を上げている。

勝家が真剣に自らの敵を見据えている。

明確に、今、秀隆は、二つの『敵』を目の前にしている。そして彼
自身も、昂っているのは分かりやすい。だというのに。

秀隆に、未だ……敵意というものは見えない。

「……今更喧嘩したくない、等と言っている訳ではないだろうな」

「当然。今更も何も、ずっと申しているではありませんか。『ご招待』
したい、と」

「戦いたい相手にする言葉ではないな、確かに」

「当然です。私は、姉上達と『協力』する為に、こうしてここに居るの
ですから」

秀隆は両手を広げ。

突きつけられた大太刀も、勝家も、信長も、受け入れてやる、とで
も言いたげにしている。その姿勢に、姉は初めて、その眉をひそめた。

「……何？」

「我が力は誠に世界を変えるだけの力があり……そして、姉上にご協
力いただくのに十分値するものだ。それを示すために招待したの
です。だって、姉弟仲良く、世界を変えられたら、それが一番宜しい
でしょうに」

「理想ばかり語りおって、そんなもの」

「その理想を押し通すための、この力ですよ……!!」

信勝には、信じられなかった。目の前の光景が。

赤い影が、更に肥大化する。

そして、翠の光が更に溢れる。否、押し寄せてくる。

赤い影は最早、山の如く。洞窟にいつぱいに、とかそういう話ではない。もはやこの洞窟からはみ出す勢いで。

翠の光は、既に大河の如き勢いでこちらに押し寄せて、飲み込まれそうだ。

そして——漸く分かった。翠の光はあの赤い影だけから来ている訳ではない。その更に後ろから。秀隆の後ろに、何かがある。その源がある。

ぼう、と浮かび上がる。それは——

「……曼荼羅、凶だど？」

「ご明察。しかし姉上、コレはただの曼荼羅図にあらず！」

異形、異形、異形、何処をとっても異形——！

「これこそ外世界の法則。宇宙を満たすゲッター線！ その業を我が筆にて顕した『ゲッター曼荼羅図』!!」

「ゲッター曼荼羅だど……!?!」

御仏の姿は一切なし。

中心に座すのは、目の前の赤い影にも似た鬼の如き異形が一つ。そしてそれを取り囲むのも、赤、白、黄色の異形ばかり。中心から伸びた翠に彩られ。黄金の六角に縁どられたそれは——確かに、仏教の世界を表す『曼荼羅図』に相違なく。

しかし奇抜、奇異なのは見た目だけではなく。人一人の背丈を容易に越す程の大きさもそうだろう。越す、どころか、人二人、否三人は肩車をしないと、上まで届くまい。

その大きさに、しかしながら雑な仕事をしている部分は何処にも見えない。この距離でも異形の目から、指先、あふれ出す緑の光や、それぞれの『界』までが、緻密に描かれているのが分かる。

これだけの大きさに、これだけの細かい書き込みを行うとなれば、一体何年かかるといえるのか。

「……これ、お前が描いたのか」

「おや良くお分かりで。流石兄上。私の『最高傑作』です。故に……少しばかり、元氣過ぎるのが難点ですが」

この巨大な一枚絵が、秀隆の作品だとすぐさま分かったのは。幾度となく彼の作品を見ていた信勝だからこそか。

しかし。あまりの巨大さ。そしてその絵全体から発せられる圧力。美しいと思えるほどの色鮮やかな絵だというのに。これを『凄い』とは素直に思えなかった。恐怖とも、悍ましさとも取れる『畏怖』。今、信勝の胸の中で渦巻く感情はまさにそれだ。

凄まじい圧力の絵画。細かく、装飾の一つ一つまで描き切られた何体もの異形が皆、此方を見ている気がした。たかが絵だというのに、此方が睨まれているような気がした。

そして、巨大な絵画から溢れだす、翠の光の濃さたるや。

洞窟内に満ちていた光は、全てアレが由来だったのか。それほどに、あふれ出す光は強く、多く、そして何処までも伸びていく。

まるで、あの絵そのものが門の様だ。

あの翠の光を導くための、巨大な門のようにも見える。

「言ったでしょう。準備は整ったと。この『ゲッター曼荼羅図』こそ我が最高傑作にして世界を変える楔——我がゲッター線は今までにない高まりを見せております」

「それがお前の可笑しな力の源のようだな。であればそれを焼くなり割くなりすれば、俺の勝ちか」

「出来れば、ですがね……お見せしましょう。ゲッター線の力。そして、その力が本当に『人を作り変える』に相応しい事を。我が身は、外なる機怪からの力を受けた『降臨者』ふおうりなあなれば！」

その目の前で笑う秀隆に。

底というモノは、まるで見えない。

あの日姉がのぼった柿の木……今それは、深い深い大峡谷の底に、生えているとでもいうのだろうか。

曼荼羅図

赤い影。

そして秀隆。

三つの輝きが一つへと渦を巻き、更に大きな光へと変わる。更に肥大化する。更に濃さを増していく。ぐにやりと、景色が歪んでいく。

翡翠の輝きに満ちた異界より更に変わりゆく、異様な光景の中、秀隆は高らかに告げた。

「さあ存分に！ お試してください！ ゲッターの力というモノを！」